
毛 呂 山 町

中 尾 遺 跡

地方特定道路（改築）整備工事（主要地方道飯能寄居線）関係
埋蔵文化財発掘調査報告

2 0 1 1

埼 玉 県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 中尾遺跡全景 空中写真（上が北）



2 第7号住居跡出土遺物

なか お 中尾遺跡の紹介

中尾遺跡は埼玉県入間郡毛呂山町もろやまの南部、葛川に開析された細長い台地上にあります。

今回の調査では、奈良・平安時代の住居跡7軒、古代から近世の土壌68基、屋敷を区画するような近世の溝跡などが見つかりました。住居跡のうち1軒は鍛冶炉かじろを備え、鞆ふいごの羽口はぐちや鉄を鍛えるときに飛び散る鍛造剥片たんぞうはくへんなどが出土したことから、鍛冶工房跡と考えられます。

毛呂山町の南側に位置する日高市や飯能市を中心とする一帯には、霊亀二年れいき(716)、各地に住んでいた高麗人こま〔朝鮮半島にあった高句麗こうくりから亡命してきた人々とその一族〕を移し、高麗郡こまぐんという新しい郡が置かれます。この事実は、本地域の歴史を考える上で重要です。何故なら、高麗郡の設置を契機として、周辺では高麗人が携えてきた高い技術による土地の開発が進み、平安時代にかけてムラが急増していくからです。中尾遺跡や隣接する東原遺跡ひがしはらなどでも、奈良時代に突如としてムラが営まれたします。そこに暮らした人々の中には、鍛冶の技術を持った人もいたのです。

中尾遺跡と東原遺跡のムラが高麗郡に含まれるかどうか、現在のところ明らかではありませんが、その出現の背景に、高麗郡の設置が深く関わっていたことは間違いありません。高麗氏の氏寺と考えられる大寺廢寺おおでらはいじが、遺跡のすぐ近くに建立されている点も見逃せません。

序

埼玉県では、「人と自然にやさしい道づくり」を道路整備の基本理念に掲げ、「時間が読める道づくり」「安心と活力の道づくり」の推進に努めています。

主要地方道飯能寄居線のバイパス建設工事もその一環で、道路交通網の整備、地域間交通の円滑化、慢性的な交通渋滞の解消を図るため、計画的に整備が推進されています。また、建設予定地周辺には、先人たちの歴史を今に伝える数々の遺跡があり、これまでも開発事業の実施に先立ち、継続的に発掘調査が行われております。

今回のバイパス建設事業地内にも、東原遺跡・中尾遺跡・新田東遺跡が隣接して存在し、その取り扱いについては、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。発掘調査は埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

中尾遺跡の調査では、奈良・平安時代の竪穴住居跡群などが発見されました。うち1軒は鍛冶工房跡で、鍛冶炉や羽口、鍛造剥片などが残されていました。また、住居跡の分布状況から、集落跡は細長い台地の南側緩斜面に広がっていることが分かりました。本遺跡を含め、周辺に展開する古代の集落遺跡群は、地域の歴史を考えるうえで貴重な情報を発信するものといえます。

本書は、これらの発掘調査の成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護、ならびに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、広く活用いただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、埼玉県県土整備部道路街路課、飯能県土整備事務所、毛呂山町教育委員会ならびに地元関係者の皆様に厚く感謝申し上げます。

平成23年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 藤野 龍 宏

例 言

1. 本書は、入間郡毛呂山町葛貫に所在する中尾遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番、及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。
中尾遺跡（NK O）
入間郡毛呂山町大字葛貫 463 番地 1 他
平成 15 年 10 月 6 日付け 教生文第 2 - 46 号
3. 発掘調査及び整理報告書作成事業については、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
それぞれの委託事業の名称は、下記のとおりである。
発掘調査（平成 15 年度）
「県道飯能寄居線（毛呂山町地内）建設事業
関係埋蔵文化財発掘調査委託」
整理報告書刊行（平成 22 年度）
「地方特定道路（改築）整備工事（中尾遺跡埋蔵文化財発掘調査（整理）業務委託）」
4. 発掘調査・整理報告書作成事業は I - 3 に示した組織により実施した。
発掘調査事業は、富田和夫・田代雄介が担当し、平成 15 年 9 月 22 日から平成 15 年 12 月 26 日まで実施した。
整理報告書作成事業は剣持和夫が担当し、平

- 成 23 年 1 月 4 日から平成 23 年 3 月 31 日まで実施した。平成 23 年 3 月末に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 381 集として印刷・刊行した。
5. 発掘調査における基準点測量は、株式会社未央測地設計に委託した。
6. 発掘調査における空中写真は、朝日航洋株式会社に委託した。
7. 発掘調査における写真撮影は各担当者が行った。整理報告書作成における出土遺物の写真撮影は剣持が行い、福田聖の協力を得た。
なお、巻頭図版の遺物写真撮影は、小川忠博氏に委託した。
8. 出土品の整理・図版作成等は主に剣持が行い、鍛冶関係については赤熊浩一の協力を得た。
9. 本書の執筆は、I - 1 を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が行い、その他を剣持が行った。
10. 本書の編集は剣持が行った。
11. 本書にかかる諸資料は、平成 23 年 4 月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
12. 発掘調査や本書の作成にあたり、下記の機関・皆様から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。（敬称略）
毛呂山町教育委員会
佐藤春生 中平 薫

凡例

1. 遺跡全体におけるX・Yの数値は、世界測地系、国土標準平面直角座標第IX系（原点北緯36° 00′ 00″、東経139° 50′ 00″）に基づく座標地を示す。また、各挿図に記した方位は、全て座標北を指す。

G-5グリッド北西基準杭の座標値・緯経度
X=-8000.000m Y=-46250.000m
北緯35° 55′ 36″ 東経139° 19′ 15″

2. グリッド名称は北西隅を基点とし、北から南へアルファベット（A・B・C・・・）、西から東へ算用数字（1・2・3・・・）をそれぞれ付し、両者を組み合わせ、「G-5グリッド」のように呼称した。

3. 本書の本文・挿図・表・写真図版に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

S J・・・ 竪穴住居跡 S D・・・ 溝跡
S K・・・ 土壇 P・・・ ピット・柱穴

4. 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。

遺構図

全体図・・・ 1/500・1/300（部分）
竪穴住居跡・・・ 1/60・1/10（鍛冶炉）
溝跡・・・ 1/200（平面）・1/60（断面）
土壇・・・ 1/60

遺物実測図

土師器・須恵器・・・ 1/4・1/8
縄文土器・・・ 1/3 瓦・・・ 1/4
石製品・・・ 1/2・1/3・1/8
鉄製品・・・ 1/2 羽口・鉄滓・・・ 1/4

5. 遺構断面図等に記した水準数値は、全て海拔標高（単位m）を示す。

6. 遺物観察表に記した略号は、以下のとおりである。

胎土

A角閃石 B長石 C石英
D赤色粒 E白色粒 F黒色粒
G針状物質 H小礫

焼成

I良好 II普通 III不良

7. 遺物観察表に記した残存率は、図示した器形における割合を目測した数値、（ ）を付した法量は、反転実測や推定の数値である。

8. 遺物観察表に記した色調は、全て農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』によった。

9. 本書に掲載した地図類は、国土地理院発行1/25000・1/50000地形図、および毛呂山町都市計画図（1/2500）を編集・使用したものである。

目次

巻頭図版

中尾遺跡の紹介

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	IV 遺構と遺物	14
1. 発掘調査に至る経過	1	1. 住居跡	14
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	2. 溝跡	35
3. 発掘調査・報告書作成の組織	2	3. 土壌	40
II 遺跡の立地と環境	3	4. ピット	48
1. 地理的環境	3	5. グリッド出土遺物	48
2. 歴史的環境	5	V 調査のまとめ	51
III 遺跡の概要	8	1. 調査の成果	51

写真図版

挿 図 目 次

第1図	埼玉県の地形	3	第17図	第6号住居跡・出土遺物	26
第2図	周辺の遺跡分布	4	第18図	第7号住居跡	28
第3図	基本土層図	8	第19図	第7号住居跡出土遺物(1)	29
第4図	調査区位置図	9	第20図	第7号住居跡出土遺物(2)	30
第5図	調査区全体図	10	第21図	第7号住居跡出土遺物(3)	32
第6図	調査区全測図(1)	11	第22図	第7号住居跡砂鉄・粒状滓・ 鍛造剥片分布図	34
第7図	調査区全測図(2)	12	第23図	溝跡(1)	37
第8図	調査区全測図(3)	13	第24図	溝跡(2)	38
第9図	第1号住居跡・出土遺物	15	第25図	土壇(1)	41
第10図	第2号住居跡・出土遺物	17	第26図	土壇(2)	42
第11図	第3号住居跡	19	第27図	土壇(3)	43
第12図	第3号住居跡出土遺物(1)	20	第28図	土壇(4)	44
第13図	第3号住居跡出土遺物(2)	21	第29図	土壇(5)	45
第14図	第3号住居跡砂鉄・粒状滓・ 鍛造剥片分布図	22	第30図	土壇(6)	46
第15図	第4号住居跡・出土遺物	23	第31図	溝跡・土壇・ グリッド出土遺物	49
第16図	第5号住居跡・出土遺物	25			

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧表	5	第9表	第6号住居跡出土遺物観察表	27
第2表	第1号住居跡出土遺物観察表	16	第10表	第7号住居跡出土遺物観察表(1)	31
第3表	第2号住居跡出土遺物観察表	16	第11表	第7号住居跡出土遺物観察表(2)	33
第4表	第3号住居跡出土遺物観察表(1)	21	第12表	第7号住居跡砂鉄・粒状滓・ 鍛造剥片検出量一覧表	34
第5表	第3号住居跡出土遺物観察表(2)	21	第13表	土壇計測表	47
第6表	第3号住居跡砂鉄・粒状滓・ 鍛造剥片検出量一覧表	22	第14表	溝跡・土壇・グリッド 出土遺物観察表	49
第7表	第4号住居跡出土遺物観察表	24	第15表	ピット計測表	50
第8表	第5号住居跡出土遺物観察表	25			

写真図版目次

巻頭図版	1	中尾遺跡全景 空中写真	2	調査区全景(2)
	2	第7号住居跡出土遺物	3	調査区全景(3)
図版1	1	調査区全景(1)	4	調査区南半部全景(1)

	5	調査区北東部全景		2	第1号溝跡(2)
	6	調査区中央部土壙群		3	第2～5号溝跡
	7	第1号住居跡(1)		4	第2号溝跡
	8	第1号住居跡(2)		5	第3号溝跡
図版2	1	第1号住居跡カマド		6	第4号溝跡
	2	第1号住居跡遺物出土状況(1)		7	第5号溝跡
	3	第1号住居跡遺物出土状況(2)		8	第7号溝跡
	4	第1号住居跡遺物出土状況(3)	図版7	1	第5号土壙
	5	第1号住居跡遺物出土状況(4)		2	第6号土壙
	6	第2号住居跡		3	第7・11・12・14・15号土壙
	7	第2号住居跡カマド		4	第13・23号土壙
	8	第3号住居跡		5	第16・17号土壙
図版3	1	第3号住居跡カマド		6	第18～20号土壙
	2	第3号住居跡遺物出土状況(1)		7	第21・22号土壙
	3	第3号住居跡遺物出土状況(2)		8	第24号土壙
	4	第3号住居跡遺物出土状況(3)	図版8	1	第25・26号土壙
	5	第3号住居跡遺物出土状況(4)		2	第25号土壙
	6	第3号住居跡鍛冶炉跡(1)		3	第26号土壙
	7	第3号住居跡鍛冶炉跡(2)		4	第29号土壙
	8	第3号住居跡鍛冶炉跡断ち割り		5	第42・43号土壙断面
図版4	1	第4号住居跡		6	第45号土壙
	2	第4号住居跡カマド		7	第46号土壙
	3	第4号住居跡遺物出土状況(1)		8	第47号土壙
	4	第4号住居跡遺物出土状況(2)	図版9	1	第49・50号土壙
	5	第4号住居跡遺物出土状況(3)		2	第51号土壙断面
	6	第5号住居跡		3	第51号土壙
	7	第5号住居跡カマド		4	第52号土壙
	8	第5号住居跡遺物出土状況		5	第57号土壙(1)
図版5	1	第6号住居跡		6	第57号土壙(2)
	2	第6号住居跡遺物出土状況		7	第65号土壙(1)
	3	第6号住居跡カマド1(1)		8	第65号土壙(2)
	4	第6号住居跡カマド1(2)	図版10	1	第1号住居跡(第9図1)
	5	第6号住居跡カマド2		2	第1号住居跡(第9図2)
	6	第7号住居跡		3	第1号住居跡(第9図3)
	7	第7号住居跡遺物出土状況(1)		4	第1号住居跡(第9図4)
	8	第7号住居跡遺物出土状況(2)		5	第1号住居跡(第9図5)
図版6	1	第1号溝跡(1)		6	第1号住居跡(第9図6)

	7	第2号住居跡 (第10図)	図版15	1	第7号住居跡 (第19図11)
	8	第2号住居跡 (第10図5)		2	第7号住居跡 (第19図12)
図版11	1	第3号住居跡 (第12図1)		3	第7号住居跡 (第19図13)
	2	第3号住居跡 (第12図2)		4	第7号住居跡 (第19図)
	3	第3号住居跡 (第12図3)		5	第7号住居跡 (第19図)
	4	第3号住居跡 (第12図4)		6	第7号住居跡 (第19図)
	5	第3号住居跡 (第12図5)		7	第7号住居跡 (第19図29)
	6	第3号住居跡 (第12図6)		8	第7号住居跡 (第19図32)
	7	第3号住居跡 (第12図7)	図版16	1	第7号住居跡 (第19図35)
	8	第3号住居跡 (第12図10)		2	第7号住居跡 (第19図)
図版12	1	第3号住居跡 (第12図11)		3	第7号住居跡 (第19・20図)
	2	第3号住居跡 (第12図)		4	第7号住居跡 (第20図39)
	3	第3号住居跡 (第12図15)		5	第7号住居跡 (第20図)
	4	第3号住居跡 (第12図)		6	第7号住居跡 (第20図42)
	5	第3号住居跡 (第12図20)		7	第7号住居跡 (第20図43)
	6	第4号住居跡 (第15図1)	図版17	1	第7号住居跡 (第20図44)
	7	第4号住居跡 (第15図2)		2	第7号住居跡 (第20図45)
	8	第4号住居跡 (第15図3)		3	第7号住居跡 (第20図46)
図版13	1	第4号住居跡 (第15図4)		4	第7号住居跡 (第20図)
	2	第4号住居跡 (第15図7)		5	第4号溝跡 (第31図)
	3	第4号住居跡 (第15図)		6	第65号土壌 (第31図3)
	4	第2～4号住居跡 (第10・12・15図)		7	グリッドほか (第31図)
	5	第5号住居跡 (第16図1)		8	グリッドほか (第31図)
	6	第5号住居跡 (第16図2)	図版18	1	第3号住居跡 (第13図)
	7	第6号住居跡 (第17図1)		2	第7号住居跡 (第21図)
	8	第5・6号住居跡 (第16・17図)		3	第7号住居跡 (第21図)
図版14	1	第7号住居跡 (第19図1)		4	第3号住居跡砂鉄
	2	第7号住居跡 (第19図2)		5	第3号住居跡粒状滓
	3	第7号住居跡 (第19図3)		6	第3号住居跡鍛造剥片 (砂鉄剥片)
	4	第7号住居跡 (第19図4)		7	第3号住居跡鍛造剥片 (鉄粒剥片)
	5	第7号住居跡 (第19図5)		8	第7号住居跡砂鉄
	6	第7号住居跡 (第19図7)		9	第7号住居跡粒状滓
	7	第7号住居跡 (第19図8)		10	第7号住居跡鍛造剥片 (砂鉄剥片)
	8	第7号住居跡 (第19図10)		11	第7号住居跡鍛造剥片 (鉄粒剥片)

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、「ゆとりとチャンスの埼玉プラン」における「総合交通体系を整備する」という基本目標に基づき、本県の活力を高め、県民誰もが快適かつ安心・安全に利用できる公共交通網や道路網の整備を推進している。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、こうした県が実施する公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

主要地方道飯能寄居線建設事業に伴う埋蔵文化財の所在及び取り扱いについては、平成 11 年 2 月 19 日付け道建第 635 号で県道路建設課長（当時）から照会があった。

県文化財保護課（当時）では、試掘による確認調査を実施し、その結果、埋蔵文化財の所在が明確になったことから、平成 12 年 11 月 7 日付け教文第 792 号で次の内容の回答を行った。

1 埋蔵文化財の所在

名称：中尾遺跡（No.26-011）

種別：集落跡

時代：平安

所在地：毛呂山町大字葛貫 448-6 他

2 法手続について

周知の埋蔵文化財包蔵地内で工事をする際には、事前に文化財保護法第 57 条の 3 の規定に基づく発掘通知を提出してください。

3 取り扱いについて

工事計画上、やむを得ず埋蔵文化財の現状を変更する場合、事前に記録保存のための発掘調査を実施してください。

道路建設課と文化財保護課は、埋蔵文化財の保存について協議を重ねたが、現状保存は困難との結論に達したため、記録保存の措置を講ずることになった。また、発掘調査は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が受託することになった。

埼玉県知事から提出された発掘通知（文化財保護法第 57 条の 3：当時）に対する県教育委員会教育長からの勧告は、平成 15 年 10 月 6 日付け教文第 4-598 号で通知した。また、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された発掘調査届（文化財保護法第 57 条 1 項：当時）に対する県教育委員会教育長からの指示は、平成 15 年 10 月 6 日付け教文第 2-46 号で通知した。

（生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

中尾遺跡の調査は、平成15年9月22日から同年12月26日まで、2,700㎡を対象に実施した。

9月下旬、調査区に安全対策の囲柵を施した後、重機による表土除去作業を開始、併行して事務所設置を行った。

表土除去の後、人力による遺構の確認・埋土の掘削など精査に着手した。検出した遺構は基準点測量の成果に基づき、順次土層断面図・平面図・遺物出土状況図を作成、また写真撮影を行った。

遺構の精査終了に伴い、12月上旬には空中写真撮影、下旬には調査区の埋め戻し・事務所撤去・事務手続き等を行って調査を終了した。

(2) 整理報告書作成

上記の発掘調査に係る整理・報告書作成作業は、平成23年1月4日から3月31日まで実施した。

作業は出土遺物の水洗・注記の後、直ちに接合・石膏による補強復元を開始した。復元を終えた遺物は、順次機械や手測りによる実測・手描きトレ

ース・採拓を経て、遺構ごとに印刷用の図版組みを行った。

また、2月上旬には、図版掲載用の写真を撮影した。遺物写真は、現地で撮影した遺構写真とともにコンピューターへ取り込み、画像編集ソフトを用いてトリミングや色調整を施したうえ、レイアウトして印刷用の図版とした。

同時に、発掘調査で記録した各種の図面は、照合・修正を加えた第二次原図を作成し、スキャナーでコンピューターに取り込んだ。その後、画像編集ソフトを用いて遺構ごとにトレースし、これに土層説明等のデータを組み込み、レイアウトして印刷用の図版を作成した。

2月下旬までに原稿執筆・編集を終え、印刷業者を選定して入稿した。3回の校正を経て、平成23年3月末に報告書（本書）を刊行した。

なお、図面・写真等の記録類や遺物は、3月末に整理・分類のうえ、埼玉県文化財収蔵施設の収蔵庫へ収納した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成15年度（発掘調査）

理 事 長	桐 川 卓 雄	調 査 部	
常務理事兼管理部長	中 村 英 樹	調 査 部 長	宮 崎 朝 雄
管 理 部		調 査 部 調 査 副 部 長	坂 野 和 信
管 理 部 副 部 長	村 田 健 二	主 席 調 査 員（調 査 第 一 担 当）	昼 間 孝 志
主 席	田 中 由 夫	統 括 調 査 員	富 田 和 夫
		調 査 員	田 代 雄 介

平成22年度（報告書作成）

理 事 長	藤 野 龍 宏	調 査 部	
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	調 査 部 長	小 野 美 代 子
総 務 部		調 査 部 副 部 長	昼 間 孝 志
総 務 部 副 部 長	金 子 直 行	調 査 監 兼 整 理 第 一 課 長	劔 持 和 夫
総 務 課 長	田 中 雅 人		

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

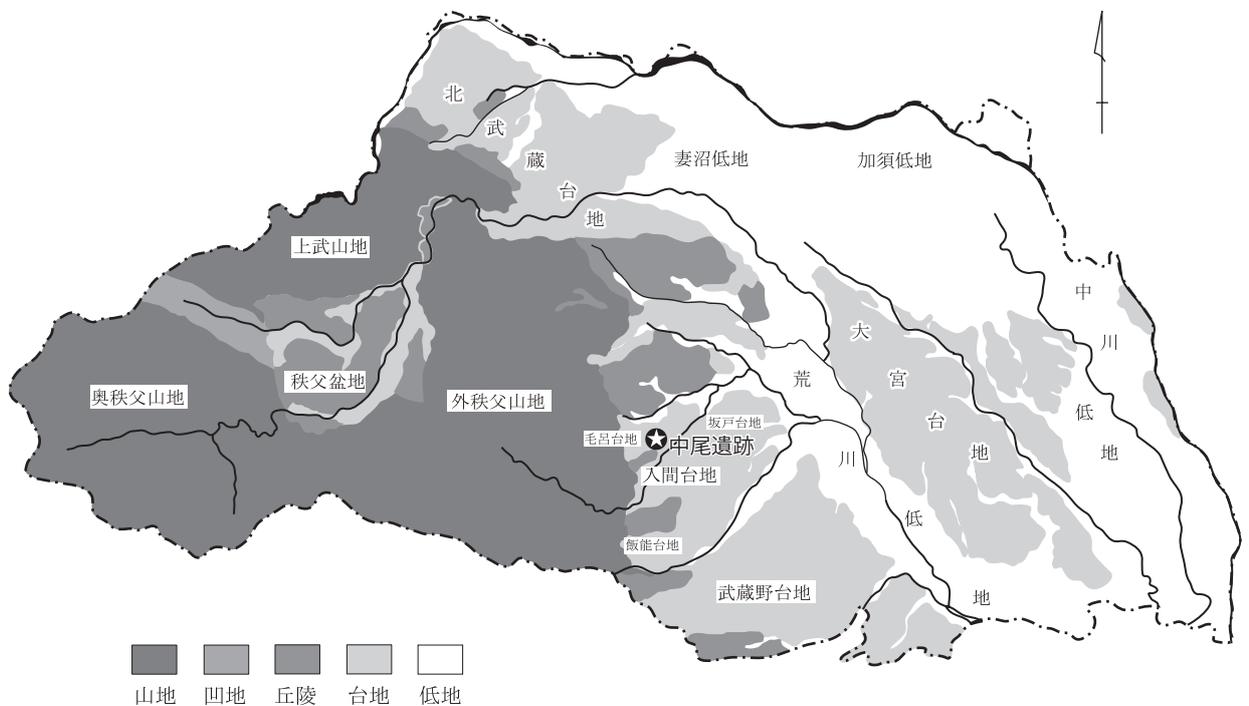
中尾遺跡はJ R 八高線毛呂駅の南東約 1.8km、入間郡毛呂山町葛貫地内に所在する。

毛呂山町は埼玉県の南西部、関東山地と関東平野が接する部分に位置し、東は坂戸市、南は日高市、西は飯能市・越生町、北は越生町・鳩山町に囲まれている。葛貫は町の中央最南部にあたる地区で、南は日高市と接している。

地形的には、町のほぼ中央を南北（宿谷―毛呂本郷）に結ぶ八王子―高崎構造線を境に、東部と西部に分けられる。東部は関東平野の西端にあたる台地（毛呂台地）が広がり、西部は関東山地の東縁、低山性の山地（外秩父山地）・丘陵となっている。町の北側には越辺川、南側には高麗川が東流しており、山地は両河川の支流である毛呂川・阿諏訪川・大谷木川・宿谷川などによって開析されている。

標高は山地で 500 m を測り、東へ向け次第に低くなり、遺跡の位置する葛貫の南側丘陵（毛呂山丘陵）で 150 ～ 100 m となり、坂戸市に接する西大久保地区の毛呂台地で 45 m ほどとなる。山地・丘陵・台地に比して低地は少ないながらも、越辺川とその支流の大谷木川流域にやや広い分布が認められる。また、葛貫付近の台地を開析しながら高麗川に合流する葛川流域では、川に沿って細長く形成された低地が延びている。

毛呂山町東部に広がる毛呂台地は、越辺川とその支流の毛呂川や大谷木川などにより形成された扇状地性の洪積台地で、地表下には関東ローム層が堆積している。毛呂台地も越辺川や高麗川、およびその支流によって浸食開析され、南西―北東方向に延びる幅の狭い帯状の小台地に分岐している。



第1図 埼玉県の地形



第2図 周辺の遺跡分布

第1表 周辺の遺跡一覧表

No.	市町村	遺跡名	時代	No.	市町村	遺跡名	時代
1	毛呂山	中尾遺跡	奈良・平安	17	毛呂山	毛呂城跡	南北朝・戦国
2	毛呂山	東原遺跡	奈良・平安	18	毛呂山	竹ノ内遺跡	縄文(中)・南北朝
3	毛呂山	本社遺跡	縄文(中)・古墳(前)・奈良・平安	19	毛呂山	竜ヶ谷山城	
4	毛呂山	山田遺跡	縄文(前)・平安	20	毛呂山	毛呂氏館跡	
5	毛呂山	沼下遺跡	平安	21	毛呂山	岩沢前遺跡	室町
6	毛呂山	八反田遺跡	縄文・古墳	22	毛呂山	宿谷氏館跡	平安
7	毛呂山	西原遺跡	平安	23	毛呂山	山根六角塔遺跡	南北朝・室町
8	毛呂山	野久保遺跡	平安	24	毛呂山・日高	大寺廃寺	奈良・平安・鎌倉・南北朝
9	毛呂山	五反田遺跡	縄文(中)・平安	25	日高	小別当遺跡	平安
10	毛呂山	西本遺跡	古墳	26	日高	天神峰遺跡	縄文(中)・奈良
11	毛呂山	伊勢原遺跡	古墳	27	日高	滝ノ前遺跡	
12	毛呂山	伴六遺跡	平安	28	日高	助殿林遺跡	平安
13	毛呂山	塚場山遺跡	縄文(中)・古墳(前)	29	日高	原ノ上遺跡	平安
14	毛呂山	総庭遺跡	縄文・平安	30	日高	和田遺跡	縄文・古墳
15	毛呂山	村田和泉守館跡		31	坂戸	城山遺跡	縄文(中)・戦国
16	毛呂山	斉藤氏館跡		32	越生	御堂ヶ谷戸遺跡	縄文(中)・古墳

飯能寄居線バイパス建設工事に先立って調査された東原・中尾・新田東の3遺跡は、この毛呂台地上に縦列状態で並んでいる。しかし、指呼の間にあるとはいえ、遺跡間には葛川支流の形成した低地が入り込むため、立地としては分岐して隣合う別々の小台地上となっている。3遺跡近辺の標高は85m前後であるが、台地としては他の地域より高くなっている。

遺跡の所在する葛貫地区(旧葛貫村)の地勢について、江戸時代の地誌『新編武蔵風土記稿』は、「一體は山に傍し村なれど、村内には却て山と云べきものはなし」と記し、明治八年(1875)以前の様子を記した『武蔵国郡村誌』は、「東北は平坦にして西南は山巒連亘し樹木処々に鬱葱す」と記

している。また、後者は村の地味が「色赤黄相混し小石を錯ゆ稲麦に適せず」、税地は「田^田_{古野}畑^畑_野」であるとする。課税対象地ではあるが、畑地(およそ9,100㎡)に比して田(およそ1,700㎡)がかなり少ない状況は、明治十四年(1881)、参謀本部陸軍部測量局測量の迅速測図上で確かめることができる。描かれた田・水田は周囲の村々も含め、その殆どが上述の狭い低地部、それもごく一部に限られている。

さらに『武蔵国郡村誌』は、物産として「生太織^織炭^炭」を挙げ、民業は「男は農業焼炭を専とし女は耕織を専とす」と説くなど、かつての葛貫村が農・林・蚕を主産業とする農山村であったことを教示している。

2. 歴史的環境

前項で触れたように、中尾遺跡の所在する毛呂山町は山地-丘陵-台地への急激な地形変化と、これに伴う植生・土地利用状況の変化に富んだ地域となっている。ここに暮らした人々の足跡も、旧石器時代以降、時代による濃淡はあるにせよ、現在まで連綿と刻まれ続けてきた。

毛呂山町や南に隣接する日高市の遺跡では、特

に縄文時代中期と奈良・平安時代にピークが認められる。縄文時代については、中期の大規模集落跡である新田東遺跡の報告書(平成23年度刊行予定)に譲り、ここでは、中尾遺跡及び北隣する東原遺跡の主体をなす、奈良・平安時代の歴史的環境について概観することとしたい。また、中世以降の葛貫について付言しておく。

(1) 高麗郡の設置

「辛卯。以_一駿河。甲斐。相模。上総。下総。常陸。下

野七国高麗人千七百九十九人。遷_一于武蔵国。始置_一高麗郡焉。」『続日本紀』靈龜二年(716)五

月十六日条。

この高麗郡の建郡は、当地域における古代史上、最も重要な出来事である。

高麗郡は現在の日高市を中心に、小畔川流域の飯能市と坂戸市西部をも含む地域に想定されている。律令時代は高麗郷・上総郷の2郷からなる小郡で、郡の北～東～南は入間郡が取り巻くように広がっていた。

本遺跡の所在する毛呂山町葛貫は、江戸時代には入間郡葛貫村であり、村の南端が高麗郡（平沢村）との郡境であった。古代においても、毛呂山町一帯は入間郡高階郷に比定する考えがあるが、本遺跡を含めた高麗川左岸、及び葛川流域における近年の発掘調査成果は、高麗郡の範囲認定に再考を促すものとなっている。

(2) 集落遺跡

集落遺跡の分布をみると、高麗建郡以前に希薄であった小畔川流域の遺跡は、奈良～平安時代に激増する。日高市では常木久保遺跡・稲荷遺跡・神明遺跡・宮ノ後遺跡・大黒ヶ谷戸遺跡・道光林遺跡・中王神遺跡・王神遺跡・拾石遺跡・古道遺跡・堀ノ内遺跡・若宮遺跡等々が分布する。このうち、常木久保・稲荷・神明の3遺跡では、8世紀第Ⅲ四半期～9世紀第Ⅳ四半期を中心とする住居跡54軒や井戸跡3基、道路遺構等が検出され、多量の須恵器のほか、常総地方の土師器甕や灰釉陶器、瓦などが出土している。また、拾石遺跡では8世紀中葉から9世紀前半の住居跡46軒、掘立柱建物跡6基、井戸跡14基、道路遺構等が検出され、石製の丸軻や巡方、耳皿・漆紙、「家長」「南家」などの墨書土器が出土している。

こうした現象から、高麗郡設置に際しては入間郡の管掌・保護育成のもと、まず入間郡家（川越市霞ヶ関遺跡）所在地や、郡司の拠点大家郷（鶴ヶ島市以西）に隣接する高萩地区で集落形成が始まったといわれている。

高麗川右岸では、日高市で助殿林遺跡（28）・

原ノ上遺跡（29）、やや下流の坂戸市で天神社遺跡・大家小学校遺跡が挙げられるが、遺跡数は小畔川流域に比し極端に少なく、両河川の間部（坂戸台地）は空白域となっている。

毛呂山町でも、前代には空白であった台地奥部に分布が認められるようになる。高麗川左岸および葛川流域では、中尾遺跡（1）・東原遺跡（2）・本社遺跡（3）が85m前後と標高の高い尾根状の台地に立地し、一つの遺跡群を形成している。下流部には沼下遺跡・延命寺北遺跡・宮脇遺跡・前通遺跡・築地遺跡・まます遺跡・上殿遺跡・表A遺跡・表B遺跡・船原前遺跡等が、55～45mほどと標高の低い平坦化した台地上に立地する。

築地遺跡とまます遺跡からは、「王」「乙」字を含む多量の墨書土器をはじめ、灰釉陶器・石製丸軻・相模系土師質坏などが出土したほか、一辺7～10mにおよぶ複数の大形竪穴住居跡も検出されている。このことから、両遺跡は一体の集落跡であり、9世紀中葉から後半には拠点集落になっていたと考えられている。

越辺川流域の遺跡は下流の坂戸市寄りに多く、大類・川角・西戸といった古墳群やこれを形成した集団の集落が存在するなど、前代からの一拠点地域を形成している。また、台地奥部の確実な遺跡としては、大谷木川左岸に伴六遺跡（12）を挙げるに止まる。

(3) 寺院跡等

高麗郡には古代寺院跡が3ヶ所で確認されている。それは、①女影廃寺（若宮遺跡の一部）：日高市高萩の小畔川流域台地上。②高岡廃寺：同市清流の高麗川左岸丘陵上。③大寺廃寺（24）：日高市山根と毛呂山町葛貫にまたがる宿谷川左岸の丘陵上。3廃寺である。

女影廃寺は8世紀第Ⅰ四半期～同第Ⅱ四半期の建立で「郡寺（官寺）」的性格の寺院とされ、近隣に王神遺跡・拾石遺跡・古道遺跡・堀ノ内遺跡・若宮遺跡などの大規模集落が密集する。高麗郡の

郡家跡については明らかでないが、同廃寺の近辺に存在するのではないかと考えられている。

高岡廃寺は、8世紀第Ⅲ四半期という出土遺物の年代が合致することから、高麗氏系図にある天平勝宝三年（751）創建の勝楽寺に比定されている。同系図によれば、勝楽寺は僧勝楽の遺骨を弟子の聖雲が納めた寺であることから、「菩提寺（私寺）」的性格の寺院とされている。山裾には同廃寺の瓦を製作したという高岡窯跡がある。

大寺廃寺は8世紀後半の建立で、高麗氏の「氏寺」的性格の寺院と考えられている。区画施設は未確認ながら、堂塔を備えた本格的寺院であったらしい。北方に位置する中尾・東原両遺跡に近く（中尾遺跡から約1km、東原遺跡から約1.2km）、住居跡からは同時期の瓦が出土するなど、高い関連性が窺える。

3廃寺は、建郡間もない8世紀の前半～中頃に次々と建立されていったが、瓦が葺かれるなど、その盛期は9世紀代であるとされている。

なお、新設の高麗郡に『延喜式』神名帳登載社、いわゆる式内社は見られないものの、入間郡には五座が挙げられている。このうちの一座、出雲伊波比神社は毛呂山町岩井に鎮まる。同社は天平勝宝七年（755）に官社に預かり、神護景雲三年（769）には班幣が滞っていることを怒る祭神の祟りで、入間郡の正倉四字を焼くという御神火事件で著名である。しかし、中・近世には出雲伊波比という社号は忘れられ、茂呂（毛呂）明神・飛来明神・八幡宮などと呼ばれるようになっていた。

これらの寺院や式内社は、外秩父山地の東縁部に点在することから、古代には幹線道が走っていたのではないかとする考えもある。一方、毛呂山町の東部には、中世の鎌倉街道上道が南北に貫いている。今次の調査はバイパスの新設工事に伴うものであったが、元の飯能寄居線に沿った道は、鎌倉街道上道の古道との伝承もある。おそらくこの山麓に沿った南北ルートは、古代以来、重要な

交通路の一つであったのだろう。

（4）中世以降の葛貫

「葛貫」について、江戸時代の『新編武蔵風土記稿』はこれを「くずぬき」とし、明治時代の『武蔵国郡村誌』は「つづらぬき」としている。現在は後者の名で呼ばれている。

前書は葛貫村の由来を、「【太平記】に葛貫大膳亮と云る人をのす、此等もし此地に住し、在名をもて己が氏とせし人ならずや、さあらんには舊きよりの村名なることしるべし」としている。『太平記』は、後醍醐天皇の鎌倉幕府討幕計画から足利義詮の死まで記された南北朝期の軍記で、1370年代の成立とされる。『新編武蔵風土記稿』がいうように、葛貫大膳亮なる人物が当地に居住して地名を氏の名としたならば、遅くも14世紀後半には葛貫の名が存在したことになる。

中世の毛呂山町からは、毛呂氏や宿谷氏といった鎌倉時代の有力御家人を輩出している。毛呂季光は早くから源頼朝に仕え、のち豊後国司を拝命、奥州藤原氏の征討にも従軍した。葛貫氏についてはよく分らないが、これも当地を本貫とする武士の一族であったのだろう。

中尾遺跡・東原遺跡の西側には鎌倉街道上道の古道が通っていたとの伝承があり、東原遺跡ではこれに合流すると思われる15世紀以前の道路跡や溝跡が検出されている。また、遺跡の北には嘉元四年（1306）銘の板石塔婆も現存しており、中世には葛貫が要路上の村落であったことが窺える。

戦国時代になると、一帯は小田原北条氏の支配下に組み込まれる。永禄二年（1559）作成とされる『小田原衆所領役帳』には、「左衛門佐殿知行」として「百四拾六貫文六百三十六文 河越三十三郷 多波目葛貫 卯検地」と載る。左衛門佐は北条氏綱の子、氏堯（氏康の弟）といわれている。多波目は葛貫南東の高麗川両岸部、卯年は弘治元年（1555）にあたる。徳川家康の入府後は、明治までほぼ旗本の知行地となっていた。

Ⅲ 遺跡の概要

中尾遺跡は、入間郡毛呂山町葛貫地内に所在する。遺跡の立地としては毛呂台地上となるが、周辺は南側の毛呂山丘陵から続く、標高のやや高い部分にあたっている。台地は東流する葛川やその支流に開析され、いくつかの小台地に分岐している。中尾遺跡もその狭長な尾根状台地の一つに乗り、北側は東原遺跡、南側は新田東遺跡の展開する小台地と、それぞれ開析谷を挟んで対峙している。

この東西に延びる小台地の頂部は、幅 70～80m ほどの平坦面が形成され、南北両側は緩やかな斜面となって低地へ移行している。中尾遺跡は、この頂部から南側緩斜面を中心に広がる集落遺跡で、遺構確認面での住居跡の標高は、約 76.5～80.0 m である。

中尾遺跡の発掘調査は、小台地を南北に横断する地方主要道飯能寄居線のバイパス新設工事に伴うもので、平成 15 年度に 2,700㎡を対象に実施した。調査区は道路建設予定地であるため、幅約 25m、長さ約 100m と細長いものとなっている。

調査前、調査区一帯は畑地となっていた。しかし、明治 14 年測量の迅速測図を見ると、当所周辺には松林の広がっていたことが分かる。開墾の時期は不明ながら、耕地化に伴う松木の抜根が、かなりの深さにまで及んだことは明らかである。それは、遺構確認面であるソフト化したローム層まで、厚さ 20～40cm ほどの耕作土単層であったことから首肯される。

但し、斜面部では黄褐色のローム層は流失し、俗に「真土」と呼ばれる暗茶褐色の粘質土層が遺構確認面となっている。この「真土」もロームが変質したものと考えられるが、上層の黄褐色ロームとともに、相当するローム層（下末吉～立川）は明らかでない。「真土」層の下は、これを混じた、径 1～3 cm の小円礫からなる礫層となっている。

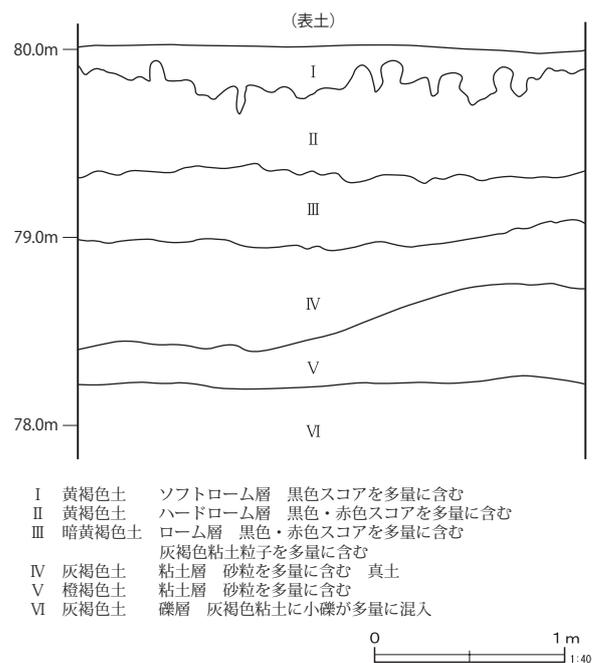
この礫層は調査区に設けた複数の試掘坑の対比により、ほぼ水平の堆積であることが観察された。なお、旧石器時代の遺物の出土はなかった。

調査で検出された遺構は、奈良・平安時代の住居跡 7 軒（1 軒は粘土採掘坑か）、土壇 7 基、近世以降の溝跡 7 条、土壇 61 基などである。

台地頂部の 1 軒を除き、住居跡はいずれも調査区南半の斜面部に分布する。出土遺物から見た住居跡の所属時期は、奈良時代の 8 世紀第Ⅲ四半期が 2 軒、平安時代の 9 世紀第Ⅱ～Ⅲ四半期が 5 軒である。うち 1 軒は鍛冶炉を備えた工房跡で、鞆の羽口や鍛造剥片、椀形滓などが出土している。

土壇は調査区全体に分布が認められるが、頂部の平坦面から斜面に繋る、台地肩部に集中する傾向がある。

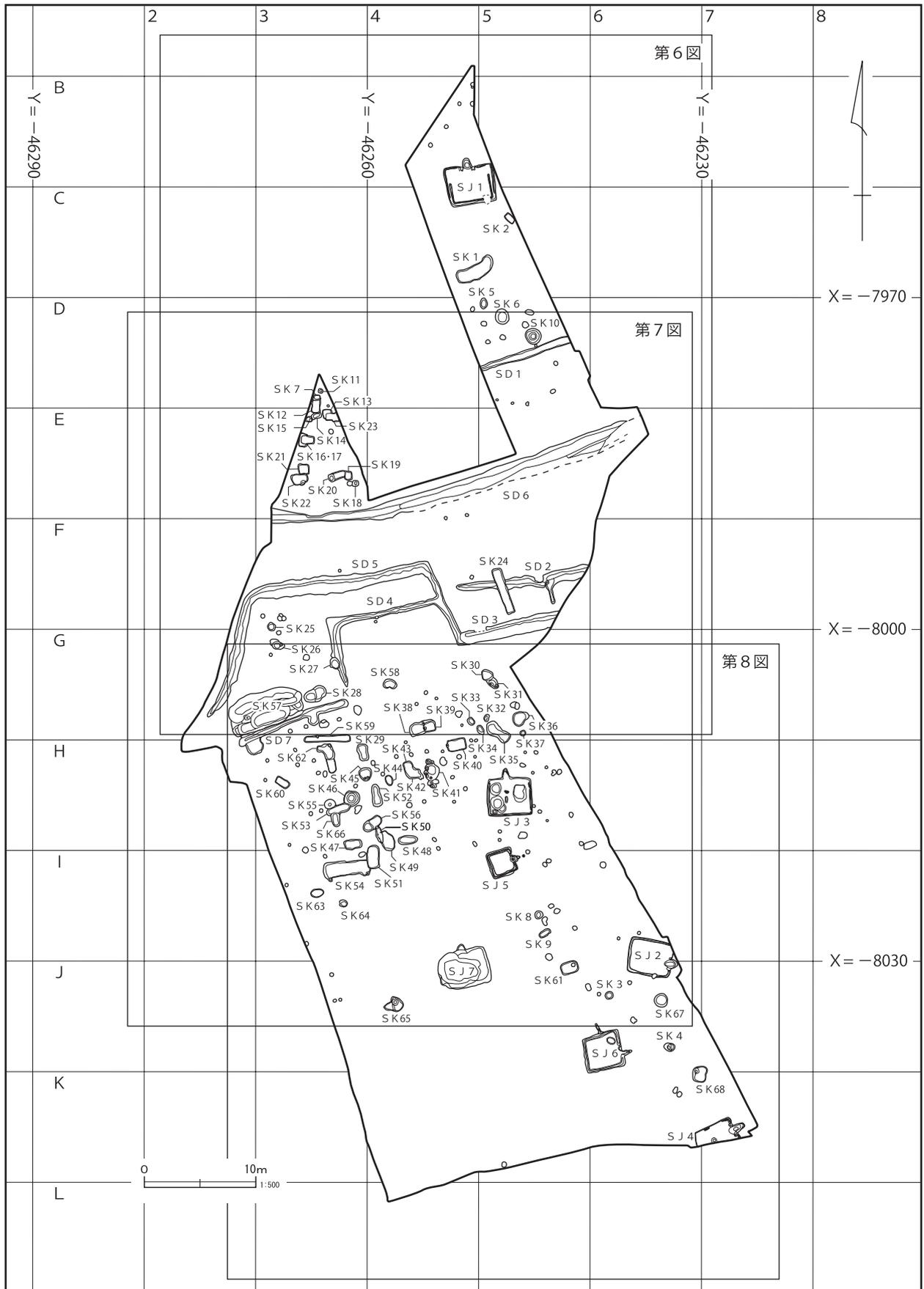
溝跡はもっとも標高の高い平坦面、土壇集中部の北側に分布する。直線的に延びるもののほか、鉤の手状に屈曲するものがある。方向はほぼ南北と東西に限られているので、これらは屋敷地を囲む区画溝など、一連のものと思われる。



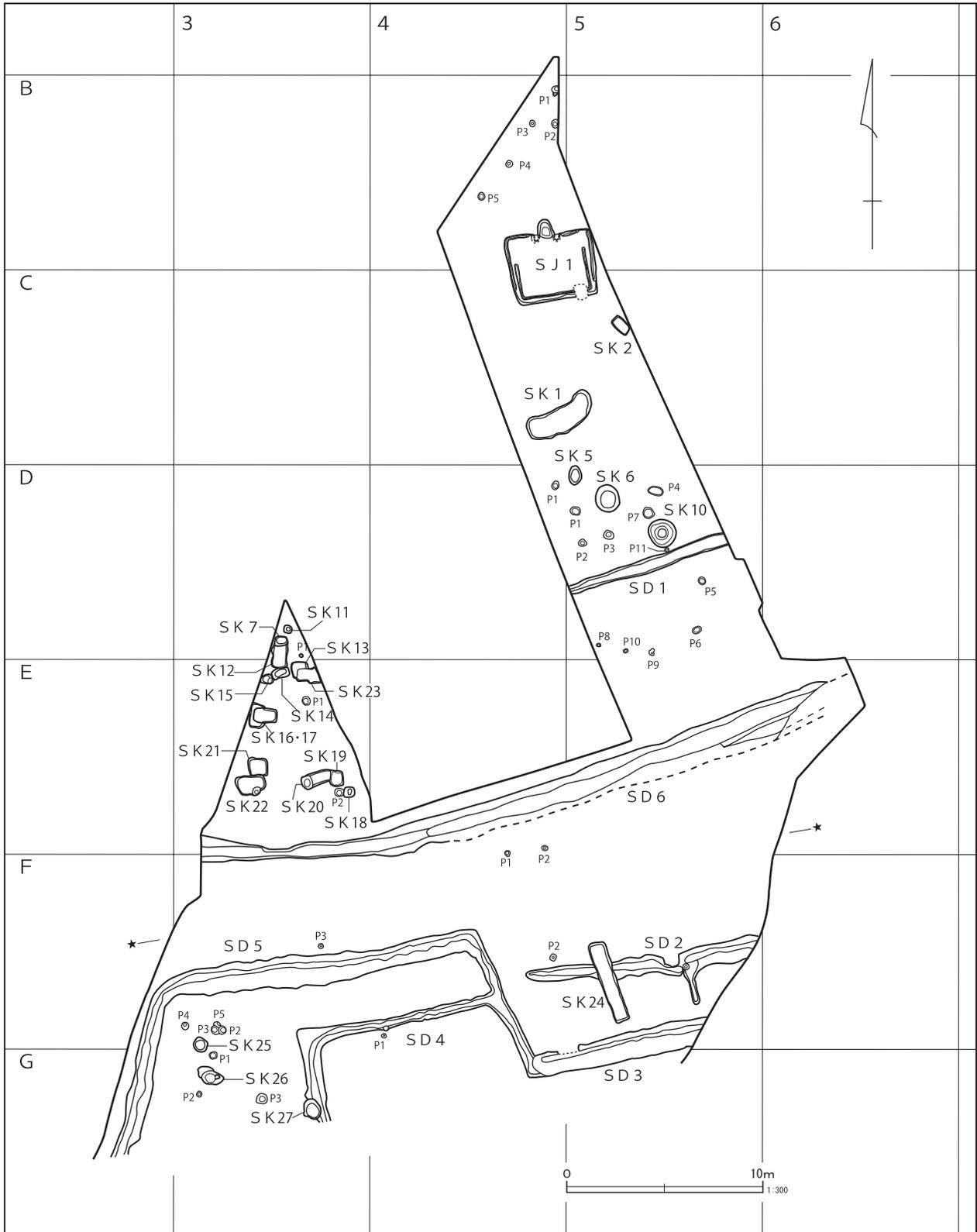
第 3 図 基本土層図



第4図 調査区位置図



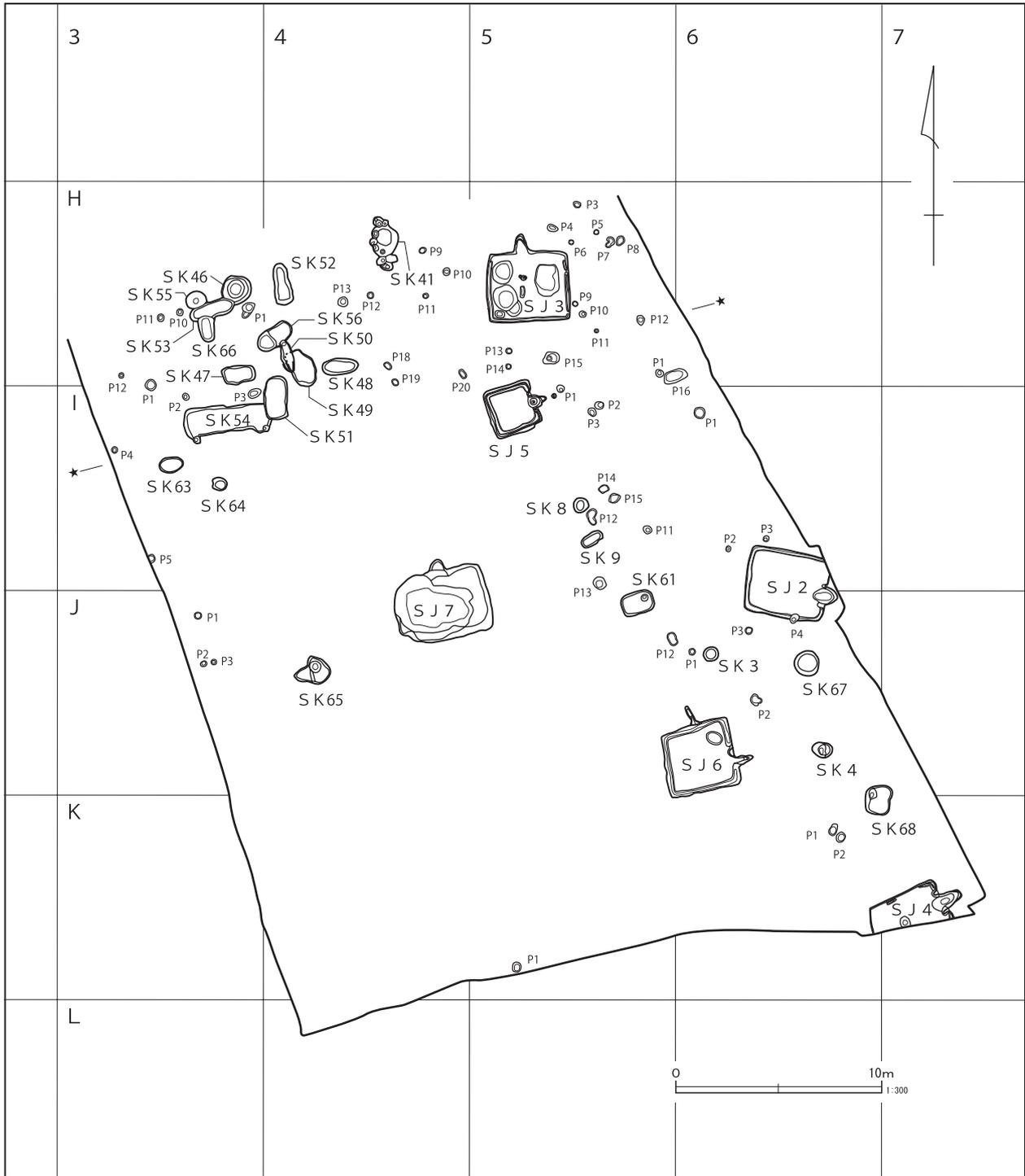
第5図 調査区全体図



第6図 調査区全測図(1)



第7図 調査区全測図(2)



第8図 調査区全測図(3)

IV 遺構と遺物

1. 住居跡

検出された住居跡は7軒（第7号住居跡としたものは粘土採掘坑か）で、奈良時代の8世紀第Ⅲ四半期が2軒（第4・6号住居跡）、平安時代の9世紀第Ⅱ～Ⅲ四半期が5軒（第1～3・5・7号住居跡）である。

7軒のうち6軒（第2～7号住居跡）は調査区南半の斜面部、確認面での標高76.5～79 mに集中する傾向が窺える。他の1軒（第1号住居跡）は調査区北端の平坦面、同じく標高約80 mの地点に

存在している。また、奈良時代の2軒は標高の低い調査区南端部、平安時代の住居跡はそれよりも上位に分布する。

検出状況から見て、住居跡の分布が東西の未調査部分、特に東側へ広がっていることは明らかである。調査区が南北に細長く、また土壌の流失や耕作による削平があるため明言はできないが、集落の中心は、南面する緩やかな台地の斜面部にありと考えられる。

第1号住居跡（第9図）

調査区の北端、B-4グリッドを中心に位置する。台地の平坦面に検出された唯一の住居跡で、標高は確認面で約80 m、床面で約79.9 mである。

全体はやや東西に長い長方形で、壁溝が二重に巡っている。内側の壁溝覆土には故意の埋め戻しが観察されたことから、本住居跡は拡張の建て替えが行われたものと判断した。

拡張は壁を20～30cmほど広げたものだが、北壁部は床を掘り過ぎたため、拡張前の壁溝が確認できなかった。ただ、カマドに付け替えの様子は窺えなかったため、北壁は拡張がなかったものと思われる。

拡張後の規模は東西4.38m、南北3.55 m、壁溝内側の床面積約14.4㎡である。カマドの設けられた北壁と直行する軸を主軸とした場合、その方向はおおよそN-10°-Wを指す。

覆土は最上層の一部に故意の埋め戻しが見られるものの、基本的には腐植土を中心とする自然堆積である。

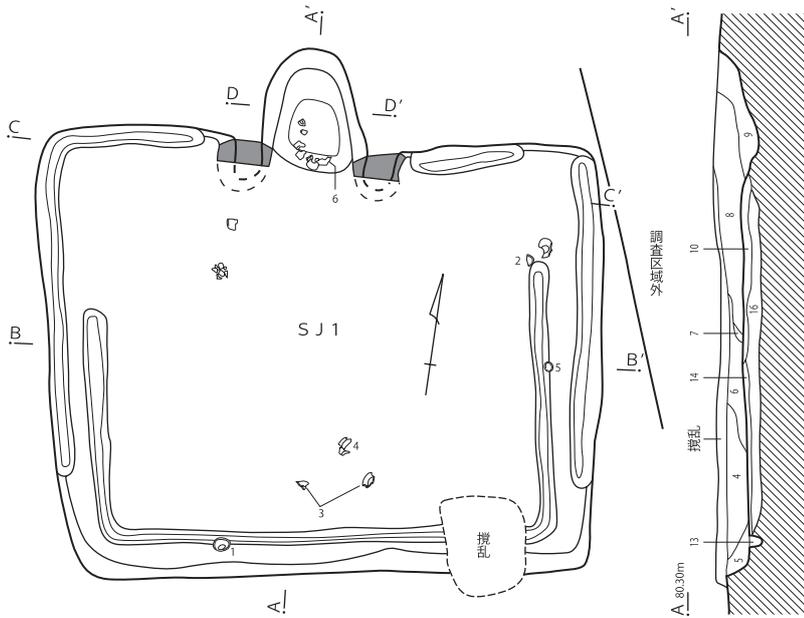
確認面から床までの深さは15cm前後で、床面はほぼ平坦で、カマド前面がやや高まる。床は掘り方に15～20cmほどの厚さにローム・ブロック

を充填し、貼床としている。壁際に比べ、中央部からカマドの焚き口部は非常に硬く締まっている。なお、住居の拡張に伴う貼り替えは行われていない。

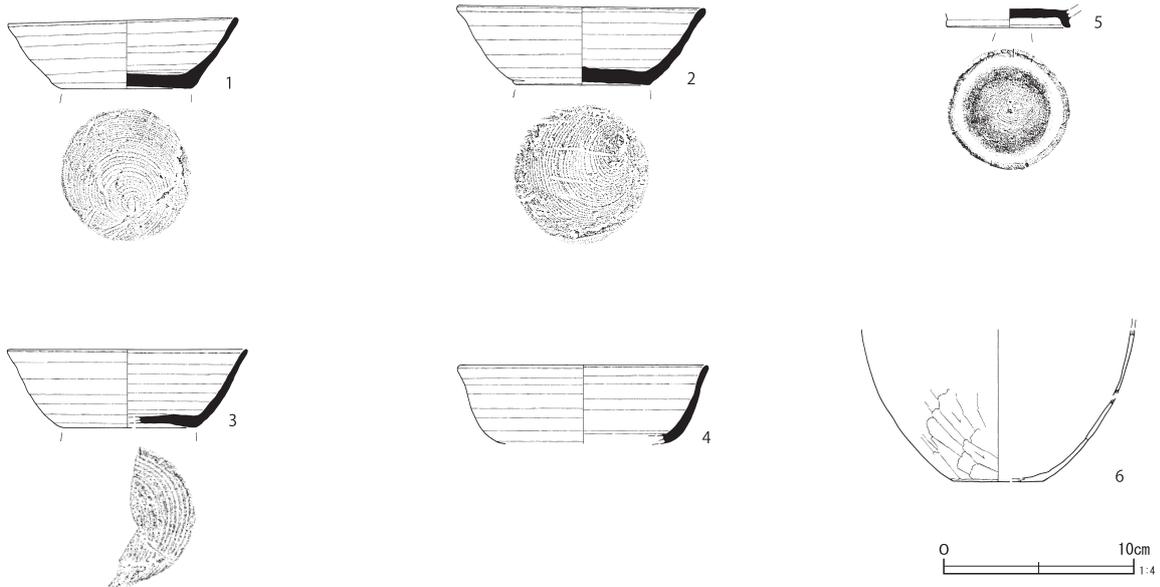
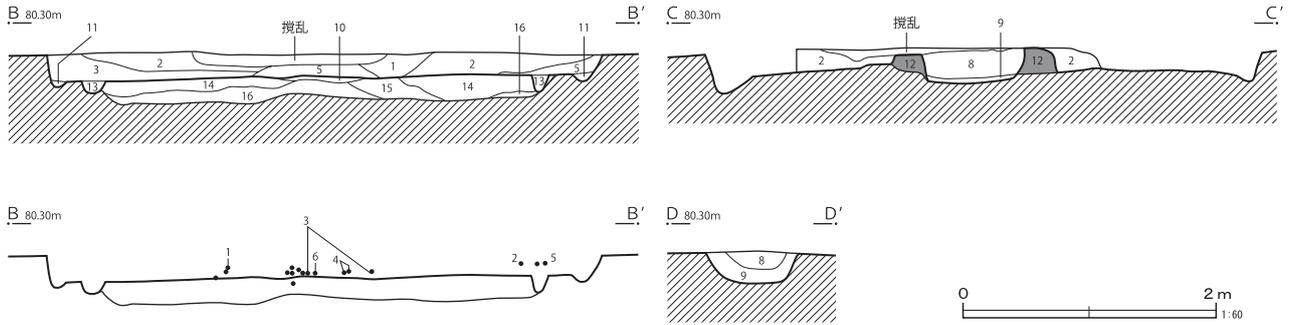
カマドは北壁中央部、僅かに西へ寄った位置に設けられる。おおよそ燃焼部は幅0.8 m、奥行き0.95 mの楕円形で、火床は床面より10cmほど深くなっている。袖は焚き口部を掘り過ぎてしまったが、壁面に山砂を主体とする灰褐色土を張り付けて構築している。硬く締まっており、土器や大型礫などの芯材は用いられていない。

前述のように、壁溝は二重に巡っている。拡張前の内側を巡るものは、幅約15cm、深さ約10cmで、拡張の際にローム・ブロックが詰められ、床とされている。拡張後の壁溝は、南壁を除く三壁の直下に検出された。幅は拡張前と同じく15cm程度で、深さは5cm前後と浅い。その他、ピットや貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は少量ながら、覆土より土師器の甕、須恵器の坏、高台付坏などが出土している。図示したもの以外は、いずれも微細な破片である。遺物の特徴から見て、本住居跡の所属時期は9世紀の第Ⅱ四半期と考えられる。



- S J 1
- | | |
|----------|---|
| 1 暗黄褐色土 | ロームブロック多 人為的な埋め戻し |
| 2 黒褐色土 | ローム粒少 カマド崩落後の流入土 自然堆積 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒多 カマド崩落後の流入土 自然堆積 |
| 4 暗褐色土 | ロームブロック少 カマド崩落後の流入土 自然堆積 |
| 5 暗黄褐色土 | ロームブロック多 三角堆積 |
| 6 暗茶褐色土 | 焼土粒・焼土ブロック・炭化物多 崩れたカマドの構築土 山砂を使用 |
| 7 黒褐色土 | 焼土粒少 |
| 8 灰褐色土 | 焼土ブロック少 灰褐色粘土 カマドの天井材及び袖材の崩落 山砂を使用 |
| 9 赤褐色土 | 焼土ブロック・灰褐色粘土・炭化物粒多 カマド燃焼部天井材の崩落土 山砂を使用 |
| 10 暗褐色土 | 粘土粒・ロームブロック少 貼床 カマドの前で特に固くなっている (硬化面) |
| 11 暗褐色土 | ロームブロック多 建替え後の壁溝 |
| 12 灰褐色土 | 灰褐色粒土 カマド袖 山砂を使用 |
| 13 暗褐色土 | ロームブロック多 建替え前の壁溝 埋められて貼床と化している |
| 14 暗褐色土 | ソフト・ハードローム多 床面構築土 |
| 15 暗黄褐色土 | ソフトローム主体 |
| 16 黄褐色土 | ハードロームブロック少 床面構築土 ソフト・ハードロームブロックを多量に 充填 床面構築土 |



第9図 第1号住居跡・出土遺物

第2表 第1号住居跡出土遺物観察表（第9図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	須恵器	坏	12.0	3.6	6.8	BCH	100	I	灰	東金子 No.8	10-1
2	須恵器	坏	12.9	4.1	7.0	BCG	85	I	灰白	南比企 底面ヘラ記号「=」 No.2	10-2
3	須恵器	坏	(12.5)	4.1	(7.0)	BCGH	45	I	灰	南比企 No.4・7	10-3
4	須恵器	椀	(13.0)	(4.1)	—	BCG	20	I	灰	南比企 No.5・6	10-4
5	須恵器	高台付坏	—	(1.0)	6.5	BCG	高台部100	I	灰	南比企 No.3	10-5
6	土師器	甕	—	(8.0)	(4.8)	ABC	—	II	にぶい黄褐色	風化著しい カマドNo.7	10-6

第2号住居跡（第10図）

I・J-6グリッドに位置する。北東隅部が僅かに調査区外となるほか、南壁の一部を後世のピットに切られる。標高は確認面で約78.3m、床面で約78.2mである。

全体はやや四壁の膨らんだ長方形で、東西3.9m、南北3.3m、壁溝内側の床面積約10.4㎡をそれぞれ測る。カマドの設けられた東壁と直行する軸を主軸とした場合、その方向はおおよそE-10°Sを指す。

覆土は大半が失われていたが、自然堆積と思われる。

確認面から床までの深さは、北壁部で約10cmである。しかし、斜面地であるため南半部は覆土の流失、あるいは耕作による削平が床面にまで及んでいる。床は掘り方にローム・ブロックを充填した貼床で、全体に硬く締まっている。掘り方全体は周溝状に中央部が浅く、四周は深く掘られていた。

カマドは東壁中央部、僅かに南寄りに設けられる。燃烧部は幅0.85m、奥行き1.2mの楕円形で、火床は床面より10cmほど深くなっている。左（北）袖はローム・ブロックを含む粘質土を壁面に張り付けて構築したものだが、右（南）袖は周囲の壁とともに流失（または削平）しているため、全く確認できなかった。

第3表 第2号住居跡出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版	
1	土師器	甕	(18.8)	(4.2)	—	ABCD	—	II	橙	No.16	10-7	
2	須恵器	甕	—	(9.2)	—	BCGH	—	I	黄灰	外面叩き目 内面ナデ No.5・6	10-7	
3	須恵器	坏	(11.7)	(2.7)	—	BCG	—	II	灰	南比企 No.8	10-7	
4	鉄製品	角棒状	長さ(6.4)cm 幅0.5cm 厚さ0.4cm 重さ4.13g							釘?	No.1	13-4
5	石製品	砥石	長さ[10.8]cm 幅6.4cm 厚さ3.4cm 重さ252.03g 凝灰岩								No.7	10-8

壁溝はカマド部分を除いて全周する。幅は15cm前後、深さは10cmほどである。他に、柱穴や貯蔵穴等は確認できなかった。

覆土中からは少量ながら、土師器の甕、須恵器の甕・坏、縄文土器、鉄製品、砥石が出土している。土器は微細な破片が多く、図示し得たものは僅かである。遺物の特徴から見て、本住居跡の所属時期は9世紀の第Ⅲ四半期と考えられる。

第3号住居跡（第11図）

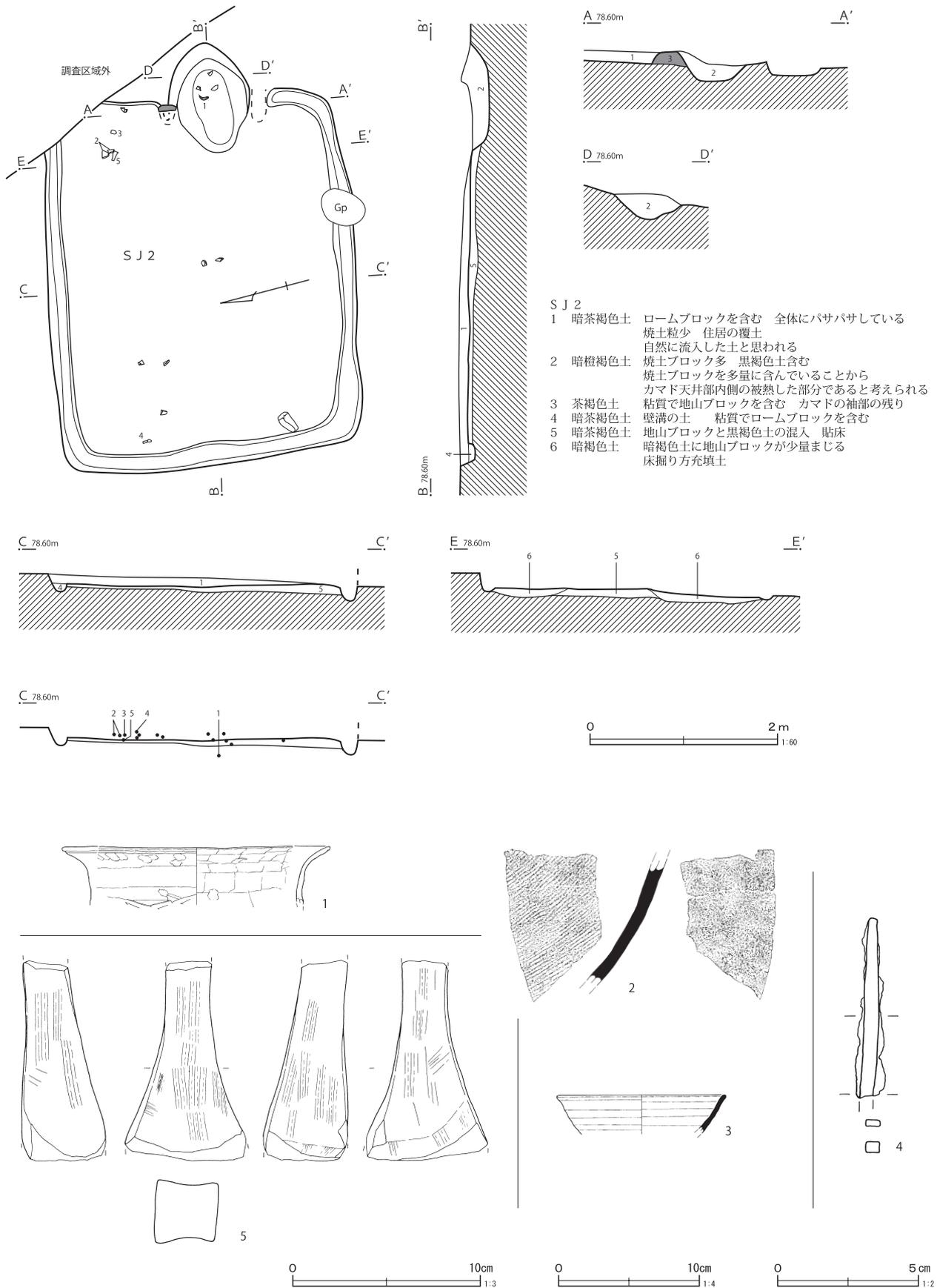
斜面部に検出した住居跡のなかでは、最も標高の高い部分、H-5グリッドに位置する。標高は確認面で約79.0m、床面で約78.8mである。

全体は南北3.45m、東西4mの長方形で、壁溝内側の床面積は約11.7㎡を測る。カマドの設けられた北壁と直行する軸を主軸とした場合、その方向はおおよそN-2°-Wを指す。

カマド部分と床面上を除き、覆土は故意の埋め戻しによるものと考えられる。

確認面から床までの深さは20～30cmで、床面は概ね平らながら、北側及び東側が僅かに低くなっている。掘削面を平らに整形して床としており、貼床の存在は確認できなかった。床面は全体に硬く、特にカマドの焚き口部から鍛冶炉跡にかけては、硬く踏み締まっていた。

カマドは北壁の中央、やや西寄りに設けられる。燃烧部は袖の検出がなかったため、確認できたの



第10図 第2号住居跡・出土遺物

は幅 0.7 m、奥行き 0.75 mほどの範囲である。奥壁の立ち上がりは急で、段をなして緩やかな煙出し状の傾斜となる。火床はやや窪むものの、床面とほぼ同一高に形成されている。

壁溝は、カマドの設けられる北壁を除く各壁の直下に巡る。幅は 20cm前後、床からの深さは 3cm前後である。

このほか、床には鍛冶炉跡 1 基、土壙 4 基、ピット 1 個が検出された。鍛冶炉跡は、住居跡の中心からややカマドに寄った位置に設けられる。上部構造は残っておらず、炉底部のみの残存であった。炉座は住居の床を掘り窪め、そこに薄く粘土を貼って形成している。長径 30cm、短径 24cm、深さ 6cmほどの範囲が被熱により変色・変質している。外周は赤色だが、中央部は還元して青灰色を呈していた。また、西側の一部はガチガチに硬い橙色となっており、その外側には浅い窪みが認められた。おそらく、この窪みに鞆の羽口が設置され、そこから吹き出す強い風が当たったことにより、このような橙色の変色部が生じたものと考えられる。

土壙 1 は、南西の隅部寄りに位置する大きく浅い窪みで、長径 1.65 m、短径 1.15 m、深さ 10cm 前後である。南東部は半円形の段をなしている。覆土最上層から床面にかけては、薄く焼土の層が覆っていた。土壙 2 は長径 1.2 m、短径 1 mを測る楕円形の窪みで、土壙 1 の北側に連なる。深さは 10cm前後である。土壙 3 は住居跡中央部の東壁寄りにあり、長径 1.55 m、短径 1.15 m、深さ 10cm前後を測る。全体は隅丸長方形で、土壙に伴うか否か不明だが、底面に径 20cm、深さ 40cm ほどの柱痕を有するピットが穿たれている。土壙 4 は長径 0.55 m、短径 0.25 m、深さ 10cm前後の細長い窪みで、カマドと鍛冶炉を結んだ線の延長上、床面土壙 1 の東脇に存在する。ピット 1 は住居跡の南西隅部、土壙 1 の南側に存在する。長径 0.5 m、短径 0.35 m、深さ 10cm前後を測り、覆土

は土壙 1 と共通する。

これらの土壙やピットの性格は詳らかでないが、後述のように、覆土中に砂鉄や粒状滓、鍛造剥片を多く含むことから、鍛冶炉と関連する施設と判断される。

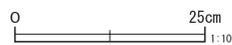
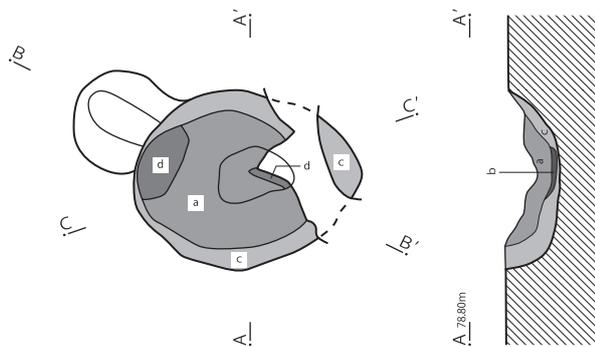
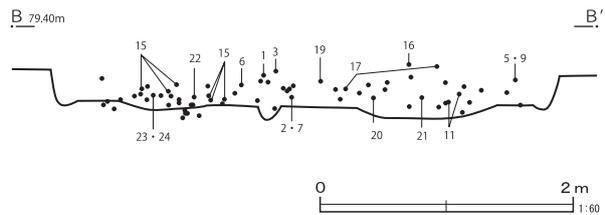
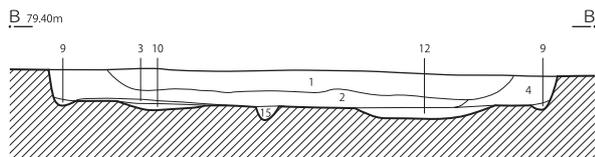
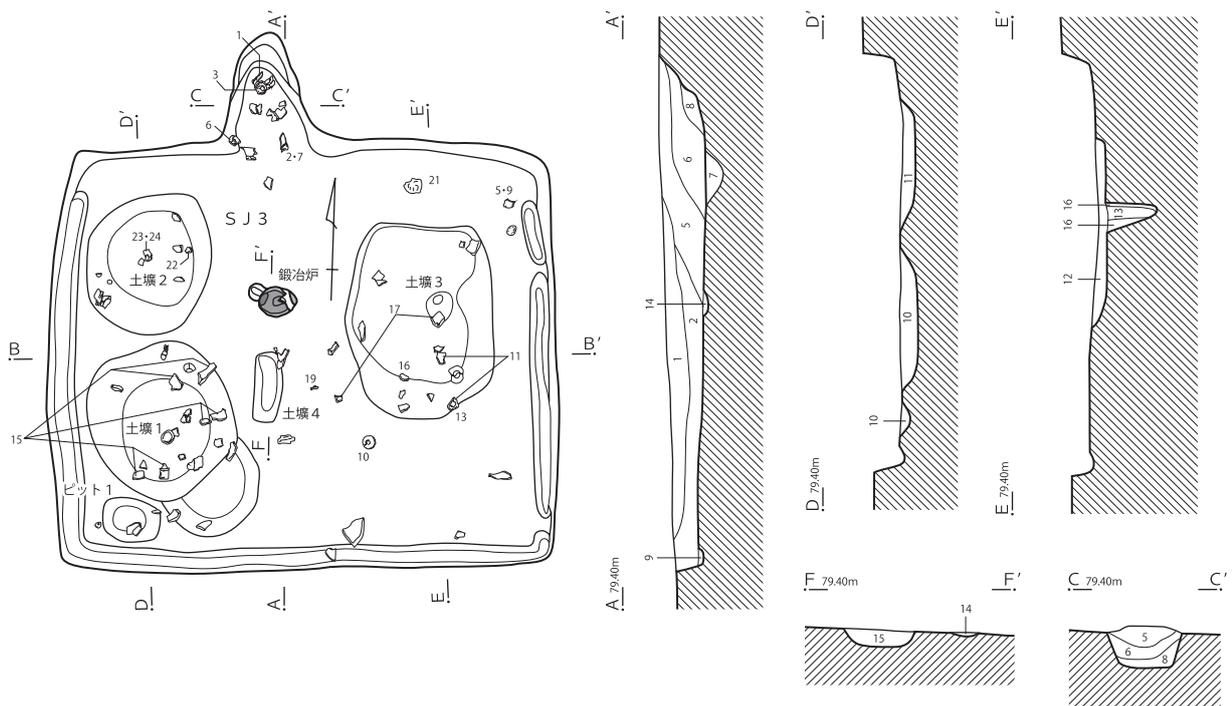
遺物は覆土中を中心に、土師器の甕、須恵器の甕・坏・椀・蓋、紡錘車、羽口、鉄滓、椀形鍛冶滓・鉄製の刀子、瓦などが出土している。出土位置は住居の南側が多く、埋め戻しの際に一緒に投棄されたものと思われる。土器の特徴から見て、本住居跡の所属時期は 9 世紀の第Ⅲ四半期と考えられる。

炉跡の検出や鍛冶関連遺物の出土があったため、調査では本住居跡を鍛冶工房跡であると判断した。そこで、微細な鍛冶関連遺物の検出を目的に、住居跡西半に 50cm方眼を設定し、床面上 10cmの土壌を採取・水洗した。洗い終えた土壌を整理時に肉眼観察、また磁石を用いた磁着により選別を行ったところ、砂鉄・粒状滓・鍛造剥片（砂鉄剥片と鉄粒剥片）それぞれの検出があった。総重量は砂鉄が 1190.1 g、粒状滓が 933.39 g、鍛造剥片が 10.14 g である。

検出された砂鉄・粒状滓・鍛造剥片の重量を方眼ごとに見ると（第 14 図・第 6 表）、カマド焚き口部及び土壙 1 部分に多く、土壙 2 から鍛冶炉部分にかけて少ない傾向が認められる。床面全ての土壌を採取しなかったため確実なことは言えないが、鍛造剥片が集中する土壙 1 部分を鍛冶作業の空間に想定することが可能かもしれない。

またこれとは別に、鍛冶炉や床面土壙・ピットの覆土も全て採取・水洗し、同様の選別作業を行った。結果、それぞれから砂鉄・粒状滓・鍛造剥片の検出があった。遺構ごとの検出量は、第 6 表に示した通りである。

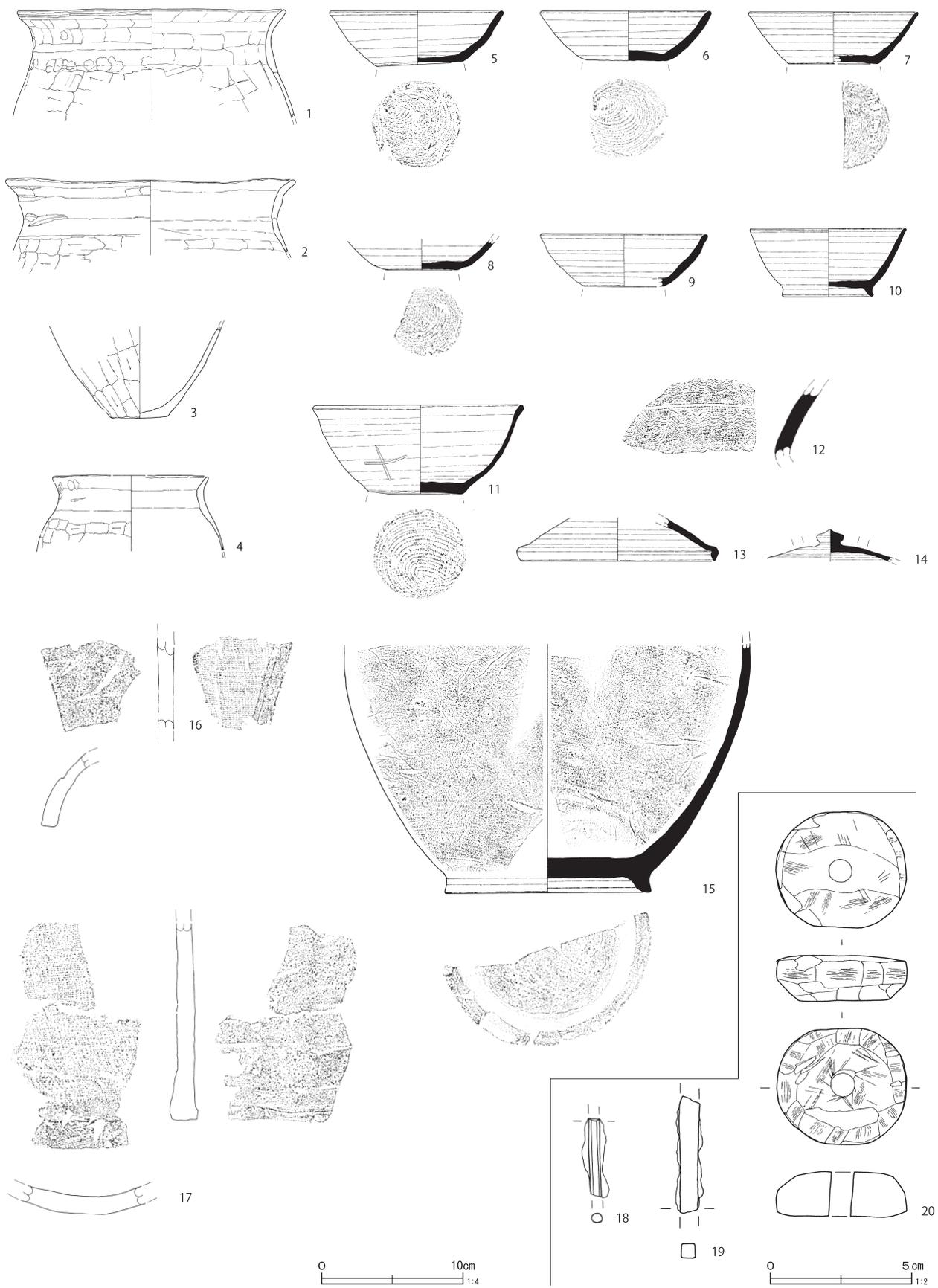
理由は不明ながら、鍛造剥片の含有は土壙 4 が他に卓越している。あるいは、鉄床石が据えられていた窪みなのであろうか。



- S J 3
- 1 暗褐色土 地山ブロック少 土師、須恵・瓦などの遺物を多量に含む層 南側からの人為的な埋め戻し
 - 2 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒少 土師、須恵瓦などの遺物を多量に含む層 南側からの人為的な埋め戻し
 - 3 赤褐色土 焼土ブロック多 炭化物粒多 鍛冶炉に関する焼土か
 - 4 暗褐色土 地山ブロック少 サクサク 三角堆積か
 - 5 明褐色土 焼土ブロック・炭化物多 カマド天井の崩落土
 - 6 赤褐色土 焼土ブロック・炭化物多 カマド天井の崩落土 6層、7層の境が火床面
 - 7 暗褐色土 地山ブロックと暗褐色土の混入土層 カマドの掘り方充填土
 - 8 暗褐色土 地山粒少 カマド内への流入土
 - 9 暗褐色土 地山ブロック多 壁溝の充填土
 - 10 赤褐色土 3層と同一層 焼土粒多 1号住居内土壌
 - 11 赤褐色土 覆土中に鍛造剥片を含む 3層と同一層 焼土粒多 2号住居内土壌 覆土中に鍛造剥片を含む
 - 12 暗褐色土 焼土粒少 3号住居内土壌 覆土中に鍛造剥片を少量含む
 - 13 暗褐色土 地山ブロック少 ビットの柱跡
 - 14 暗灰褐色土 焼土粒・炭化物多 鍛造剥片少 鍛冶炉の覆土
 - 15 暗褐色土 焼土粒・炭化物多 土壌4覆土
 - 16 暗褐色土 焼土粒少 1号ビット 柱掘形充填土

- 鍛冶炉跡
- a 青灰色土 還元された被熱面 粘土を薄く貼って炉座としていた層 ただし、粘土の本来の色や質は、焼けただれてしまっているため 判然としない
 - b 橙褐色土 aの酸化面 粘土を薄く貼って炉座としていた層 ただし、粘土の本来の色や質は、焼けただれてしまっているため 判然としない
 - c 赤褐色土 aおよびbの周囲の被熱面 直接火をうけてはいない
 - d dにむかってグラデーションが薄くなる d層の被熱部分 良く焼け酸化 羽口から風を受けていた部分と思われる

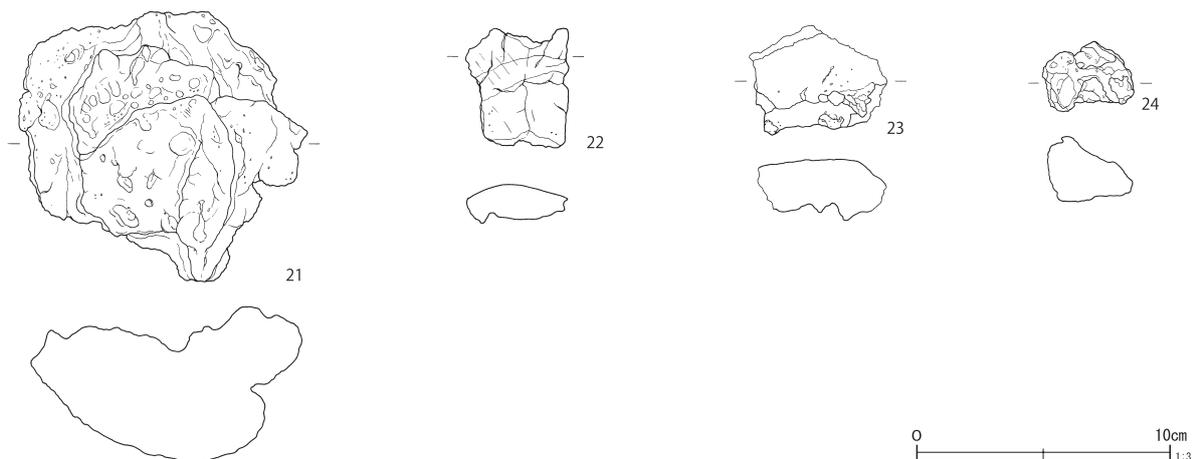
第 11 図 第 3 号住居跡



第 12 图 第 3 号住居跡出土遺物 (1)

第4表 第3号住居跡出土遺物観察表(1)(第12図)

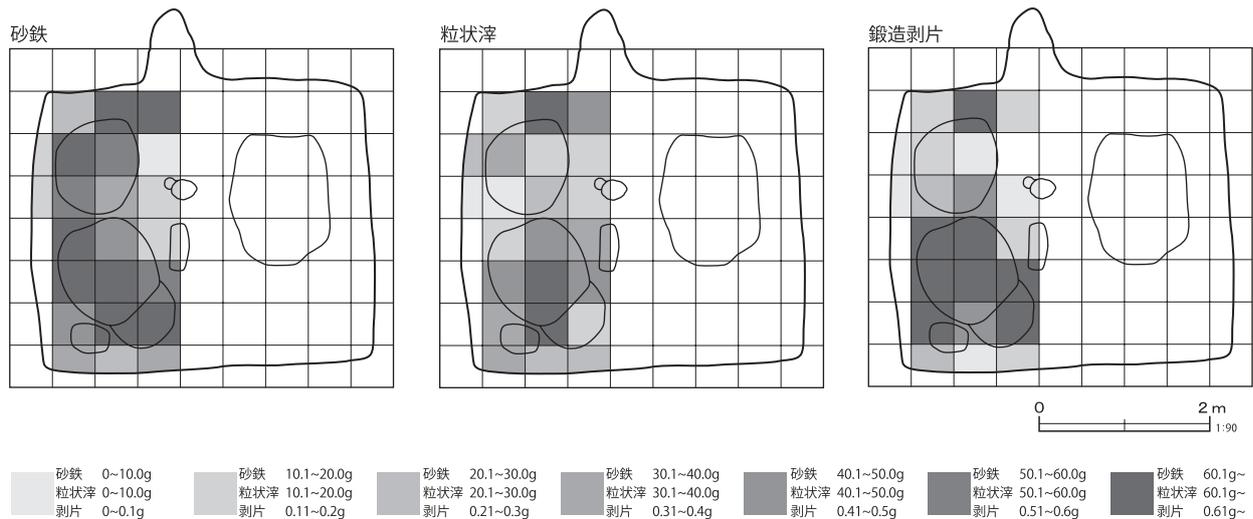
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	土師器	甕	(18.7)	(7.4)	—	ABC	口縁25	II	橙	3と同一個体か カマドNo.9	11-1
2	土師器	甕	(20.2)	(5.5)	—	ABCD	口縁30	II	橙	カマドNo.2	11-2
3	土師器	甕	—	(6.5)	4.0	ABC	底完	II	橙	1と同一個体か 内面風化 カマドNo.8	11-3
4	土師器	台付甕	(10.9)	(5.4)	—	ABC	上半分60	II	明赤褐		11-4
5	須恵器	環	12.1	3.8	6.2	BCG	80	II	淡黄	南比企 No.1	11-5
6	須恵器	環	11.9	3.5	6.0	BCGH	65	I	灰	南比企 カマドNo.10	11-6
7	須恵器	環	(11.8)	3.7	(6.5)	BC	50	I	灰	東金子? SK-1 No.2	11-7
8	須恵器	環	—	(3.2)	(5.2)	BCG	底80	II	灰白	南比企	12-2
9	須恵器	環	(11.6)	(3.7)	(5.8)	BCG	—	II	灰白	南比企 No.1	12-2
10	須恵器	高台付環	10.9	4.8	(6.3)	BCG	90	III	黄橙	南比企 風化顕著 No.15	11-8
11	須恵器	無台椀	14.6	6.3	6.7	BCH	50	I	灰	東金子 体部外面ヘラ記号「×」 No.10・13	12-1
12	須恵器	甕	—	(5.3)	—	BCG	—	I	灰	南比企 No.14	12-4
13	須恵器	蓋	(13.7)	(3.1)	—	BCG	—	II	灰白	南比企	12-2
14	須恵器	蓋	—	(2.3)	—	BCFG	—	I	灰	南比企	12-2
15	須恵器	瓶	—	(17.8)	(14.4)	BCGH	底50	I	灰	南比企 No.27・28・30・31・39・40	12-3
16	瓦	丸瓦	縦(6.4)cm	横(6.0)cm	厚さ1.1cm	凹面布目	凸面ナデ	No.12	焼成良	灰色	12-4
17	瓦	平瓦	縦(14.1)cm	横(8.8)cm	厚さ1.2cm	凹面布目	凸面ナデ	No.8・36	焼成良	灰色	12-4
18	鉄製品	丸棒状	長さ2.8cm	径0.4×0.35cm	重さ2.0g						13-4
19	鉄製品	角棒状	長さ(4.2)cm	幅0.5cm	厚さ0.5cm	重さ4.5g	No.35				13-4
20	石製品	紡錘車	長さ4.1cm	幅4.1cm	厚さ1.6cm	重さ44.34g	凝灰岩	No.25			12-5



第13図 第3号住居跡出土遺物(2)

第5表 第3号住居跡出土遺物観察表(2)(第13図)

番号	種別	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	磁着	メタル度	備考・特記事項	図版
21	椀形滓	10.7	11.25	5.6	591.1	○	L	No.5 表面は不整楕円形。底面は半球状に丸味をもつ椀形。細かな粒状の滓が付着。色調は茶褐色。	18-1
22	羽口	4.6	4.0	1.4	23.4	○		No.45 鍛冶炉の送風管として装着し使用したもの。色調は黄褐色の部分と先端部が還元され青灰色。	18-1
23	羽口	4.0	5.3	2.4	45.4	○	錆化	鍛冶炉の送風管として装着し使用したもの。色調は先端部が還元された溶解物が付着し暗青灰色。	18-1
24	鍛冶滓	2.4	3.5	2.5	15.9	○	錆化	発砲したガラス滓。不整形で細かな気泡が残る。色調は暗灰色	18-1



第 14 図 第 3 号住居跡砂鉄・粒状滓・鍛造剥片分布図

第 6 表 第 3 号住居跡砂鉄・粒状滓・鍛造剥片検出量一覧表

区画	砂鉄	粒状滓	鍛造剥片		区画	砂鉄	粒状滓	鍛造剥片		名称	砂鉄	粒状滓	鍛造剥片	
			砂鉄剥片	鉄粒剥片				砂鉄剥片	鉄粒剥片				砂鉄剥片	鉄粒剥片
1	9.23	10.10	—	—	16	60.92	14.11	0.35	1.49	鍛冶跡	22.61	79.27	0.08	0.07
2	15.23	13.91	0.03	0.02	17	63.04	49.74	0.94	0.15	土壌 1	255.78	179.14	0.59	0.78
3	13.86	38.09	0.19	—	18	46.30	39.01	0.03	0.69	土壌 2	249.14	200.14	0.14	0.21
4	54.75	41.34	0.89	0.18	19	36.93	38.95	0.24	0.05	土壌 3	246.13	125.04	0.55	1.00
5	60.97	17.50	0.45	0.12	20	205.97	261.86	0.36	0.51	土壌 4	93.71	37.06	7.37	9.56
6	39.22	20.62	0.03	0.16	21	63.57	42.61	0.07	0.04	ビット	26.28	31.80	—	0.02
7	56.52	12.76	0.04	—	22	—	—	—	—					
8	39.01	23.50	0.02	0.43	23	11.71	22.59	0.02	—					
9	47.68	40.41	0.43	0.19	24	15.60	1.33	0.06	—					
10	89.59	81.05	0.50	0.44	25	—	—	—	—					
11	67.46	69.29	0.32	0.14	26	—	—	—	—					
12	25.47	29.86	0.03	0.01	27	—	—	—	—					
13	27.61	15.98	0.06	0.06	28	—	—	—	—					
14	65.61	30.94	0.11	0.02	番号なし	19.52	14.76	0.01	0.02					
15	54.33	3.08	0.12	0.13	計	1190.1	933.39	5.29	4.85					

第 4 号住居跡 (第 15 図)

調査区の最南端、K-7 グリッドを中心に位置する。この部分は傾斜角の急な斜面地となっており、土砂の流失・再堆積が見られる。標高は確認面で約 76.9 m、床面で約 76.7 m となり、検出された住居跡では最も低い地点に当たる。

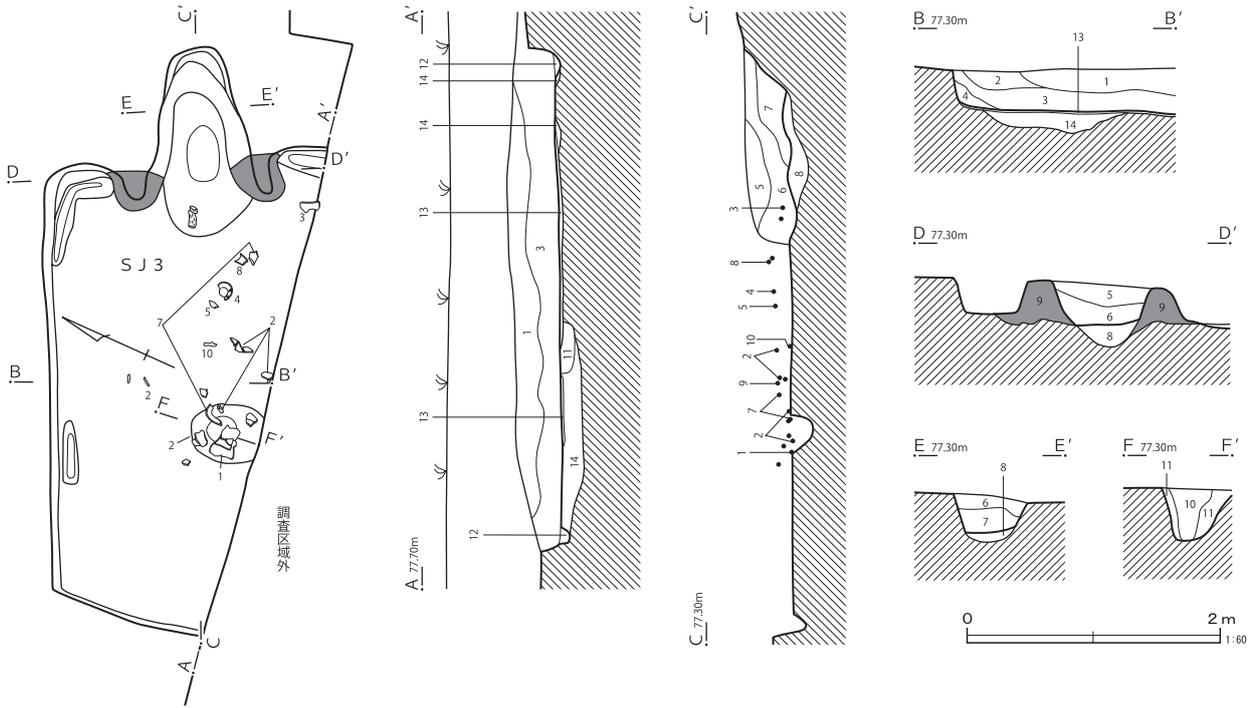
検出したのは南北 2.2m、東西 3.75m の範囲で、住居跡の南壁部は調査区外となるため、全体の形状や規模は明らかでない。カマドが東壁の中央部に設けられていると仮定すれば、南北はおおよそ 2.5 m に復元できる。この場合、全体は東西に長い長方形となり、壁溝内側の床面積は 6.9㎡ほどと

なる。カマドの設けられた東壁と直行する軸を主軸とした場合、その方向はおおよそ E-25°-N を指す。

覆土は自然堆積で、北東側の斜面上位から流入している。

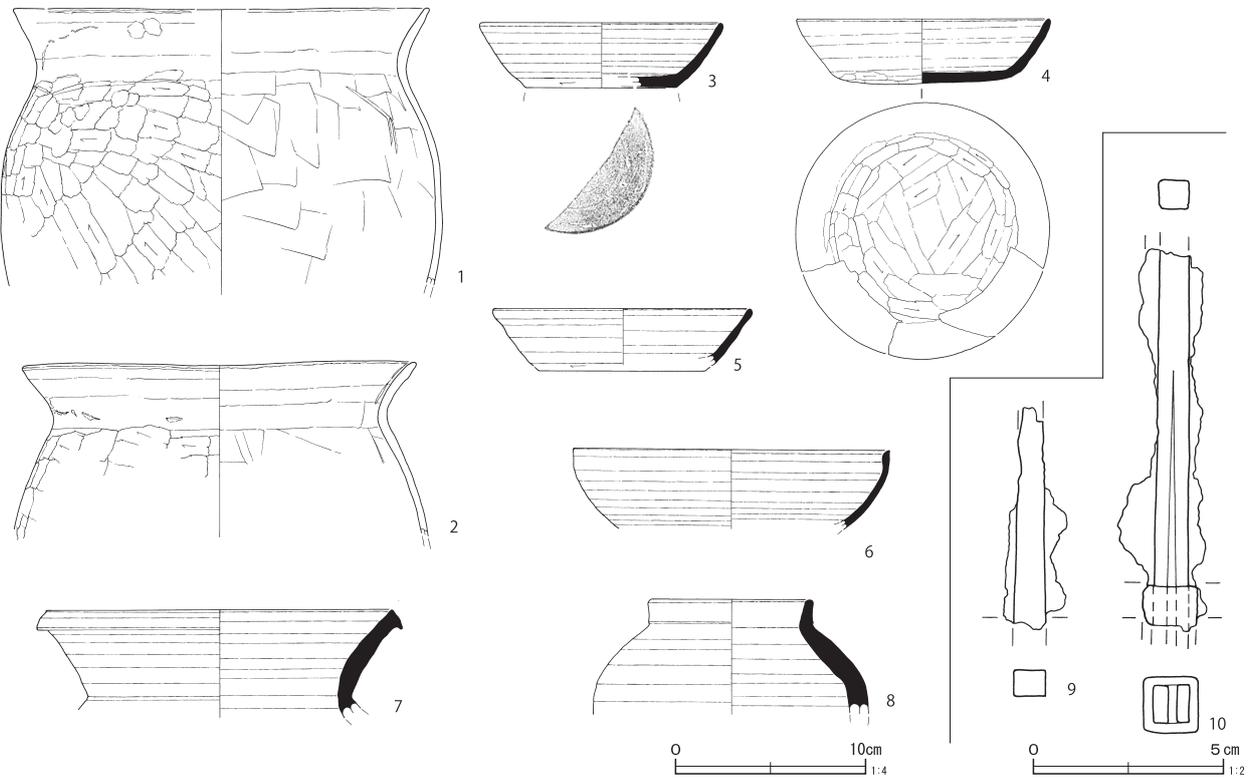
確認面から床までは 20cm ほどであるが、西壁は流失して壁溝のみの残存であった。床は掘り方に黄褐色の粘土を充填して形成される。床面は全体によく踏み締まり、カマド焚き口部は特に硬化が顕著であった。床面はおおよそ平坦ながら、南側がやや低い。

カマドは東壁の北側隅部寄りに設けられる。燃



S J 4

- | | | | | | |
|---------|-----------------------|------------------|----------|------------|---------------|
| 1 暗褐色土 | 焼土粒・炭化物粒少 | 北側斜面からの流入土 | 10 暗褐色土 | 地山粒少 | 柱痕 |
| 2 暗黄褐色土 | 地山粘土ブロック少 | 焼土ブロック少 | 11 暗茶褐色土 | 地山ブロック多 | 柱穴の充填土 |
| | | 北側斜面からの流入土 | 12 暗茶褐色土 | 地山ブロック多 | 壁溝 |
| 3 暗褐色土 | 焼土粒・炭化物粒多 | 北側斜面からの流入土 | 13 黄褐色土 | 黄褐色粘土ブロック | 14層の表面がしまった感じ |
| 4 暗褐色土 | 焼土粒少 | 地山粘土粒少 | | 貼床硬化面 | |
| 5 暗褐色土 | 焼土粒少 | 炭化物少 | 14 暗黄褐色土 | 黄褐色粘土ブロック多 | 床充填土 |
| 6 暗褐色土 | 焼土ブロック少 | 炭化物少 | | | |
| 7 赤褐色土 | 焼土ブロック | 崩壊したカマド燃焼部内側の被熱面 | | | |
| 8 暗灰褐色土 | 暗褐色土と白色粘土ブロックの混入 | カマドの掘り方充填土 | | | |
| 9 暗茶褐色土 | 暗茶褐色土に黄褐色の粘土や焼土粒が混入する | カマド袖 | | | |



第 15 図 第 4 号住居跡・出土遺物

第7表 第4号住居跡出土遺物観察表（第15図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	土師器	甕	(21.8)	(15.3)	—	ABC	—	Ⅱ	明褐	No. 16	12-6
2	土師器	甕	(20.4)	(9.3)	—	ABC	口頸部50	Ⅱ	橙	No. 10・11・12・17	12-7
3	須恵器	坏	(12.6)	3.4	(8.0)	BCG	30	I	灰	南比企 底部周辺回転ヘラ削り 煤ける No. 1	12-8
4	須恵器	坏	13.3	3.4	9.7	BC	80	I	灰	東金子 底部手持ヘラ削り 煤ける No. 4	13-1
5	須恵器	坏	(13.5)	(3.3)	—	BC	20	I	黄灰	東金子 煤ける No. 5	13-3
6	須恵器	鉢	(16.7)	(4.2)	—	BCFG	—	Ⅱ	灰	南比企	13-3
7	須恵器	甕	(18.2)	(5.8)	—	BCG	口縁50	I	灰	南比企 自然釉 No. 2・19	13-2
8	須恵器	短頸壺	(8.7)	(6.1)	—	BCG	—	I	灰黄	南比企 外面自然釉 No. 3	13-3
9	鉄製品	角棒状	長さ 5.9cm 幅 0.9cm 厚さ 0.7cm 重さ 10.3g							No. 8	13-4
10	鉄製品	不明品	長さ 10.2cm 幅 0.8cm 厚さ 0.8cm 重さ 34.8g							No. 6	13-4

焼部は幅 0.65m、奥行き 1.4 mほどの楕円形で、奥壁は緩やかに立ち上がり、煙出し状の浅い段をなしている。壁面は、焚き口部に比し奥の方がよく焼けている。火床に当たる部分には、白色粘土ブロックに褐色土を混じた土を貼って形成している。火床面には、厚さ 2～3mmの灰の堆積が観察された。袖は長さ約 30cm、幅約 40cmを測り、東壁に直交して造り付けられる。袖には土器や大型礫などの芯材は用いられておらず、黄褐色粘土を混じた暗茶褐色土のみで構築されている。

壁溝は部分的ながら、東・西・北の各壁下に検出された。幅約 15cm、床からの深さは 5 cm前後である。このほか、住居跡の中央部床面にピットを検出した。径 50cmほどの楕円形ピットで、深さは約 40cmを測る。根固めの充填土と柱痕が観察されたことから、柱穴であると考えられる。

遺物はカマド焚き口部から住居跡の中央部を中心に、床面より僅かに浮いた覆土中から土師器の甕、須恵器の坏・甕・短頸壺、鉄製品などが少量出土している。遺物の特徴から見て、本住居跡の所属時期は 8 世紀の第Ⅲ四半期と考えられる。

第5号住居跡（第16図）

I-5グリッドを中心に位置する。北側約 3m に第3号住居跡が存在する。標高は確認面で約 78.8 m、床面で約 78.5 mである。

検出された7軒のうちでは最も小型の住居跡で、全体は南北 2.4m、東西 2.4m、壁溝内側の床面積約 4.8㎡をそれぞれ測る。カマドの設けられた

東壁と直行する軸を主軸とした場合、その方向はおおよそ N-71°-E を指す。

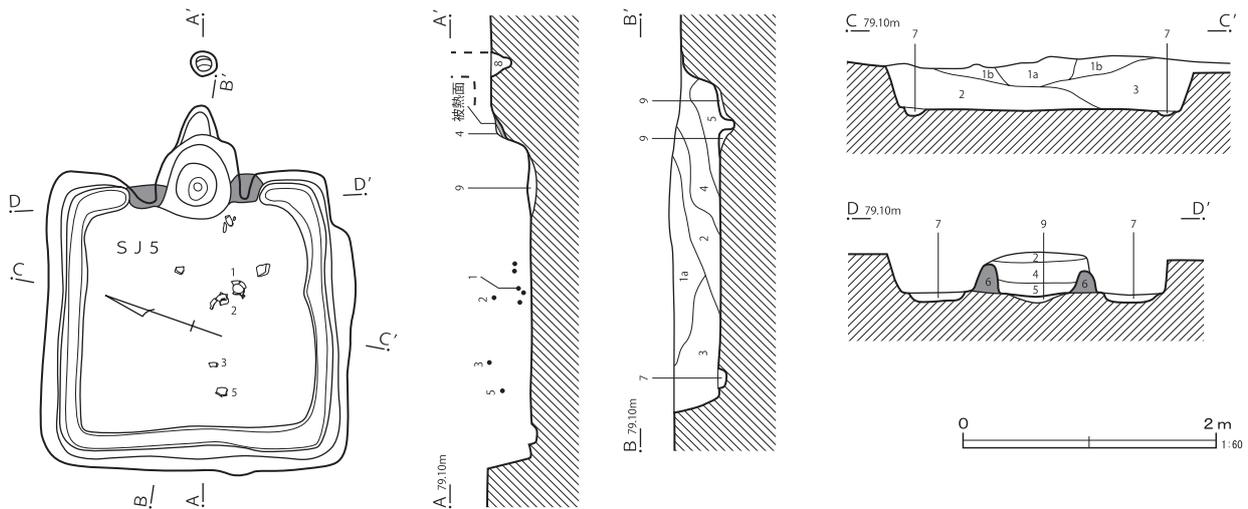
覆土の主体は北・西から流入した自然堆積土で、最上層のみ焼土ブロックや礫を含む人為的な埋め戻し土となっている。

確認面から床までの深さは 30cm前後で、床面は概ね平坦である。床は掘削面を整形したままで、貼床は施されていない。全体によく踏み締まっており、特にカマドの焚き口部は硬化が著しい。

カマドは東壁の中央部に設けられる。燃焼部は幅 0.6 m、奥行き 0.7 mで、奥壁は急角度で立ち上がり、上端は段を有して緩やかな傾斜となる。また、この延長線上に径 20cm、深さ 15cmほどのピットが検出された。位置や覆土の状態から推して、直立する煙突部の残存ではないかと考えられる。火床となる部分は床面より 5 cmほど低く掘り窪め、そこに床面と同一高まで褐色土を貼って火床面としている。その中心には、支脚を据えた痕跡と思われる、径 5 cmほどの窪みが検出された。東壁の袖は不注意からその大半を削り取ってしまったが、暗褐色粘土を用いた造り付けである。

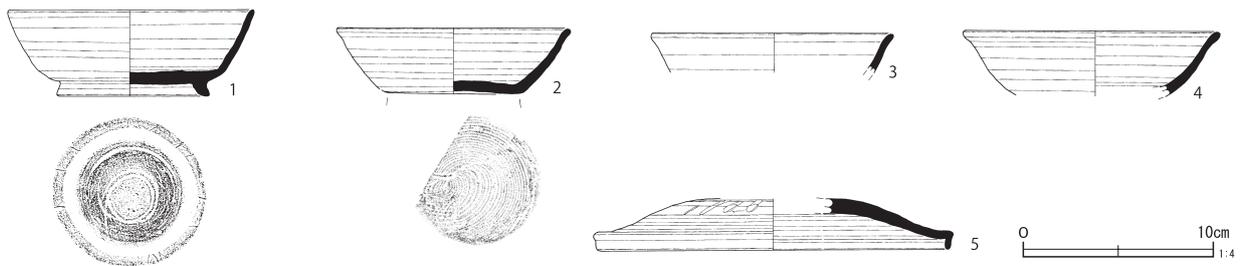
壁溝は幅約 15cm、床からの深さ 5 cm前後で全周する。柱穴など、他の施設は検出がなかった。

遺物は、覆土より土師器の甕が少量、須恵器の坏・高台付坏・蓋・甕が 10 点それぞれ出土した。いずれも微細な破片であるため、図示できたものは僅かである。遺物の特徴から見て、本住居跡の所属時期は 9 世紀の第Ⅱ四半期と考えられる。



- S J 5
- 1a 明褐色土 焼土ブロック多 礫を含む 平安時代の土器を含む人為的な埋戻し
 - 1b 暗褐色土 焼土粒多 平安時代の土器を含む 人為的な埋戻し
 - 2 暗褐色土 焼土粒少 北側からの流入土
 - 3 暗褐色土 焼土粒少 西側からの流入土
 - 4 暗褐色土 暗褐色粘土を用いている カマド天井の崩落土
 - 5 赤褐色土 焼土粒多 炭化物粒多 カマド燃焼部内側の被熱面の崩落土

- 6 暗褐色土 暗褐色粘土を用いている カマド袖は覆土と似た暗褐色の粘土を用いている
- 7 暗褐色土 暗茶褐色の地山ブロック 壁溝
- 8 暗褐色土 焼土粒微 煙道部に流れ込んだ土
- 9 暗褐色土 暗褐色土に暗茶褐色の地山ブロックと焼土粒が混入カマドの掘り方



第16図 第5号住居跡・出土遺物

第8表 第5号住居跡出土遺物観察表 (第16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	須恵器	高台付杯	12.9	4.5	7.9	BCG	90	II	灰白	南比企 No. 5	13-5
2	須恵器	杯	(12.2)	3.5	6.9	BCG	40	I	灰	南比企 No. 4	13-6
3	須恵器	杯	(12.6)	(2.1)	—	BCFG	—	I	灰白	南比企 No. 7	13-8
4	須恵器	杯	(12.8)	(3.4)	—	BCGH	—	I	灰	南比企 1層	13-8
5	須恵器	蓋	(18.3)	(2.7)	—	BCG	—	I	灰	南比企 No. 8	13-8

第6号住居跡 (第17図)

調査区の南端部、J-6グリッドを中心に位置する。北東約6mに第2号住居跡、南東約9mに第4号住居跡が存在する。標高は確認面で約77.8m、床面で約77.35mである。

東西長は3.3mでほぼ一定ながら、南北長は東壁部で3.4m、西壁部で3mと差が生じている。これが斜面部での検出に起因するものでないことは、壁溝部の状態を見ても同様である。このため、平面は台形状となっている。壁直下の床面積は約10㎡となり、新カマドの設けられた東壁と直行す

る軸を主軸とすれば、その方向はおよそN-75°-Eを指す。

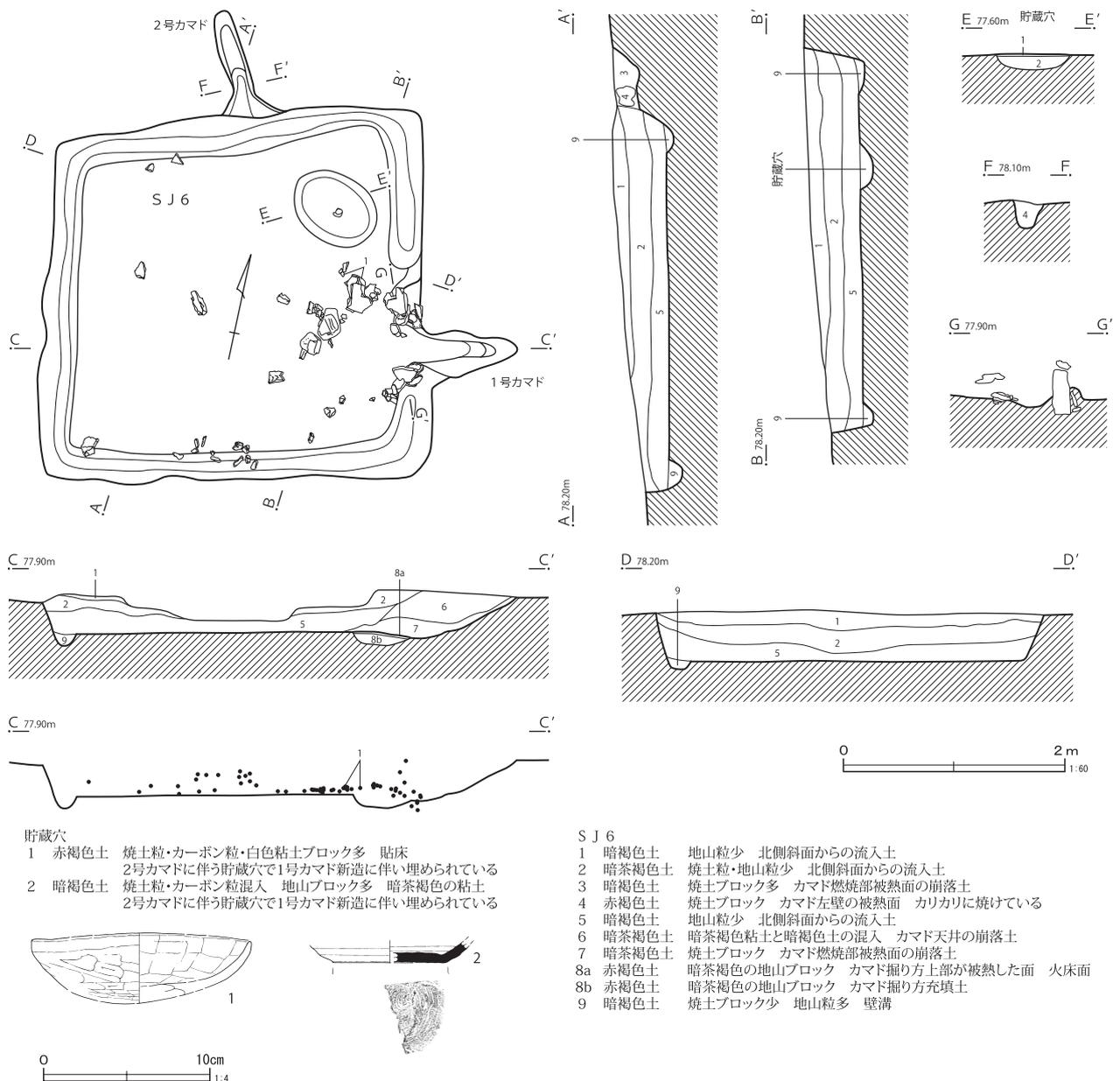
覆土は自然堆積で、主に北側斜面からの流入である。

調査区内では傾斜のきつい地点であるため、確認面から床までの深さは北壁部で約50cm、南壁部で約10cmと大きく異なっている。図示できなかったが、床は掘り方に暗褐色土を混じた地山の暗茶褐色粘土を充填し、貼床としている。全体によく踏み締まっており、中央部からカマドの焚き口部にかけては特に硬化が著しい。

カマドは東壁（1号）と北壁（2号）それぞれに検出された。1号カマドは東壁の南寄りに設けられる。燃烧部は幅0.45m、奥行き1.15mの細長い溝状で、奥壁緩やかに立ち上がっていく。火床となる部分は床面より10cmほど低く掘り窪め、そこに床面とほぼ同一高まで地山の褐色土を貼り、これを火床面としている。袖は片岩系の角礫を用い構築している。袖部分に集中する礫の検出状況から見て、右袖は長さ約40cm、厚さ15cmほどの角礫を床に10cm程度埋めて直立させ、その前面

と右側面を同石質の扁平礫で支保していたものと考えられる。左袖の中心となる角礫は抜き取られたためか、残存していなかった。破礫はカマド前面にも散在することから、焚き口部の天井にも両袖から角礫が架構されていた可能性がある。なお、それぞれの礫は火を受けて焼けているので、袖は石組のみで、粘土などは貼られていなかったと思われる。

2号カマドは北壁の中央部、やや東へ寄った位置に設けられる。袖・燃烧部ともに撤去されてお



第17図 第6号住居跡・出土遺物

第9表 第6号住居跡出土遺物観察表（第17図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	土師器	坏	(13.0)	4.2	—	BCG	60	Ⅲ	褐灰	No. 51・53 南比企	13-7
2	須恵器	坏	—	(1.4)	(6.8)	BCG	底30	Ⅱ	灰白		13-8

り、壁外へ延びる燃焼部の残存が検出されたに止まる。この部分には、天井部を形成していたと思われる焼土ブロックが詰まっており、カマド撤去後は住居の壁面となっている。

検出状態から見て、1号カマドと2号カマドの関係は、先行する北壁の2号カマドが崩落、乃至は住居の建て替えなどを契機に撤去され、新たに東壁の1号カマドが構築されたということになる。方形が崩れた住居跡の平面形、また床面より2号カマド燃焼部の底面が25cmほど上位にある点などを考慮すれば、床の掘り下げを伴う、住居の拡張が行われた可能性が高い。

壁溝は幅約30cm、床からの深さ10cm前後で全周する。床面と同一高までよく締まった地山が充填されており、開口していなかったと考えられる。

なお、住居跡の北東隅部寄りの床面からは、径80×60cm、深さ15cmほどの楕円形をした掘り込みが検出された。中には地山ブロックが詰められ、その上に薄く焼土が貼られ床面としている。おそらく、1号カマド構築に際して埋め戻されたもので、2号カマド機能時の貯蔵穴ではないかと推測される。貯蔵穴としては浅いが、上述のように床が拡張に伴い掘り下げられたとすれば、本来的な深さは40cmほどを想定し得る。

遺物は、覆土より土師器や須恵器の坏・甕が少量出土した。しかし、いずれも微細な破片であるため、図示できたものは僅かである。第17図1の須恵器坏は覆土中から、2の土師器坏は1号カマド左袖部分に散在する礫の下から、それぞれ検出された。このことから、本住居跡の所属時期は8世紀の第Ⅲ四半期と考えられる。

第7号住居跡（第18図）

J-5グリッドを中心に位置する。標高は確認面で約78.5m、底面で約77.6mである。

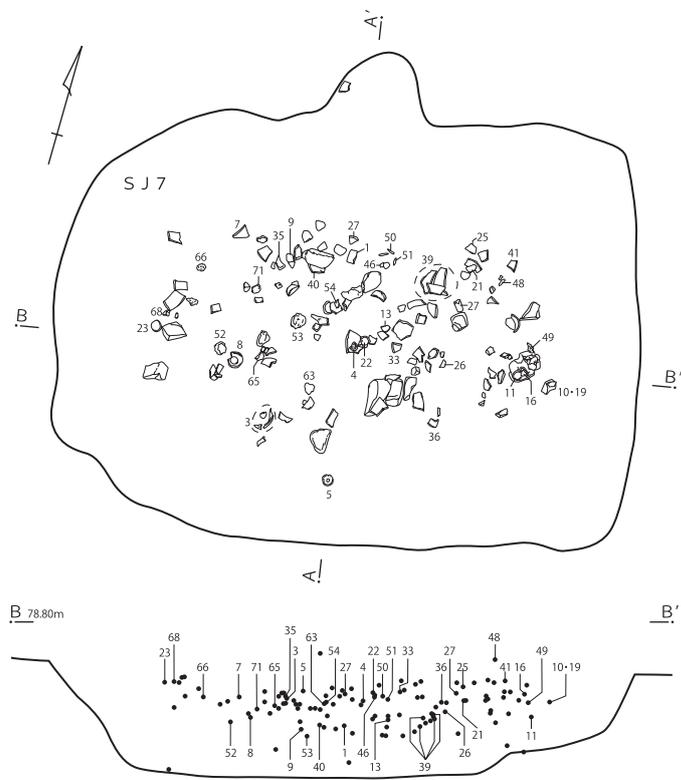
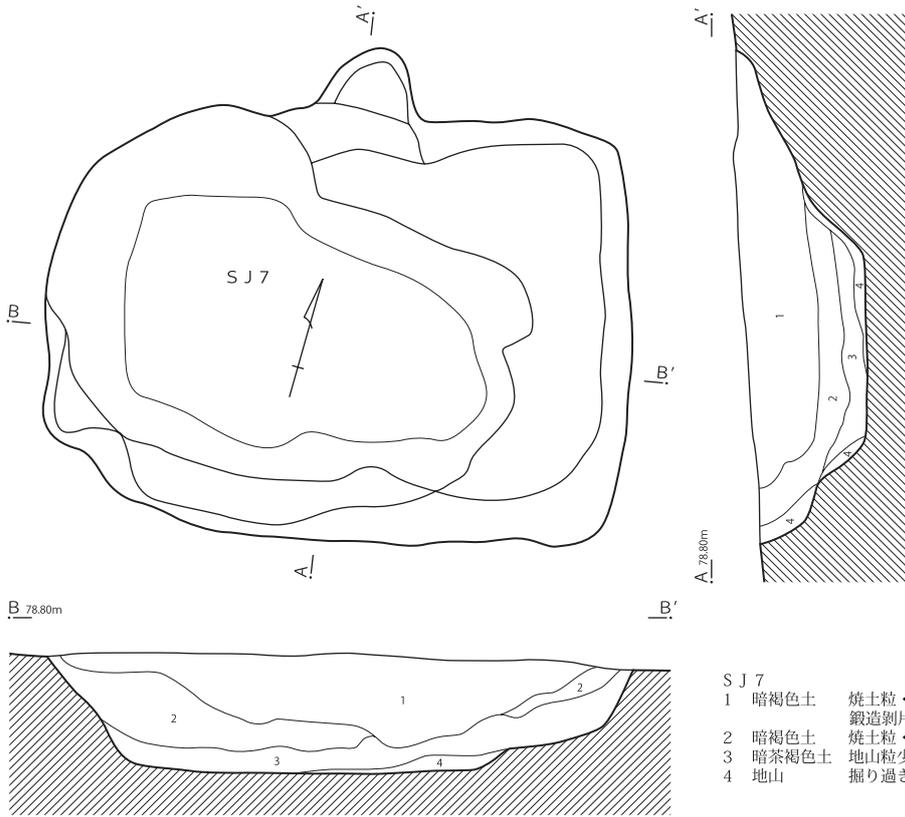
発掘調査では、カマドを備える長方形の住居跡として精査に臨んだものの、掘り下げると従い壁はだらだらと落ち込み、床面の検出がないまま大型の深い土壇状となった。また、カマドと思われた北壁の突出部は壁面が焼けておらず、袖や焼土等の検出もなかった。粘土採掘（地山は暗茶褐色の粘土層で、遺構底面で小礫を多量に含む黄褐色粘土層に達する）のため、廃絶した住居の窪みを利用したものとも考えられたが、覆土に複数の遺構が切り合う様子は観察できなかった。構築を途中で放棄し、これを粘土採掘に利用した住居跡である可能性が残るとはいえ、本遺構の性格は不明と言わざるを得ない。ただ、本書では便宜上、調査時に付した名称をそのまま用いることとした。

遺構の規模は東西約4.6m、南北約3.4mである。確認面から底までの深さは90cm前後で、底面は概ね平坦である。粘土採掘坑とすれば、礫を多量に含んだ粘土層の上面で掘削を終えていることになる。壁の立ち上がりは概ね急角度で、北壁部のみが緩やかとなっている。

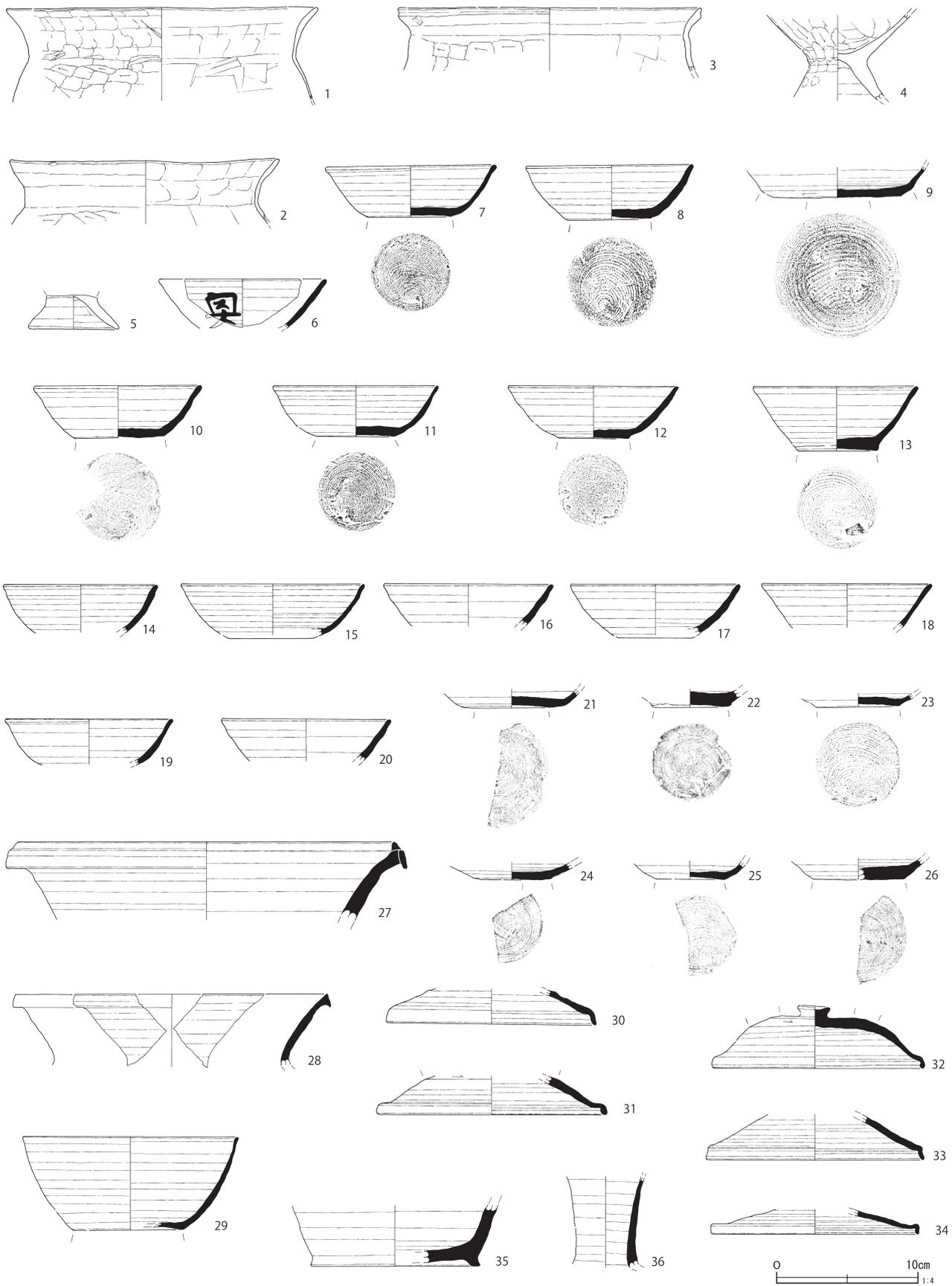
覆土は2層以下が斜面からの流入による自然堆積、1層が遺物や自然礫を多量に含む故意の埋め戻しである。

この1層からは土師器の甕・台付甕、須恵器の坏・甕・蓋・長頸瓶、瓦、羽口、椀形滓、鉄粒の付着した鉄床石などが多く出土した。残存率の高いものは少なく、大半は破片で接合するものも僅かであった。これらも、1層土とともに投棄されたものと判断される。出土土器から見て、本遺構の埋め戻し時期は9世紀第Ⅲ四半期と考えられる。

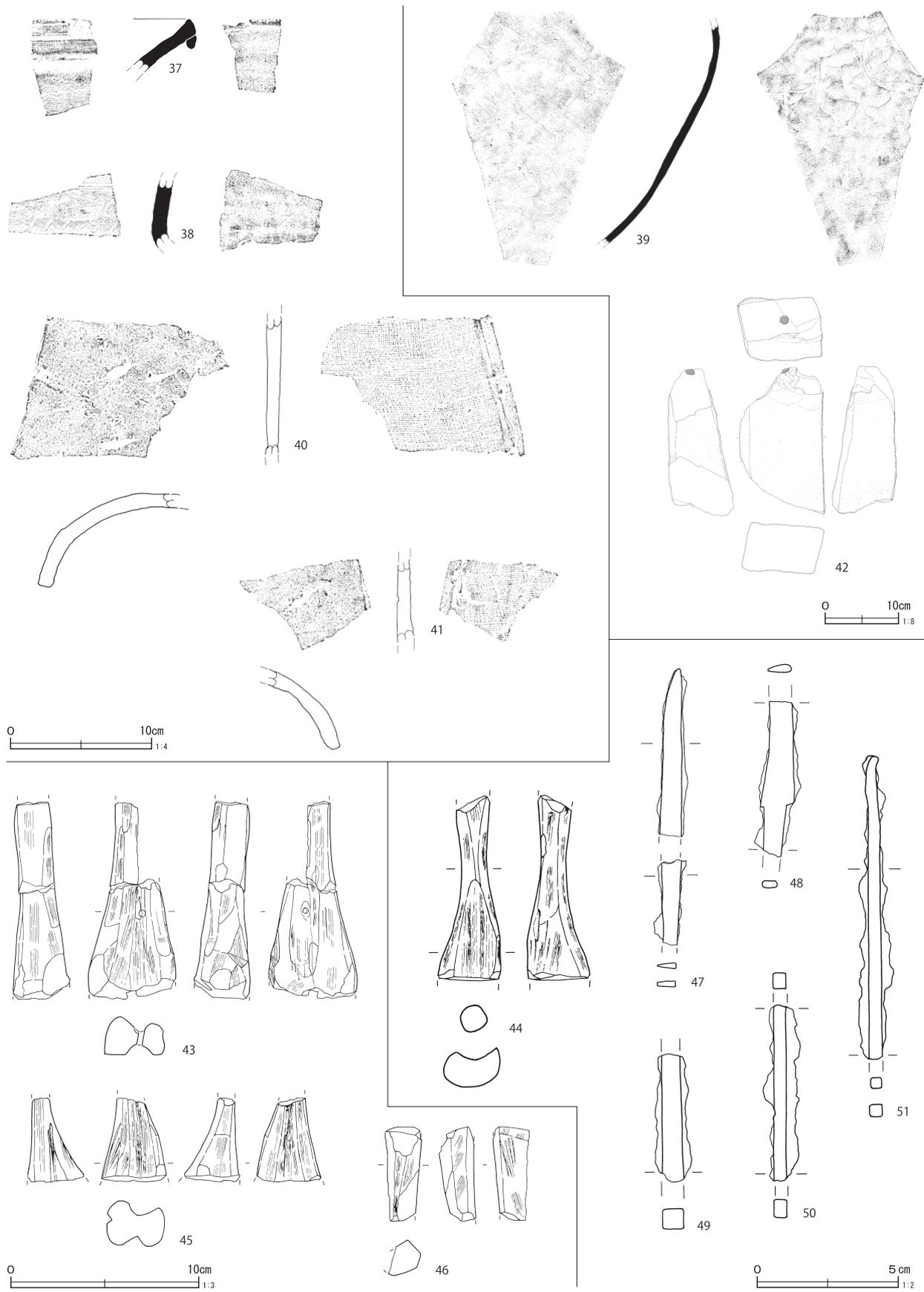
また、1層より鍛冶関連遺物の出土があったため、調査では第3号住居跡同様、遺構内に50cm方眼を設定して同層の土壌を採取・水洗した。洗い終えた土壌を整理時に肉眼観察、また磁石を用



第 18 図 第 7 号住居跡



第 19 图 第 7 号住居跡出土遺物 (1)



第 20 图 第 7 号住居跡出土遺物 (2)

第 10 表 第 7 号住居跡出土遺物観察表 (1) (第 19・20 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	土師器	甕	(20.8)	(6.8)	—	ABC	口 20	II	橙	No. 113	14-1
2	土師器	甕	(18.6)	(4.6)	—	ABCD	口 20	II	橙		14-2
3	土師器	甕	(21.1)	(4.5)	—	ABC	口 25	II	橙	No. 23	14-3
4	土師器	台付甕	—	(6.1)	—	ABCD	—	II	橙	No. 33	14-4
5	土師器	台付甕	—	(2.4)	(6.2)	ABCG	脚 80	II	黒褐	No. 29	14-5
6	須恵器	坏	(11.7)	(3.5)	—	BCG	—	II	灰白	南比企 墨書「奥」か?	15-4
7	須恵器	坏	11.9	3.6	6.0	BCG	80	I	黄灰	南比企 No. 12	14-6
8	須恵器	坏	11.7	3.8	5.9	BCG	90	III	灰褐	南比企 「底面ヘラ記号「×」」 No. 17	14-7
9	須恵器	坏	—	(2.2)	9.0	BCG	底 100	I	灰	南比企 No. 94	15-4
10	須恵器	坏	(11.7)	3.7	6.4	BCH	60	I	灰	東金子 No. 49	14-8
11	須恵器	坏	(11.5)	3.6	5.5	BC	50	I	灰	東金子 見込みにヘラ記号「×」 No. 46	15-1
12	須恵器	坏	(11.8)	3.7	5.0	BCG	40	II	灰白	南比企	15-2
13	須恵器	坏	(11.5)	4.6	5.6	BCH	40	II	灰	東金子 No. 90	15-3
14	須恵器	坏	(10.8)	(3.4)	—	BCG	—	II	灰	南比企	15-5
15	須恵器	坏	(12.8)	(3.6)	—	BCG	—	I	灰	南比企	15-4
16	須恵器	坏	(11.7)	(2.9)	—	BCG	—	I	灰白	南比企 No. 47	15-5
17	須恵器	坏	(11.8)	(3.6)	—	BCH	—	II	黄灰	東金子?	15-5
18	須恵器	坏	(11.8)	(3.1)	—	BC	—	I	灰	東金子	15-5
19	須恵器	坏	(11.7)	(3.2)	—	BCGH	—	II	灰	南比企 No. 49	15-5
20	須恵器	坏	(11.8)	(3.9)	—	BCG	—	I	灰	南比企	15-5
21	須恵器	坏	—	(1.3)	(5.2)	BCG	底 50	II	灰白	南比企 「底面ヘラ記号」 No. 100	15-6
22	須恵器	坏	—	(1.3)	5.7	BCG	底 100	II	灰白	南比企 No. 34	15-6
23	須恵器	坏	—	(1.0)	5.9	BCG	底 100	I	灰黄	南比企 No. 3	15-6
24	須恵器	坏	—	(1.3)	(5.5)	BCG	底 40	I	灰	南比企 「底面ヘラ記号」	15-6
25	須恵器	坏	—	(1.3)	(4.9)	BCG	底 70	II	灰白	南比企 No. 102	15-6
26	須恵器	坏	—	(1.6)	(6.5)	BCG	底 40	I	灰	南比企 No. 69	15-6
27	須恵器	甕	(26.5)	(5.6)	—	BCDG	—	I	灰	南比企 No. 71・114	16-3
28	須恵器	甕	(20.9)	(5.1)	—	BCF	—	I	灰	東金子 内面自然釉	16-3
29	須恵器	無台碗	(15.3)	6.6	(8.3)	BC	30	III	淡黄	東金子? 磨耗著しい	15-7
30	須恵器	蓋	(14.7)	(2.4)	—	BCGH	—	II	灰白	南比企	16-2
31	須恵器	蓋	(16.2)	(2.8)	—	BCG	—	II	灰白	南比企 No. 65	16-2
32	須恵器	蓋	(14.9)	4.4	—	BCG	50	II	灰	南比企	15-8
33	須恵器	蓋	(15.3)	(3.2)	—	BCGH	—	I	灰	南比企 No. 76	16-2
34	須恵器	蓋	(14.6)	(1.7)	—	BC	—	III	灰白	東金子?	16-2
35	須恵器	瓶	—	(4.3)	(11.8)	BCG	底 30	I	灰	南比企 No. 56	16-1
36	須恵器	長頸瓶	—	(6.5)	—	BC	—	I	灰白	東金子 自然釉 No. 84	16-3
37	須恵器	甕	—	(3.2)	—	BCG	—	I	灰	南比企 38 と同一個体	16-3
38	須恵器	甕	—	(4.7)	—	BCG	—	I	灰	南比企 37 と同一個体	16-3
39	須恵器	甕	—	(28.1)	—	BCGH	—	I	灰	南比企 No. 81・104・105・121	16-4
40	瓦	丸瓦	長さ (11.3)cm 幅 (9.9)cm 厚さ 1.0cm 凸面横方向ナデ							凹面布目 側面は狭端から広端へ向けヘラ削り 41 と同一個体? 焼成良 灰色	16-5
41	瓦	丸瓦	長さ (6.0)cm 幅 (7.5)cm 厚さ 1.0cm 凸面横方向ナデ							凹面布目 側面は狭端から広端へ向けヘラ削り 40 と同一個体? 焼成良 灰色	16-5
42	石製品	鉄床石	長さ [21.0]cm 幅 [11.8]cm 厚さ 7.4cm 重さ 3180.0g 鉄粒付着							被熱 砂岩 No. 91	16-6
43	石製品	砥石	長さ [10.6]cm 幅 [4.7]cm 厚さ [3.0]cm 重さ 97.37g							凝灰岩	16-7
44	石製品	砥石	長さ 6.6cm 幅 2.2cm 厚さ 1.3cm 重さ 16.26g							安山岩?	17-1
45	石製品	砥石	長さ [4.5]cm 幅 [3.4]cm 厚さ 2.4cm 重さ 28.50g							凝灰岩	17-2
46	石製品	砥石	長さ [5.0]cm 幅 [1.8]cm 厚さ [1.8]cm 重さ 18.65g							凝灰岩 No. 110	17-3
47	鉄製品	刀子	刃部長さ [6.0]cm 幅 1.3cm 茎部長さ [3.0]cm 幅 0.7cm 重さ 6.6g								17-4
48	鉄製品	刀子	茎部長さ 1.7cm 幅 1.5cm 厚さ 0.3cm 刃部長さ 3.8cm 幅 0.8cm 厚さ 0.3cm							No. 111 重さ 8.1g	17-4
49	鉄製品	角棒状	長さ 4.6cm 幅 0.7cm 厚さ 0.7cm 重さ 9.1g							No. 43	17-4
50	鉄製品	角棒状	長さ 6.3cm 幅 0.45cm 厚さ 0.65cm 重さ 7.6g							51 と同一個体か?	17-4
51	鉄製品	角棒状	長さ 10.8cm 幅 0.4cm 厚さ 0.4cm 重さ 10.3g							紡錘車(軸棒)か? 50 と同一個体か? No. 106・108	17-4



第 21 图 第 7 号住居跡出土遺物 (3)

第 11 表 第 7 号住居跡出土遺物観察表 (2) (第 21 図)

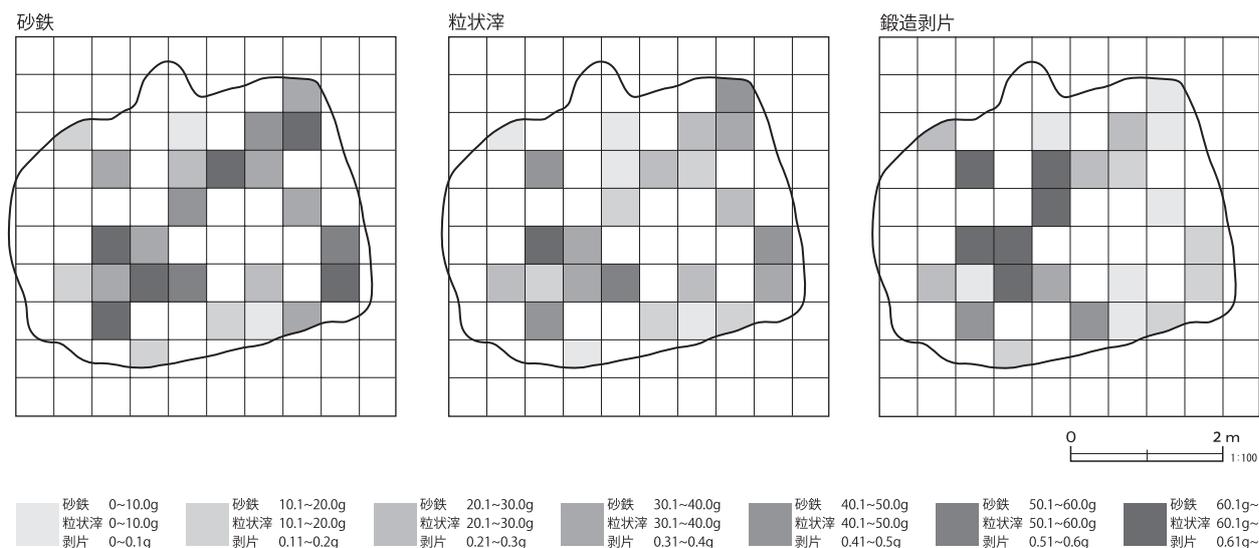
番号	種別	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	磁着	メタル度	備考・特記事項	図版
52	椀形滓	9.4	10.0	7.55	729.9	○	M	No. 15 表面は不整楕円形。滓が階層状に堆積し厚い。底面半球状に丸味をもつ椀形。細かな粒状の滓が付着。色調は銀灰色。	18-3
53	椀形滓	9.0	10.7	4.95	459.3	○	M	No. 30 表面は不整楕円形。滓が階層状に堆積し厚い。底面半球状に丸味をもつ椀形。細かな粒状の滓が付着。色調は銀灰色。	18-3
54	椀形滓	7.6	9.4	3.7	298.0	○	M	No. 54・31 薄い皿状。底面は丸みを持つ椀形。細かな粒状の滓が付着。中心部は銀白色。周囲は赤茶色。	18-3
55	椀形滓	6.7	7.2	2.3	123.3	○	H	薄い皿状。底面は丸みを持つ椀形。細かな粒状の滓が付着。中心部は銀白色。周囲は赤茶色。	18-3
56	椀形滓	7.1	9.3	2.3	184.2	○	H	薄い皿状。底面は丸みを持つ椀形。細かな粒状の滓が付着。中心部は銀白色。周囲は赤茶色。	18-3
57	椀形滓	6.2	6.9	3.1	206.3	○	L	No. 52 薄い皿状。底面は丸みを持つ椀形。細かな粒状の滓が付着。中心部は銀白色。周囲は赤茶色。	18-3
58	椀形滓	6.8	6.4	1.8	91.0	○	H	薄い皿状。底面は丸みを持つ椀形。細かな粒状の滓が付着。中心部は銀白色。周囲は赤茶色。	18-3
59	椀形滓	4.5	7.1	2.2	85.0	○	H	No. 35 薄い皿状。底面は丸みを持つ椀形。細かな粒状の滓が付着。中心部は銀白色。周囲は赤茶色。	18-3
60	椀形滓	5.0	7.0	3.2	81.5	○	錆化	薄い皿状。底面は丸みを持つ椀形。細かな粒状の滓が付着。中心部は銀白色。周囲は赤茶色。	18-3
61	椀形滓	3.8	5.7	2.0	52.4	○	H	薄い皿状。底面は丸みを持つ椀形。細かな粒状の滓が付着。中心部は銀白色。周囲は赤茶色。	18-3
62	椀形滓	4.75	6.1	1.55	56.0	○	H	No. 53 薄い皿状。底面は丸みを持つ椀形。細かな粒状の滓が付着。中心部は銀白色。周囲は赤茶色。	18-3
63	椀形滓	5.4	6.1	2.5	9.27	○	H	No. 26 薄い皿状。底面は丸みを持つ椀形。細かな粒状の滓が付着。中心部は銀白色。周囲は赤茶色。	18-3
64	椀形滓	5.05	7.1	2.2	102.0	○	H	薄い皿状。底面は丸みを持つ椀形。細かな粒状の滓が付着。中心部は銀白色。周囲は赤茶色。	18-3
65	椀形滓	4.5	6.8	1.7	78.8	○	H	No. 18 薄い皿状。底面は丸みを持つ椀形。細かな粒状の滓が付着。中心部は銀白色。周囲は赤茶色。	18-3
66	椀形滓	4.5	5.5	2.6	82.8	○	L	No. 10 薄い皿状。底面は丸みを持つ椀形。細かな粒状の滓が付着。中心部は銀白色。周囲は赤茶色。	18-3
67	椀形滓	4.6	4.0	1.7	50.1	○	H	薄い皿状。底面は丸みを持つ椀形。細かな粒状の滓が付着。中心部は銀白色。周囲は赤茶色。	18-3
68	椀形滓	3.2	4.3	1.3	21.0	○	H	No. 4 薄い皿状。底面は丸みを持つ椀形。細かな粒状の滓が付着。中心部は銀白色。周囲は赤茶色。	18-3
69	椀形滓	3.0	3.0	2.7	30.4	○	H	椀形滓の破片。色調は錆化した部分は赤茶、メタル部分は銀白色。表面に細かな粒状の凹凸あり。断面に細かな気泡。底面部滓化。	18-3
70	椀形滓	3.3	2.8	3.1	47.8	○	H	椀形滓の破片。色調は錆化した部分は赤茶、メタル部分は銀白色。表面に細かな粒状の凹凸あり。断面に細かな気泡。底面部滓化。	18-3
71	椀形滓	2.9	2.7	1.7	22.3	○	H	椀形滓の破片。色調は錆化した部分は赤茶、メタル部分は銀白色。表面に細かな粒状の凹凸あり。断面に細かな気泡。底面部滓化。	18-3
72	椀形滓	2.5	3.5	1.2	9.3	○	H	No. 52 薄い皿状。底面は丸みを持つ椀形。細かな粒状の滓が付着。中心部は銀白色。周囲は赤茶色。	18-3
73	羽口	長径 6.4cm	短径 5.7cm	厚さ 1.9cm	重さ 64.0g			No. 45・55 鍛冶炉の送風管として装着し使用したもの。発砲し溶解面が平坦になっている。内側は孔が残存。色調は還元され青灰色。	18-2
74	羽口	長径 6.8cm	短径 4.4cm	厚さ 2.2cm	重さ 63.4g			No. 38 鍛冶炉の送風管として装着し使用したもの。内側は孔が一部残存。色調は還元された青灰色と酸化した褐色。	18-2
75	羽口	長径 5.3cm	短径 5.0cm	厚さ 2.7cm	重さ 66.9g			鍛冶炉の送風管として装着し使用したもの。発砲し溶解面が残る。	18-2
76	羽口	長径 6.7cm	短径 3.6cm	厚さ 1.8cm	重さ 39.1g			鍛冶炉の送風管として装着し使用したもの。発砲し白色の石が露出。内側は孔が一部残存。色調は還元され青灰色。	18-2
77	羽口	長径 5.1cm	短径 5.0cm	厚さ 1.9cm	重さ 42.9g			鍛冶炉の送風管として装着し使用したもの。発砲し溶解面が残る。	18-2
78	羽口	長径 3.9cm	短径 4.7cm	厚さ 2.0cm	重さ 31.7g			鍛冶炉の送風管として装着し使用したもの。発砲し溶解面が残る。	18-2
79	羽口	長径 4.3cm	短径 2.7cm	厚さ 1.9cm	重さ 20.0g			鍛冶炉の送風管として装着し使用したもの。発砲し溶解面が残る。	18-2

いた磁着により選別を行ったところ、砂鉄・粒状滓・鍛造剥片（砂鉄剥片と鉄粒剥片）それぞれの検出があった。総重量は砂鉄が962.9g、粒状滓が724.44g、鍛造剥片が16.47gである。

検出された砂鉄・粒状滓・鍛造剥片の重量を方眼ごと示すと、第22図及び第12表のようになる。三者ともに特に集中する傾向は窺えないことから、これらは第7号住居跡内での鍛鉄作業を示す遺物

ではなく、破損した羽口や鉄滓などと一緒に投棄されたものと考えられる。

北側12mほどには、鍛冶工房である第3号住居跡が存在する。加えて、出土遺物もほぼ同一時期と認められるので、粘土採掘(?)後に窪地となっていた本跡は、鍛冶工房で不要となった品々や、塵芥の廃棄場(ゴミ穴)として利用された可能性が高い。



第22図 第7号住居跡砂鉄・粒状滓・鍛造剥片分布図

第12表 第7号住居跡砂鉄・粒状滓・鍛造剥片検出量一覧表

区画	砂鉄	粒状滓	鍛造剥片		区画	砂鉄	粒状滓	鍛造剥片		区画	砂鉄	粒状滓	鍛造剥片	
			砂鉄剥片	鉄粒剥片				砂鉄剥片	鉄粒剥片				砂鉄剥片	鉄粒剥片
1	—	—	—	—	22	—	—	—	—	43	—	—	—	—
2	—	—	—	—	23	67.03	23.08	0.04	0.18	44	10.85	114.58	0.44	0.47
3	—	—	—	—	24	—	—	—	—	45	33.13	16.27	0.03	0.03
4	58.58	44.07	0.15	0.01	25	—	—	—	—	46	74.82	48.88	0.16	0.34
5	63.36	34.99	0.03	0.11	26	—	—	—	—	47	—	—	—	—
6	—	—	—	—	27	19.38	15.80	0.17	0.27	48	16.67	8.02	0.17	0.06
7	33.24	43.83	0.05	0.01	28	9.29	8.69	0.02	0.04	49	—	—	—	—
8	76.08	33.13	0.03	0.05	29	21.61	3.61	0.69	0.04	50	—	—	—	—
9	—	—	—	—	30	41.10	15.68	2.15	0.63	51	—	—	—	—
10	32.82	25.26	0.01	0.02	31	—	—	—	—	52	19.03	20.97	0.12	0.09
11	—	—	—	—	32	50.21	59.72	0.25	0.07	53	—	—	—	—
12	—	—	—	—	33	—	—	—	—	54	—	—	—	—
13	31.58	16.92	0.07	0.04	34	—	—	—	—	55	—	—	—	—
14	—	—	—	—	35	—	—	—	—	56	—	—	—	—
15	44.47	25.24	0.02	0.23	36	—	—	—	—	57	—	—	—	—
16	30.86	14.79	0.14	—	37	47.01	38.28	2.73	1.20	58	—	—	—	—
17	—	—	—	—	38	60.12	30.24	0.87	0.36	59	—	—	—	—
18	—	—	—	—	39	—	—	—	—	60	—	—	—	—
19	29.80	20.34	0.03	0.01	40	17.08	3.08	0.12	—	61	—	—	—	—
20	9.79	7.25	0.01	0.03	41	—	—	—	—	不明	32.98	6.22	0.04	1.46
21	—	—	—	—	42	32.01	45.50	1.21	0.97	計	962.9	724.44	9.75	6.72

2. 溝跡

溝跡は調査区中央部、標高の最も高い平坦部に集中して7条が検出された。鉤の手状や箱形状に屈曲するものが特徴的であるが、基本的には台地の延びる方向と一致する、東—西を強く意識して開鑿された溝群である。

調査区の幅が狭いため各溝跡の規模（範囲）や性格は不詳ながら、鉤の手状・箱形状のものは家屋、あるいは屋敷地などを取り囲む堀や区画溝のようである。また、東西方向の直線的に延びる溝跡も、それらと一連の区画を意図したものと思われる。

第1号溝跡（第23・24図）

調査区の北端部は二股に分かれ、その中間部分は調査対象外となっている。本溝跡はその東側調査区、D—5グリッドに検出された。7条の溝跡群の中では最も北側に位置する溝跡である。

検出範囲は東西約8.4mで、二股に分かれた西側の調査区には延びていない。このことから、本溝跡は中央の未調査区で収束、乃至は南北いずれかの方向へ屈曲するものと推測される。

上幅は1.1～1.8mで、西が狭く東へ向け広がっていく。確認面からの深さは0.05～0.1mで東側が浅いが、溝底の標高を見ると、西から東へ僅かに低くなっていく。走向は、およそN—69°—Eを指す。

覆土は自然堆積で、締まりがなくパサパサの土である。

遺物の出土はなかった。このため、本溝跡の所属時期は明らかとし得ないが、覆土の共通性から推せば、他の溝跡と同じく近世以降、それも比較的新しい時期のものと思われる。

第2号溝跡（第23・24図）

F—4・5グリッドに検出された。西側は収束しているが、東側は調査区外へ延びるため、全体

れる。

なお、調査時に第3・4・5号溝跡としたものは各々が単独のものではなく、連続して区画をなす一つの溝跡であるので、以下では一括して記述する。

遺物はごく少量ながら、第2・3・4号溝跡より奈良・平安時代の土師器や須恵器、近世陶磁器の微細な破片が出土している。覆土の様子や出土遺物から見て、これらの溝跡は近世以降のものと考えられる。

の規模・形状は明らかでない。また、西側の一部は第24号土壇に切られている。東西方向に延びる直線的な溝跡で、中央付近はやや狭窄したり、南へ突出したりする部分がある。この狭窄部を境に、東側と西側では幅や深さ、また走向がやや異なっている。

検出したのは長さ約12.5mの範囲である。狭窄部の東側は上幅約1.2m、深さ約0.2m、西側は上幅0.6～1m、深さ約0.1mである。東西両側とも壁の立ち上がりは緩やかながら、北壁がやや急となっている。走向は東側がおよそN—77°—E、西側がおよそN—83°—Eとなる。

規模や走向の相違に加え、東側は狭窄部で南へ直角に折れ、西側はその隅部を除け、幅を狭めて接続しているようにも見える。覆土の観察では切り合いが認められなかったものの、屈曲する東側の深い溝に、西側の浅いものが掘り足された可能性がある。

遺物は微細な破片のため図示できなかったが、覆土中より土師器の甕が6片、須恵器の坏・蓋が各1片、磁器の茶碗が2片出土している。遺物や覆土から見て、本溝跡は近世以降、それもかなり新しい時期のものと考えられる。

第3・4・5号溝跡（第23・24図）

F・G—2～5グリッドに検出された。冒頭で触れたように、調査では第3～5号の番号を付して（区分は視覚的で曖昧）扱ったが、その走向性や配置、規模や覆土の共通性から見て、一連の遺構であることは明らかである。このため、以下ではそれを総体的に述べることにする。なお、記述の便宜上、主に方向に基づいて五つの区に分けた。

全体は南に開口した大きな箱形状の溝で、その内部には、さらに鉤の手状の溝が派生している。調査区東端から西へ延びる1区（調査時の第3号溝跡）は、検出長約10m、上幅約1.3m、確認面からの深さ約0.45mをそれぞれ測る。溝底は僅かながら、西から東へ向け深くなっていく。横断面はV字状を呈し、壁の立ち上がりは南壁に比して北壁が急となる。西端部は25cmほどの段を有し、浅い南北溝の2区（調査では5区の接続する部分を境に、南半を第3号溝跡、北半を第5号溝跡とした）へ移行する。両区のなす隅部はほぼ直角である。

2区の長さは約8.3m、上幅は約0.6m、深さは約15cmである。横断面は皿状で、溝底の標高は南～北を通じほぼ水平を保っている。北端部は急角度で西へ折れ、再び東西溝の3区となる。隅部はやはり段を有し、15cmほど深くなる。

この北辺を画す3区（調査時は第5号溝跡）は、長さ約16.5m、上幅約1.2～1.5m、深さは約25cmである。走向およそN—78°—Eと直線的ながら、西部はやや北へ曲がっている。溝底は西から東へ向け次第に深くなり、両端部では標高上40cmほどの差が生じている。1区同様、横断面はV字状を呈し、壁の立ち上がりは南壁に比して北壁が急となっている。西端部は丸味を帯びて屈曲し、西辺をなす南北溝に移行する。他の屈曲部が直角であったのに対し、この部分の屈曲は緩やかで、かなりの鈍角となっている。

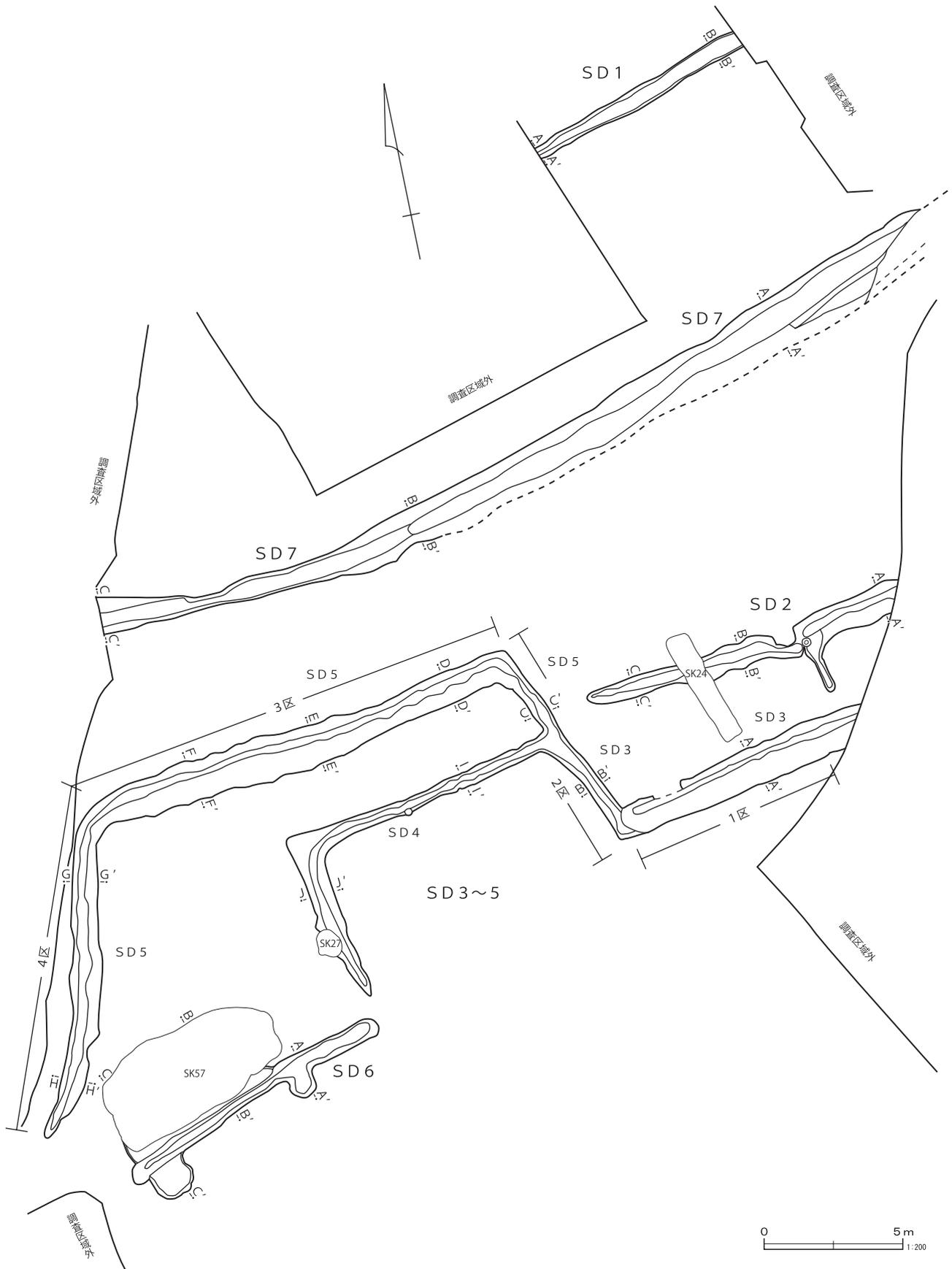
これより南へ延びる南北溝の4区（調査時は第

5号溝跡）は、西へ向け僅かに湾曲するように開鑿されている。長さは約12.5m、上幅約1m、深さは約20cmである。但し、南へ向け幅と深さを減じ、端部は立ち上がることなく確認面へ同化している。横断面は船底形で、東壁に比して西壁の立ち上がりが急となっている。溝底はやや凹凸を生ずるものの、標高的にはほぼ水平を保っている。

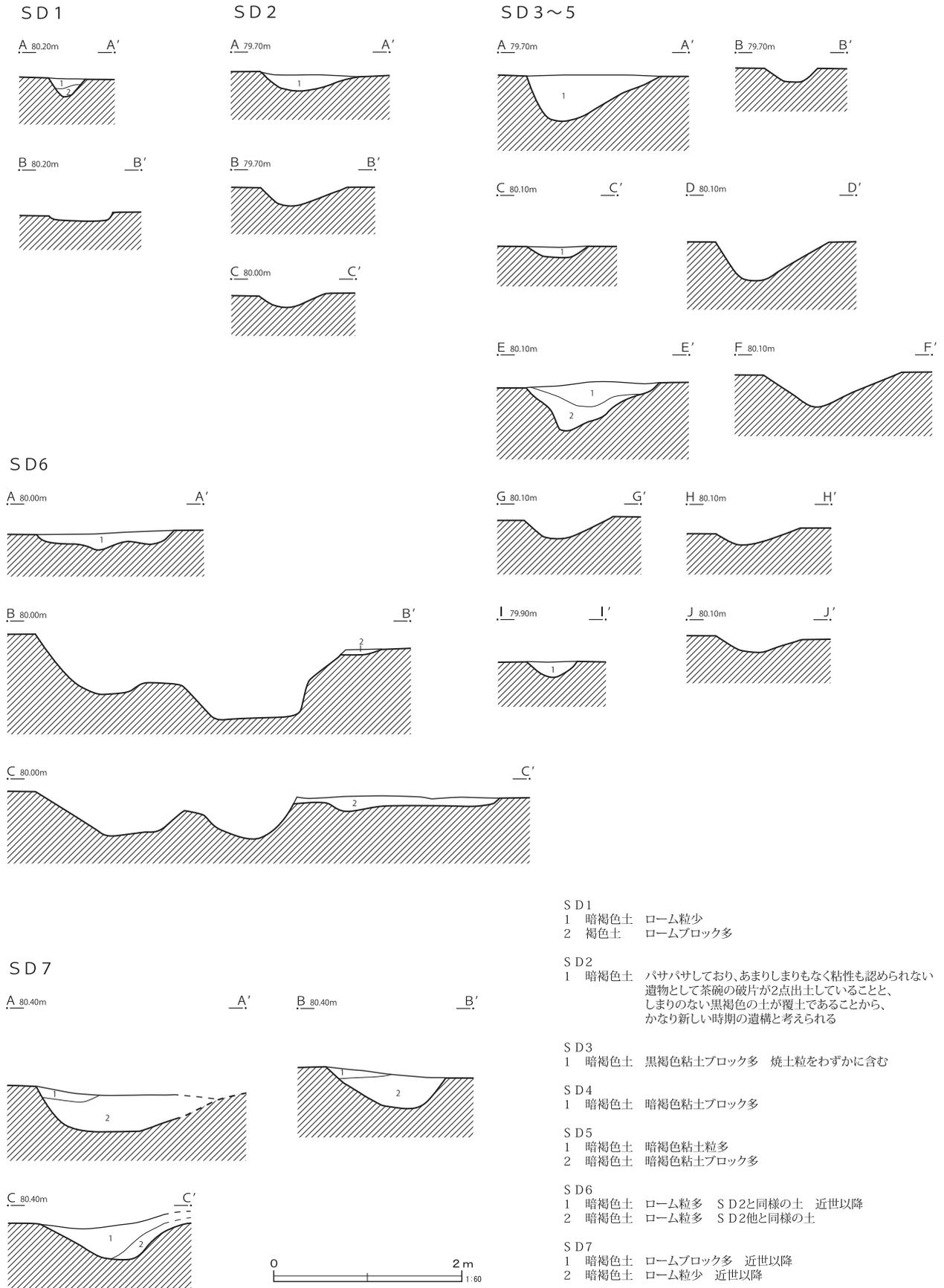
2区から派生する鉤の手状の5区（調査時の第4号溝跡）は、2区中央部から約10m西へ延びて南へ折れ、約5.5mで収束する。南端部は立ち上がることなく確認面へ同化している。その延長上には、東西溝である第6号溝跡の東端が位置する。土砂の流失や耕作による削平を考慮すれば、両者は繋がっていた蓋然性が高い。東西溝となる部分は3区に並行するばかりでなく、同様に西端がやや北へ曲がっている。一方、2区との接続部を越えた延長上には、第2号溝跡が存在する。5区溝跡の上幅は0.6～0.9m、確認面からの深さは15～20cmほどである。しかし、標高で見ると溝底は西から東へ向かって次第に深くなり、両端部では30cm前後の差が生じている。横断面は船底形を呈し、壁の立ち上がりは南北溝部分より東西溝部分の方が急である。

1・3区及び5区の東西部分の走向は、およそN—77°—Eを指す。2・4区及び5区の南北溝部分はこれと直交する走向角とはならず、南側へ開くように開鑿されている。

以上のように、第3～5号溝跡からなる本遺構の特徴としては、①東西溝となる部分では北側、南北溝となる部分では西側、それぞれの壁の立ち上がりが急であること。②東西溝部分の溝底に比し、南北溝部分のそれが浅いこと、④東西溝部分の溝底は、西から東へ向け傾斜していること、などが挙げられる。加えて、遺構全体を見ると、④北側に比して、南側が開放的である点も看取される。換言すれば、①は標高の高い方向への意識、②③は斜面方向（角度）への意識、④は北を後ろ、



第23図 溝跡(1)



SD 1
1 暗褐色土 ローム粒少
2 褐色土 ロームブロック多

SD 2
1 暗褐色土 バサバサしており、あまりしまりもなく粘性も認められない
遺物として茶碗の破片が2点出土していることと、
しまりのない黒褐色の土が覆土であることから、
かなり新しい時期の遺構と考えられる

SD 3
1 暗褐色土 黒褐色粘土ブロック多 焼土粒をわずかに含む

SD 4
1 暗褐色土 暗褐色粘土ブロック多

SD 5
1 暗褐色土 暗褐色粘土粒多
2 暗褐色土 暗褐色粘土ブロック多

SD 6
1 暗褐色土 ローム粒多 SD2と同様の土 近世以降
2 暗褐色土 ローム粒多 SD2他と同様の土

SD 7
1 暗褐色土 ロームブロック多 近世以降
2 暗褐色土 ローム粒少 近世以降

第 23 図 溝跡 (2)

南を前とする意識、それぞれの表れと考えられる。よって、この鉤の手・箱形の溝は、南側の建物（？存在は確認できなかった）への雨水流入に備えた、屋敷や家屋を囲む排水溝であると推測される。近接する第2・6号溝跡も、一連のものであろう。

遺物の大半は微細な破片のため図示できなかったが、覆土中より土師器の甕、須恵器の坏・甕・蓋が微量、蕎麦猪口らしき磁器1片が出土している。図示した5区（第4号溝跡）出土の須恵器坏・蓋（第31図1・2）は混入品で、覆土から見て本溝跡は近世以降のものと考えられる。

明治14年測量の迅速測図を見ると、この位置に家屋などは描かれていない。その時点では既に屋敷は廃絶し、溝も埋没していたのであろう。

第6号溝跡（第23・24図）

G-3グリッドを中心に検出された。第3～5号溝跡の4区南端に接する東西溝で、埋没後、第57号土壇に切られる。

全体は第2号溝跡と同じく、走向や規模の異なる2条の溝が連結したような形状である。ただ、覆土の観察によっても新旧は確認できなかった。検出長は約10.5mである。上幅は走向が変化して括れる部分を境に、東側は約0.7mと一定であるのに対し、括れ部から西は0.3～0.7mと次第に広がっている。西端部及び括れ部には、土壇状の張り出しがある。

確認面から底までの深さは8cm前後で、底面は西から東に向け僅かに傾斜している。両壁の立ち上がりは緩やかで、横断面は浅い皿状を呈する。走向は、幅の広い東側でおよそN-73°-E、括れ部より西側でN-66°-Eを指す。

遺物の出土はなかった。このため、本溝跡の所属時期は明らかとし得ないが、覆土の共通性から推せば、第3～5号溝跡と同じく近世以降、それも比較的新しい時期のものと思われる。

第7号溝跡（第23・24図）

E-3～6グリッドを中心に検出された。調査

区を横断する東西方向の溝跡で、両側は調査区外へ延びている。調査前には、この上に未舗装の農道が通っていた。調査に伴い道路は付け替えられたものの、東半部の南壁上端はその下となってしまう、検出することができなかった。

溝の西半部はやや北へ曲がるが、これは南側に開鑿された区画遺構（第3～5号溝）3区の形状と一致する。間隔も約5mと一定であるため、両者はきれいな並行関係を見せている。

検出したのは長さ約33.7m、上幅約0.45～1.4mである。横断面は船底形を呈し、これも南壁に比して北壁の立ち上がりが急である。確認面から底までの深さは西端部で15cm、東端部で40cmを測る。但し、標高で見ると溝底は西から東へかなり傾斜しており、両端部では80cmもの差が生じている。走向は、およそN-78°-Eを指す。

覆土は北側から流入した自然堆積土で、遺物の出土はなかった。このため、本溝跡の所属時期は明らかとし得ないが、南側の区画遺構（第3～5号溝跡）との強い関連性をからは、やはり近世以降、それもかなり新しい時期のものと思われる。

上に触れたとおり、調査の直前まで、本溝跡の上にはぴったり重なるように農道が通っていた。硬化面など、農道に先行する道路跡の検出はできなかったが、本溝跡の埋没段階で、これを道として利用した可能性もある。区画遺構3区と本溝跡は規模や形状、走向も一致しており、深い関係にあったことは疑いない。第7号溝跡は屋敷地の内外を画す溝（堀）、区画遺構は建物を囲う溝であったと思われる。とすれば、屋敷地の内外を分ける本溝跡の外側に、農道に先行する道が通っていた可能性もまた、否定できないだろう。残念ながら、明治14年の迅速測図では、この部分に家屋も道路も確認することができない。屋敷の廃絶や、溝の埋没過程で本溝跡が道として利用されたとしても、地図に表現されるほどの規模ではなかったのかもしれない。

3. 土壌

土壌は、調査区全体に 68 基が検出された（第 25～30 図）。

調査では遺構確認を行った際、検出した土壌・ピットの覆土を 3 種類に大別し、全体的な分布の

分布

多くは調査区の中央部、平坦面直下の斜面部に集中する傾向が認められる。このほか、第 7 号溝跡の北側にややまとまった分布が見られる。逆に平坦面、特に屋敷地を区画すると考えられる溝跡群の内部には殆ど存在しない。

覆土

調査時に観察基準とした覆土の分類は、次のとおりである。

A 類：色調は灰褐色～暗褐色。灰色味の強い土で、締まりなくパサパサ。表土層や溝跡覆土とほぼ同じ。近世以降の陶磁器類を含む。土壌の大半はこの覆土。

B 類：色調は黒褐色。締まりのある土で、柱痕の観察されるものもある。柱穴、乃至は杭穴と思われる。土壌で本類に該当するものはなかった。

C 類：色調は暗褐色で、A・B 両類の土壌・ピットに切られる。締まりよく粘性に富み、焼土・炭化物粒を含む。

上記の分類による観察では、大部分の土壌覆土は A 類となり、B 類は土壌で該当するものがない。C 類は第 25・26・27・29・38・39・65 号土壌の 7 基のみが該当する。

形状・規模

平面形は円形や楕円形のものが多く、これに長方形や不整形、溝状となる長方形のものなどが少数見られる。

長さは 1 m 前後のものが主体的だが、第 57 号土壌のように同一箇所連続して大型の土壌が掘

傾向や所属時期、性格などの把握に努めた。

そこで、以下では土壌個別の内容は一覧表にまとめ（第 13 表）、総体的な様相について述べることとする。

られ、7 m 近くなったものもある。同土壌は、先行する深い複数の土壌を埋め戻し、掘り広げてさらに大型の土壌としている。深さはまちまちながら、20cm 程度のものが多い。

出土遺物

遺物は第 1・10・24・25・26・28・30・31・34・41・45・46・48・51～54・56・57・65・67 号土壌の 22 基から、縄文土器、土師器の甕、須恵器の坏・甕、陶磁器、瓦などが出土している。

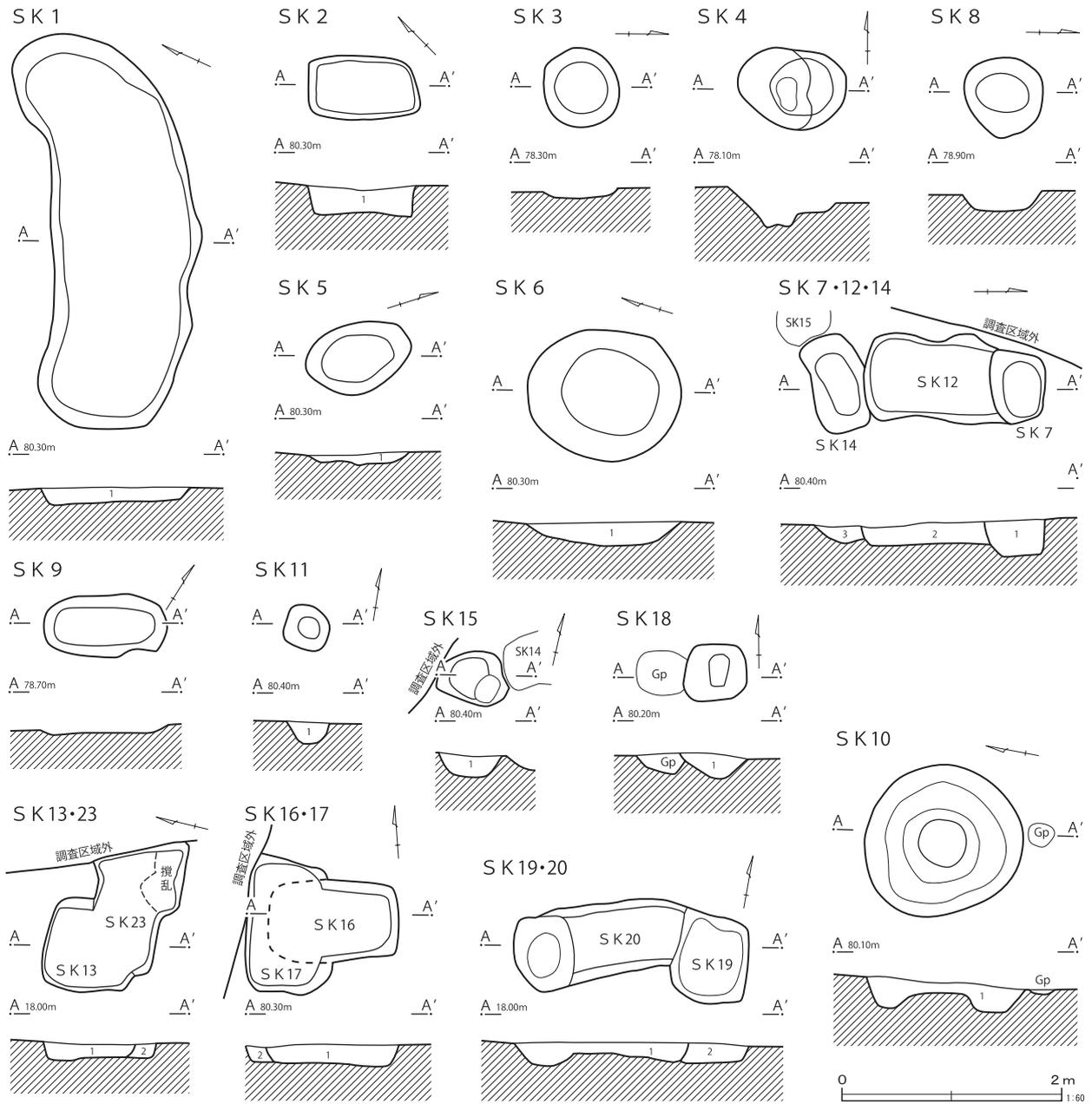
いずれも微細な破片であり、図示できたものは第 65 号土壌出土の 1 点のみである（第 31 図 3）。また、1 基あたりの出土数も 1～数片に過ぎず、複数出土しても各時代の遺物が混在する土壌が多い。このうち、第 26・65 号土壌の 2 基は土師器の甕、須恵器の坏のみが出土している。覆土は近世陶磁器類を含む A 類ではなく、ともに C 類である。

時期

出土遺物から見て、おおよそ A 類を覆土とする土壌は近世以降、B 類とする土壌も近世以降と思われる。ただ、後者のピットでは微細な青磁碗の破片を出土したものがあるので、中世に遡る可能性を有する。同様に、C 類を覆土とする 7 基の土壌は、平安時代のものと推測される。

性格

殆どの土壌は、その性格を明らかとし得なかった。ただ、F・G—3 グリッド第 25・26 号土壌とその近辺に散在するピット 7 個は、同じ覆土 C 類で焼土ブロックや炭化物を良く含んでいることに加え、周囲にも焼土が散っていた。このことか



SK 1
1 暗褐色土 ローム粒多 人為的な埋め戻しと思われる

SK 2
1 暗褐色土 ロームブロック多 人為的埋め戻し 近現代のムロの可能性あり

SK 5
1 灰褐色土 ロームブロック多 人為的堆積と思われる 比較的最近の遺構と思われる

SK 6
1 灰褐色土 ローム粒多 土の堆積はフラットであり、底部付近に特にレンズ状のローム粒がたまっている 比較的最近の遺構と思われる

SK 7・12・14
1 暗褐色土 ロームブロック多 人為的埋め戻し
2 暗褐色土 ロームブロック少 人為的埋め戻し
3 暗褐色土 ロームブロック少 人為的埋め戻し

SK 10
1 暗褐色土 ロームブロック多 人為的な埋め戻しと思われる

SK 11
1 暗褐色土 ロームブロック多 人為的埋め戻し

SK 15
1 暗褐色土 ロームブロック多 人為的埋め戻し

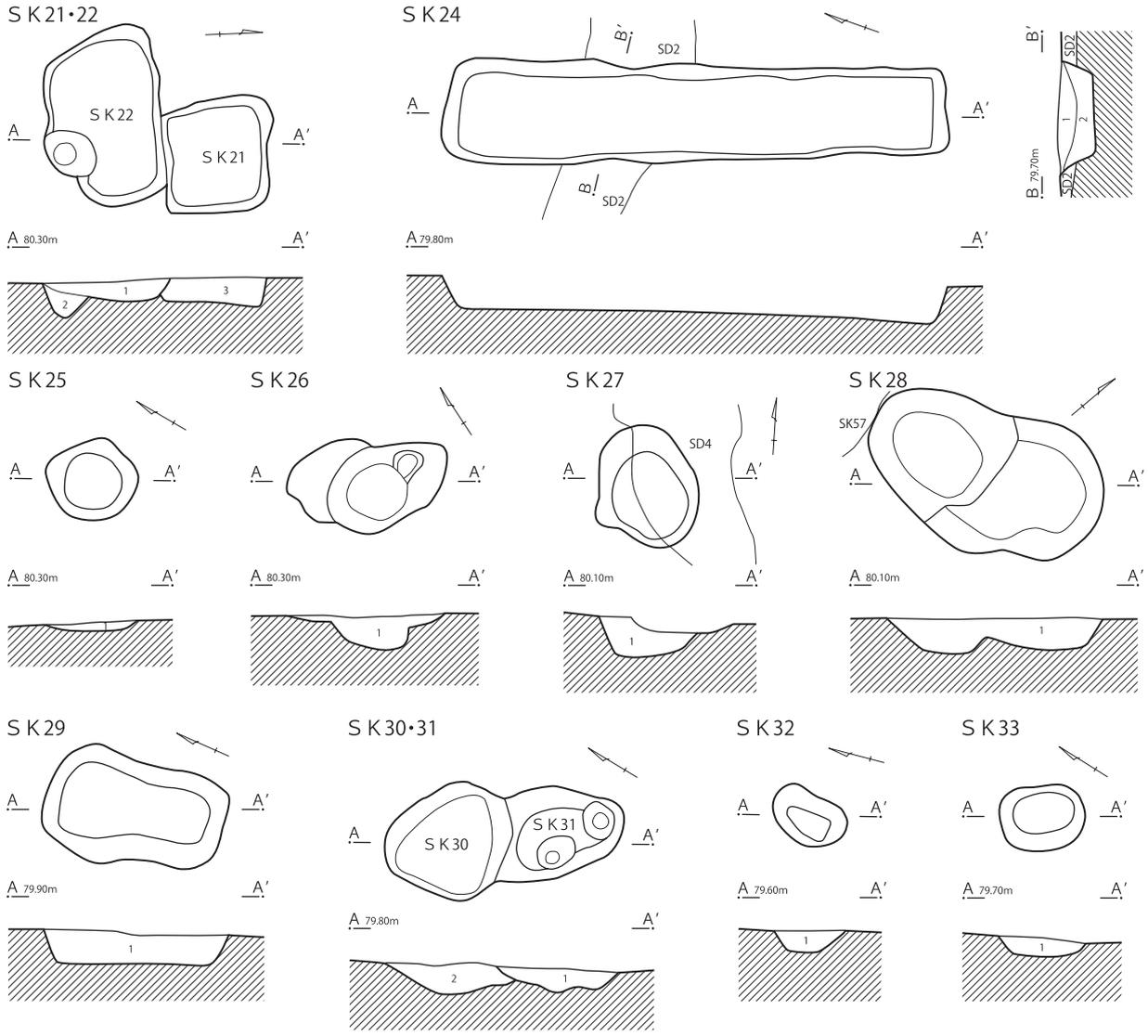
SK 18
1 暗褐色土 ロームブロック多 人為的埋め戻し

SK 13・23
1 暗褐色土 ローム粒多 人為的埋め戻し A類
2 暗褐色土 ローム粒少 人為的埋め戻し A類

SK 16・17
1 暗褐色土 ロームブロック多 人為的埋め戻し
2 暗褐色土 ロームブロック多 人為的埋め戻し

SK 19・20
1 明褐色土 ローム粒多 人為的埋め戻し
2 明褐色土 ロームブロック多 人為的埋め戻し

第 25 図 土 壌 (1)



S K 21・22
 1 明褐色土 ロームブロック多
 2 明褐色土 ローム粒多
 3 暗褐色土 ローム粒多

S K 24
 1 暗褐色土 粘土ブロック多
 2 暗褐色土 焼土粒少 自然堆積したうえに人為的に埋め戻されたのであろう

S K 25・26
 1 暗茶褐色土 焼土ブロック多 炭化物多 基本となるのは暗茶褐色土であるが焼土ブロックの含む割合が非常に高い

S K 27
 1 暗褐色土 焼土粒多 人為的埋め戻し S K 26の土と似ている 平安時代以降の遺構

S K 28
 1 暗褐色土 地山ブロック多 焼土粒少 自然堆積 平安時代の土師、須恵器の破片が出土している。覆土はS K 25ほど焼土を含まない 近世以降の土壌であろう

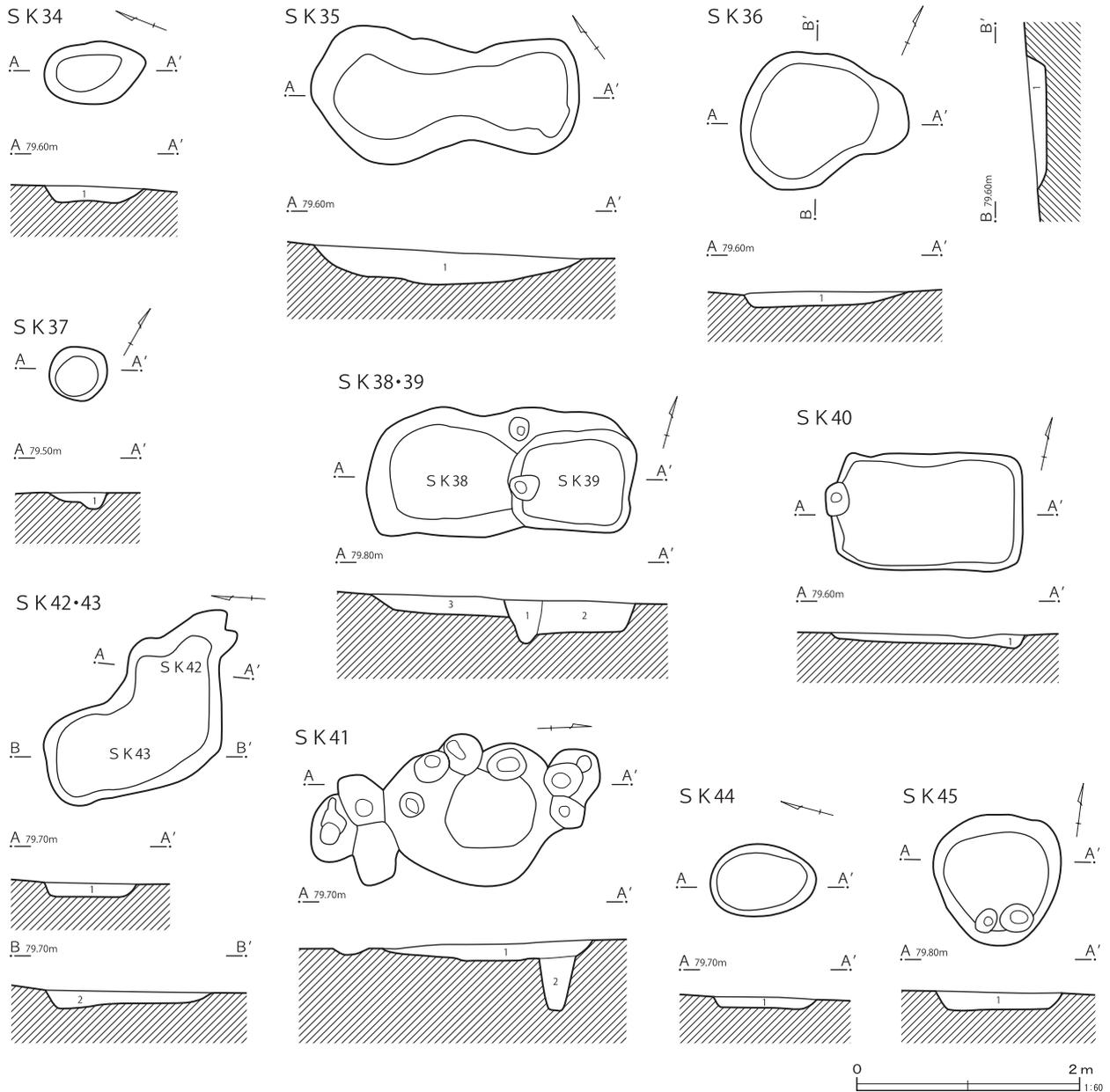
S K 29
 1 暗褐色土 地山ブロック多 焼土粒少 自然堆積 明確な時期はわからないが覆土の様子から近世以降の遺構

S K 30・31
 1 暗褐色土 地山ブロック少 人為的埋め戻し 平安時代の土器が少量出土しているが、まじりこみによるものと思われる。近世以降か
 2 暗褐色土 地山ブロック少 人為的埋め戻し 平安時代の土器が少量出土しているが、まじりこみによるものと思われる。近世以降か

S K 32
 1 暗褐色土 地山ブロック多 人為的埋め戻し 明確な時期はわからないが、土の様子から比較的新しい遺構と思われる。近世以降か

S K 33
 1 暗褐色土 地山ブロック多 人為的埋め戻し 明確な時期はわからないが、覆土の様子から判断して比較的新しい遺構と思われる。

第 26 図 土 壌 (2)



S K 34
1 暗褐色土 地山ブロック多 焼土粒多 人為的埋め戻しによるものか。近世以降

S K 35
1 暗褐色土 地山ブロック多 人為的埋め戻し 遺物は平安時代の土師片がわずかに出土しているが、土自体は S K 36や S K 33, 34などと類似している 明確な時期はわからないが、比較的新しい遺構と思われる。近世以降か

S K 36
1 暗褐色土 地山粒多 人為的埋め戻し 遺物は特に出土していないが、土の様子から比較的新しい時代の遺構と思われる。近世以降か

S K 37
1 暗褐色土 地山粒多 粘り気なくサクサク 表土の土に似る 人為的埋め戻し 近世以降か

S K 38・39
1 暗褐色土 地山粒多 粘り気なくサクサク 表土の土に似る 人為的埋め戻し
2 暗褐色土 地山ブロック・焼土ブロック少 粘り気有 平安時代の土器片をわずかに含む 自然堆積
3 暗褐色土 地山ブロック・焼土ブロック少 粘り気有 平安時代の土器片をわずかに含む 自然堆積

S K 40
1 暗褐色土 地山粒多 粘り気なくサクサクの土 表土の土に似る 近世以降か

S K 41
1 暗褐色土 焼土粒少 ロームブロック少 自然堆積 平安時代の土器片を含むが混入によるものであろう 近世以降か
2 暗褐色土 焼土粒少 近世以降か

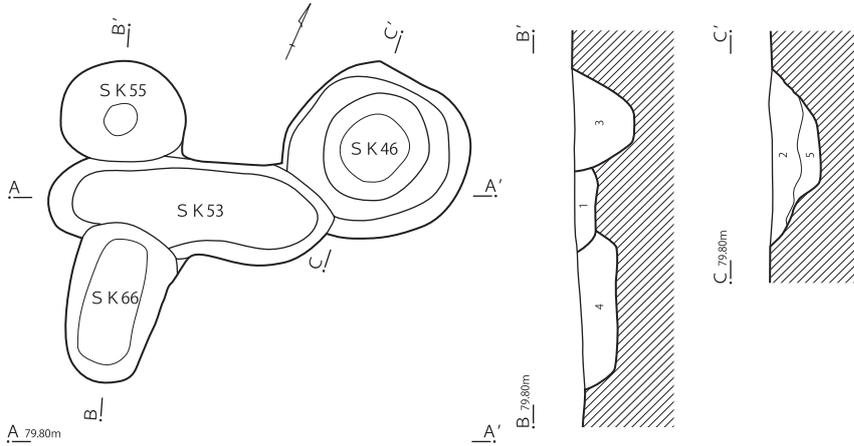
S K 42・43
1 暗褐色土 ロームブロック少 自然堆積 近世以降か
2 暗褐色土 褐色土ブロック・焼土粒少 近世以降か

S K 44
1 暗褐色土 S K 43と同一覆土 近世以降か

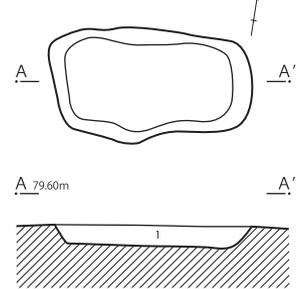
S K 45
1 暗褐色土 S K 43と同一 近世以降か

第 27 図 土 壙 (3)

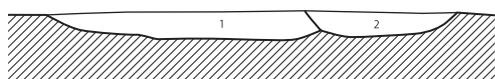
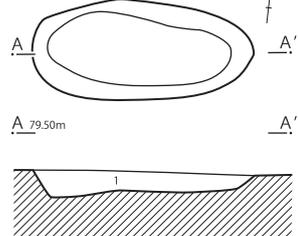
S K 46・53・55・66



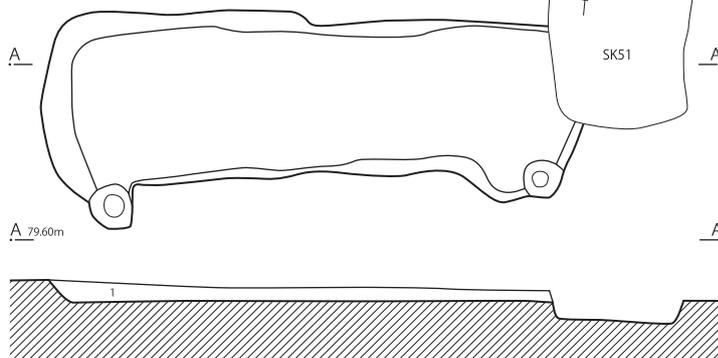
S K 47



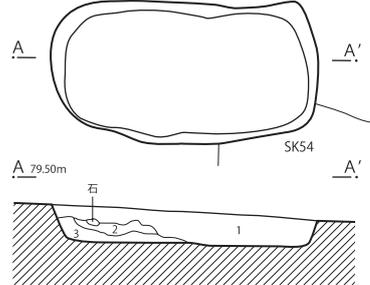
S K 48



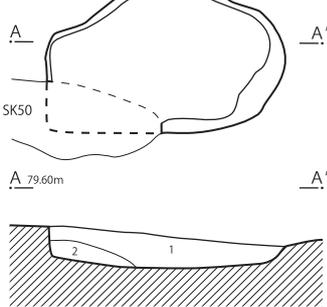
S K 54



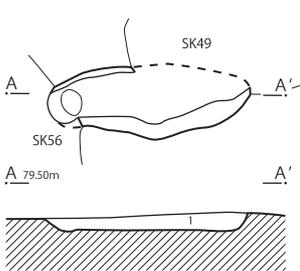
S K 51



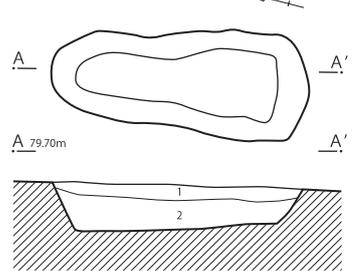
S K 49



S K 50



S K 52



S K 46・53・55・66

- 1 暗褐色土 地山ブロック少 近世以降か
- 2 暗褐色土 褐色土ブロック・焼土粒少 近世以降か?
- 3 暗褐色土 しまりなくバサバサ 近世以降か?
- 4 暗褐色土 しまりなくバサバサ 近世以降か?
- 5 暗褐色土 褐色土ブロック・焼土粒少 近世以降か?

S K 47

- 1 暗褐色土 近世以降か?

S K 48

- 1 暗褐色土 焼土粒少 近世以降か

S K 49

- 1 暗褐色土 焼土粒多 近世以降か?
- 2 暗褐色土 地山ブロック多 近世以降か?

S K 50

- 1 暗褐色土 地山ブロック多 近世以降か

S K 51

- 1 暗褐色土 地山ブロック少 自然堆積
- 2 灰褐色土 灰褐色土ブロック多 人為堆積
- 3 暗褐色土 地山ブロック少 人為堆積

S K 52

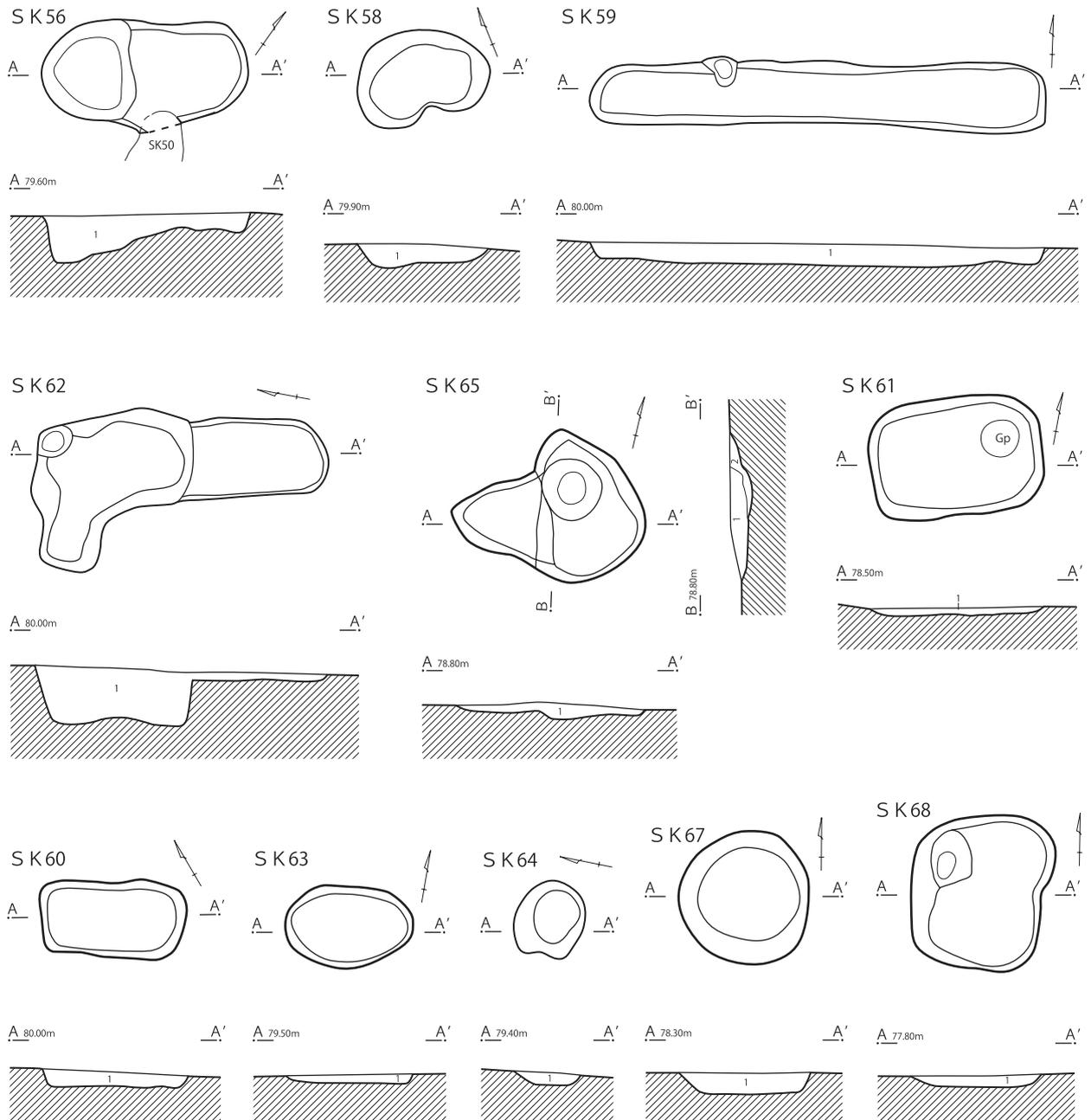
- 1 暗褐色土 焼土粒少 近世以降か
- 2 暗褐色土 地山ブロック多 近世以降か

S K 54

- 1 暗褐色土 地山粒多 近世以降か



第 28 図 土 壤 (4)



S K 56
1 暗褐色土 しまりなくバサバサ 近世以降か?

S K 58
1 暗褐色土 しまりなくボソボソ 近世以降

S K 59
1 暗褐色土 しまりなくボソボソ 近世以降

S K 60
1 暗褐色土 しまりなくボソボソ 近世以降

S K 61
1 暗褐色土 しまりなくボソボソ 近世以降

S K 62
1 暗褐色土 しまりなくサクサク 近世以降

S K 63
1 暗褐色土 しまりなくボソボソ 近世以降

S K 64
1 暗褐色土 しまりなくボソボソ 近世以降

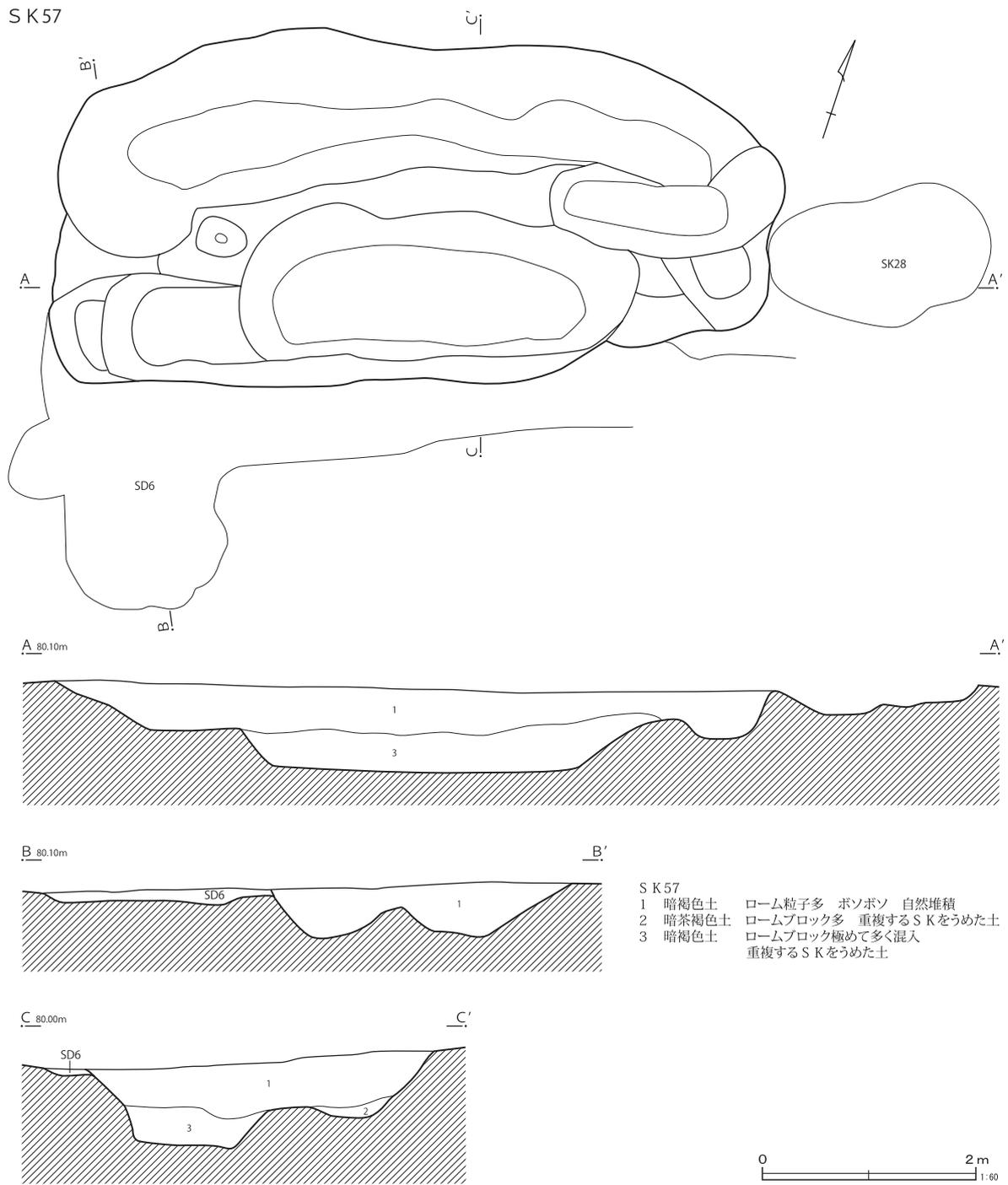
S K 65
1 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物多
上層に平安時代の土器片を多く含む
2 暗褐色土 焼土粒少 人為的埋め戻しによる埋没と思われる

S K 67
1 暗褐色土 しまりのないボソボソの土 近世以降か

S K 68
1 暗褐色土 S K 67と同様の覆土 近世以降か



第 29 図 土 窟 (5)



第30図 土壙(6)

ら、これらの土壌・ピットは床面を流失した（あるいは削平を受けた）、平安時代の住居跡(掘り方)の可能性はある。

いずれも微細な破片で図示できなかったが、第25号土壌からは土師器の甕1片、第26号土壌からは土師器の甕片少量、須恵器の坏3片、F-3グリッドのP2からは土師器の甕2片、同じくP3からは須恵器の坏1片が出土している。これら遺物の所属時期は、おおよそ9世紀中頃と考えられる。

さらに、第7号住居跡の西側約4m、J-4グリッドに位置する第65号土壌の覆土は、焼土ブ

ロックや炭化物を多量に含むC類で、故意の埋め戻しが窺われた。深さ10cm前後の浅い土壌ながら、上層らは須恵器の坏(第31図3)や土師器の甕片が出土している。覆土に焼土や炭化物が多いため、第3・7号住居跡同様に覆土を採取・水洗し、整理時に肉眼観察・磁石を用いた磁着により選別を行った。結果、砂鉄174.86g、粒状滓431.09g、鍛造剥片(砂鉄剥片と鉄粒剥片)0.23gの検出があった。

床面など、住居跡を推測させる痕跡は認められなかったものの、同様に砂鉄・粒状滓・鍛造剥片を検出した第3号住居跡、及び第7号住居跡での

第13表 土壌計測表

番号	グリッド	平面形	長径×短径×深さ(最大)	覆土	備考	番号	グリッド	平面形	長径×短径×深さ(最大)	覆土	備考
1	C-4・5	長楕円形	3.65 × 1.36 × 0.14	A		35	G-5	長楕円形	2.40 × 0.88 × 0.30	A	
2	C-5	長方形	0.98 × 0.57 × 0.26	A		36	G-5	楕円形	1.48 × 1.20 × 0.16	A	
3	J-6	円形	0.73 × 0.68 × 0.07	A		37	G-5	円形	0.51 × 0.49 × 0.15	A	
4	J-6	楕円形	0.99 × 0.72 × 0.31	A		38	G-4	楕円形	(1.25) × 1.16 × 0.16	C	
5	C・D-5	楕円形	0.98 × 0.64 × 0.10	A		39	G-4	楕円形	1.11 × (1.06) × 0.28	C	
6	D-5	楕円形	1.40 × 1.20 × 0.21	A		40	G・H-4	長方形	1.71 × 1.04 × 0.12	A	
7	D-3	楕円形	0.63 × 0.49 × 0.32	A	SK12を切る	41	H-4	不整形	2.64 × 1.40 × 0.62	A	
8	I-5	円形	0.74 × 0.71 × 0.17	A		42	H-4	不整形	(1.16) × 0.90 × 0.11	A	
9	I-5	楕円形	1.13 × 0.57 × 0.07	A		43	H-4	不整形	1.58 × 0.84 × 0.16	A	
10	D-5	楕円形	1.45 × 1.35 × 0.19	A		44	H-4	楕円形	0.94 × 0.64 × 0.09	A	
11	D-3	円形	0.46 × 0.41 × 0.13	A		45	H-3・4	楕円形	1.16 × 1.11 × 0.17	A	
12	D・E-3	長楕円形	(1.14) × 0.69 × 0.20	A	SK14を切る	46	H-3	楕円形	1.45 × 1.37 × 0.37	A	SK53と重複
13	D・E-3	方形?	0.84 × 0.83 × 0.15	A	SK23を切る	47	H-2	長方形?	1.53 × 0.85 × 0.16	A	
14	E-3	楕円形	0.89 × 0.49 × 0.16	A	SK12に切られる	48	H-4	楕円形	1.73 × 0.78 × 0.21	A	グリッドピットに切られる
15	E-3	楕円形	0.64 × 0.46 × 0.20	A	SK14と重複	49	H・I-4	楕円形	1.89 × 1.17 × 0.26	A	
16	E-3	楕円形	1.19 × 0.67 × 0.13	A	SK17に切られる	50	H-4	楕円形	1.60 × 0.43 × 0.14	A	
17	E-3	楕円形	(1.18) × 0.73 × 0.19	A	SK16を切る	51	H・I-4	長方形?	2.00 × 1.13 × 0.28	A	SK54を切る
18	E-3	方形	0.54 × 0.50 × 0.22	A	E3-P2を切る	52	H-4	長楕円形	1.98 × 0.70 × 0.36	A	
19	E-3	楕円形	0.79 × 0.65 × 0.18	A	SK20に切られる	53	H-3	楕円形	2.28 × 0.73 × 0.16	A	SK66を切りSK55に切られる
20	E-3	長楕円形	(1.52) × 0.64 × 0.20	A	SK19を切る	54	H-3・4	長楕円形	4.25 × 1.13 × 0.15	A	SK51に切られる
21	E-3	方形	0.96 × 0.86 × 0.24	A	SK22に切られる	55	H-3	楕円形	0.99 × 0.81 × 0.46	A	SK53を切る
22	E-3	楕円形	1.42 × 0.99 × 0.18	A	SK21を切る	56	H-3・4	楕円形	1.87 × 0.89 × 1.42	A	
23	E-3	長楕円形	(1.08) × 0.64 × 0.12	A	SK13に切られる	57	G-2・3	長楕円形	6.80 × 3.30 × 0.77	A	SD6を切る
24	F-5	長楕円形	4.29 × 0.78 × 0.27	A	SD2を切る	58	G-4	楕円形	1.18 × 0.71 × 0.23	A	
25	F・G-3	楕円形	0.79 × 0.70 × 0.07	C		59	G・H-3	長楕円形	4.17 × 0.56 × 0.19	A	
26	G-3	不整形	1.32 × 0.74 × 0.28	C		60	H-3	長方形?	1.31 × 0.66 × 0.16	A	
27	G-3	楕円形	1.06 × 0.91 × 0.34	C	SD4と重複	61	I・J-5	長方形?	1.55 × 1.07 × 0.06	A	
28	G-3	楕円形	2.08 × 1.23 × 0.30	A		62	H-3	長楕円形	2.69 × 0.81 × 0.52	A	
29	H-3・4	楕円形	1.52 × 0.82 × 0.28	C		63	I-3	楕円形	1.13 × 0.74 × 0.08	A	
30	G-5	楕円形	1.04 × 1.00 × 0.26	A	SK31に切られる	64	I-3	楕円形	0.72 × 0.63 × 0.10	A	
31	G-5	楕円形	(0.97) × 0.78 × 0.20	A	SK30を切る	65	J-4	楕円形	1.75 × 1.33 × 0.14	C	
32	G-5	楕円形	0.63 × 0.42 × 0.19	A		66	H-3	楕円形	1.25 × 0.76 × 0.28	A	
33	G-4	楕円形	0.73 × 0.54 × 0.16	A		67	J-6	円形	1.21 × 1.19 × 0.19	A	
34	G-4・5	楕円形	0.88 × 0.57 × 0.15	A		68	J・K-6	楕円形	1.42 × 1.17 × 0.11	A	

これらの在り方からすれば、第 65 号土壙も、住居跡の床面より一段低い窪みの残存、乃至は廃棄のための土壙ではないかと考えられる。

一方、近世以降と思われる覆土 A 類の土壙については、屋敷地を囲う溝跡群の南側斜面に集中する傾向がある。但し、区画溝の内部には平安時代の第 25・26 号土壙を除き、全くと言ってよいほど検出がない。また、第 7 号溝跡を越えた北側には、再び多くの分布が認められる。土壙群も溝跡群も同一時期の遺構と見られることから、両者は

4. ピット

調査区からは、ほぼ全域にわたって多数のピットが検出された。掘立柱建物跡など、明らかに遺構となるものは確認できなかったため、ここではこれらをグリッド・ピットとして一括に扱う。

調査ではグリッドごとに通し番号を付し、覆土を 3 種類に大別のうえ精査した。覆土の分類は土壙と共通である。各ピットの規模などについては、計測表にまとめた (第 15 表)。

覆土 B 類は調査区の北半、平坦面に少数の分布が認められる。このうち、B—4 グリッドの P 1～5 は等間隔で一列に並んでおり、掘立柱建物跡の一部、あるいは柵列の可能性がある。C 類は、第 25・26 号土壙周辺に検出された F—3 グリッドの P 2～5、G—3 グリッドの P 1～3 の 7 個、

5. グリッド出土遺物

遺構確認時、遺構に伴わない遺物の出土が少量ながら認められた。平安時代の土師器の甕、須恵器の坏・甕・蓋、瓦、中世と考えられる在地産の鉢 (片口か)、近世以降の磁器 (茶碗) や土器 (焙烙) などである。いずれも微細な破片で、図示できたものは僅かである (第 31 図 4・5)。

なお、遺構からの出土もあるが、それらは全て

密接に関連するもの、すなわち、土壙群は溝で囲まれた屋敷地の周縁に設けられた何らかの施設と看することができる。

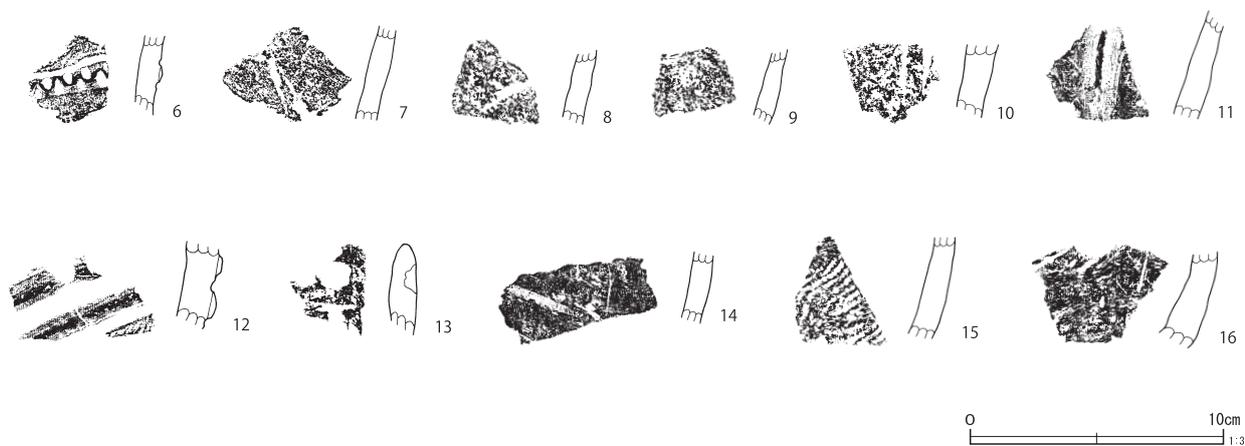
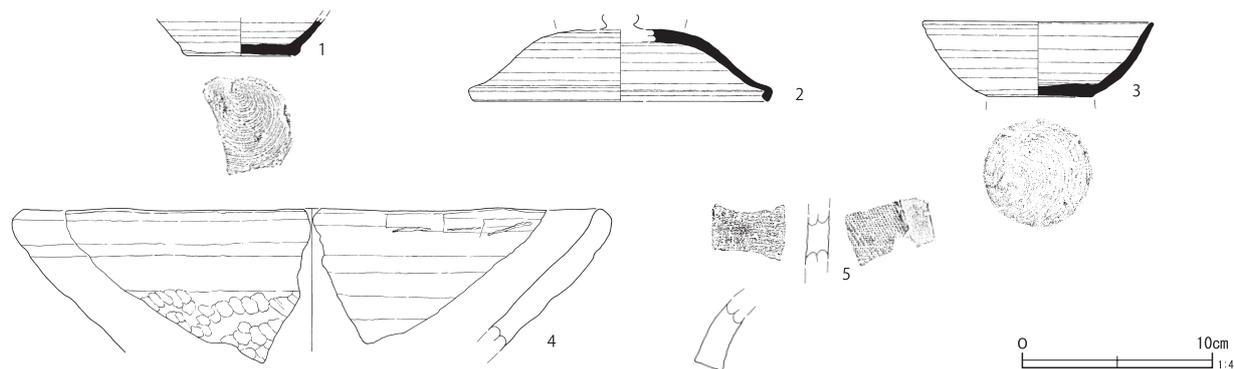
区画内に建物の痕跡は確認できなかったものの、土壙分布の空白は、ここに建物が存在したことの表徴かもしれない。屋敷地に接し (あるいは含まれ) ながらも、建物の傍には掘られなかった穴とすれば、それは日常生活に密着しながらも家屋の直近は避けるもの、例えば植栽のための掘り込みや抜き取り穴、ゴミ穴などであろう。

及び H—5 グリッドの P 1 のみの検出であった。

その他は、全て近世以降の A 類である。A 類は土壙と同様に標高の高い斜面部、すなわち区画溝の南側に集中する傾向が認められる。また、B 類のように、建物跡や柵列の存在を推測させる配置は窺えず、性格も不明である。

遺物の出土は僅かで、覆土 A 類では H—4 グリッドの P 4 より須恵器の坏 1 片、同 P 6 より土師器の甕 1 片、覆土 B 類では G—5 グリッドの P 1 より中・近世の土器片、覆土 C 類では F—3 グリッドの P 2 より土師器の甕 3 片、須恵器の坏 10 片、H—5 グリッドの P 1 より土師器の甕 4 片が見出されたに過ぎない。いずれも微細な破片であるため、図示できなかった。

混入と判断されるので、縄文土器についてはここで扱うこととした。7 は第 1 号土壙、8 は第 30 号土壙、11 と 15 は第 1 号住居跡、14 は第 2 号住居跡からの出土である。グリッドからの出土はごく少量で、図示できなかったものを含めても十数片である。中期中葉の阿玉台式・加曾利 E 式・同じく E III 式、後期の堀之内 I 式などが認められる。



第 31 図 溝跡・土壌・グリッド出土遺物

第 14 表 溝跡・土壌・グリッド出土遺物観察表 (第 31 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考・出土位置	図版
1	須恵器	坏	—	(2.0)	(6.2)	BCG	底 70	I	灰	南比企 底面へラ記号 SD-4 F-3G	17-5
2	須恵器	蓋	(15.5)	(3.8)	—	BCFG	—	—	灰	南比企 SD-4 E-4G	17-5
3	須恵器	坏	12.0	3.9	5.7	BCDG	90	III	灰白	南比企 SK-65	17-6
4	陶器	捏鉢	(30.2)	(7.1)	—	BCH	—	II	灰白	在地産 表採	17-7
5	瓦	丸瓦	縦 3.1cm	横 3.8cm	厚さ 1.2cm	凸面横方向ナデ 凹面布目	焼成良	灰色	I-4G		17-7
6	縄文	深鉢	中期中葉 (阿玉台式)	交互刺突を持つ隆起	D-4G						17-8
7	縄文	深鉢	中期中葉 (阿玉台式)	無文の胴部	SK-1						17-8
8	縄文	深鉢	中期中葉 (阿玉台式)	無文の胴部	SK-30						17-8
9	縄文	深鉢	中期中葉 (阿玉台式)	無文の胴部	E-5G						17-8
10	縄文	深鉢	加曾利 E 式	胴部 縦位に隆帯	胴下半部における懸垂文の末端部	G-3G					17-8
11	縄文	深鉢	加曾利 E 式	胴部 縦位に隆帯	胴下半部における懸垂文の末端部	SJ-1					17-8
12	縄文	深鉢	加曾利 E III 式	口縁部文様体	SK-57						17-8
13	縄文	深鉢	堀之内 I 式	口縁部 円形竹管による盲孔	縦位の沈線	K-6G					17-8
14	縄文	深鉢	堀之内 I 式	胴部 無文地にごく浅い沈線文	SJ-2						17-8
15	縄文	深鉢	後期	胴部 L R 単節横位回転の縄文が施文	SJ-1						17-8
16	縄文	深鉢	無文の胴下半分	底部直上の破片	篋状工具による粗い調整跡	I-4G					17-8

第 15 表 ピット計測表

グリッド	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	覆土	グリッド	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	覆土	グリッド	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	覆土
B-4	1	0.56	(0.39)	0.21	B	H-3	3	0.33	0.28	0.28	A	I-3	1	0.56	0.54	0.06	?
	2	0.42	0.36	0.24	B		4	0.29	0.27	0.21	A		2	0.34	0.30	0.38	?
	3	0.33	0.29	0.25	B		5	0.35	0.31	0.28	A		3	0.66	0.40	0.18	?
	4	0.36	0.33	0.23	B		6	0.31	0.30	0.12	A		4	0.33	0.29	0.09	?
	5	0.40	0.36	0.13	B		7	0.38	0.33	0.10	A		5	0.60	(0.35)	0.13	?
D-3	1	0.35	0.32	0.17	A		8	0.56	0.36	0.47	A	I-5	1	0.40	0.37	0.14	A
D-4	1	0.45	0.36	0.09	A		9	0.37	0.31	0.13	?		2	0.45	0.36	0.21	A
D-5	1	0.52	0.41	0.10	A		10	0.34	0.31	0.41	?		3	0.44	0.36	0.08	A
	2	0.41	0.36	0.10	A		11	0.37	0.32	0.09	?		4	欠番			
	3	0.52	0.44	0.10	A		12	0.27	0.24	0.06	?		5	欠番			
	4	0.79	0.45	0.13	A	H-4	1	0.25	0.24	0.33	A		6	欠番			
	5	0.40	0.35	0.08	A		2	0.32	0.31	0.25	A		7	欠番			
	6	0.48	0.33	0.06	A		3	0.37	0.34	0.48	A		8	欠番			
	7	0.60	0.53	0.09	A		4	0.28	0.24	0.09	A		9	欠番			
	8	0.22	0.18	0.07	B		5	0.31	0.22	0.15	A		10	欠番			
	9	0.34	0.30	0.49	B		6	0.24	0.24	0.05	A		11	0.42	0.37	0.17	A
	10	0.25	0.19	0.05	B		7	0.42	0.41	0.37	A		12	0.71	0.44	0.08	A
	11	0.23	0.21	0.04	?		8	0.76	0.64	0.45	A		13	0.62	0.57	0.16	A
E-3	1	0.46	0.41	0.20	A		9	0.36	0.38	0.16	A		14	0.45	0.35	0.12	A
	2	0.48	0.45	0.14	A		10	0.38	0.35	0.30	A		15	0.53	0.45	0.11	A
E-4	1	0.30	0.27	0.09	B		11	0.28	0.25	0.18	A	I-6	1	0.58	0.55	0.07	A
	2	0.31	0.26	0.10	B		12	0.32	0.32	0.30	A		2	0.28	0.24	0.19	A
F-3	1	0.25	0.25	0.14	A		13	0.48	0.48	0.62	A		3	0.30	0.27	0.22	A
	2	0.42	0.37	0.31	C		14	0.36	0.32	0.63	A	J-3	1	0.35	0.34	0.29	?
	3	0.48	0.38	0.24	C		15	0.42	0.38	0.61	A		2	0.32	0.26	0.06	?
	4	0.39	0.36	0.07	C		16	0.34	0.33	0.32	A		3	0.27	0.26	0.19	?
	5	0.36	(0.24)	0.39	C		17	0.26	0.24	0.34	A	J-5	1	欠番			
F-4	1	0.23	0.23	0.36	?		18	0.41	0.38	0.21	A		2	欠番			
	2	0.34	0.30	0.16	?		19	0.37	0.29	0.20	A		3	欠番			
G-3	1	0.40	0.39	0.08	C		20	0.48	0.29	0.18	A		4	欠番			
	2	0.30	0.26	0.20	C	H-5	1	0.60	0.36	0.40	C		5	欠番			
	3	0.56	0.52	0.16	C		2	0.23	0.22	0.20	A		6	欠番			
	4	0.89	0.67	0.15	A		3	0.38	0.30	0.07	A		7	欠番			
	5	0.36	0.32	0.33	A		4	0.52	0.33	0.10	A		8	欠番			
	6	0.86	0.69	0.49	A		5	0.25	0.23	0.05	A		9	欠番			
	7	0.35	0.32	0.31	?		6	0.25	0.24	0.04	A		10	欠番			
	8	0.36	0.34	0.22	A		7	0.55	0.41	0.08	A		11	0.34	0.33	0.05	?
G-4	1	0.36	0.30	0.42	A		8	0.51	0.40	0.05	A		12	0.66	0.44	0.15	A
	2	0.23	0.23	0.34	A		9	0.28	0.25	0.05	A	J-6	1	0.36	0.31	0.21	A
	3	0.28	0.28	0.17	A		10	0.34	0.30	0.21	A		2	0.56	0.47	0.11	A
	4	0.62	0.58	0.29	A		11	0.19	0.19	0.13	A		3	0.36	0.35	0.10	A
	5	0.22	0.19	0.21	A		12	0.48	0.38	0.13	A		4	0.50	0.35	0.57	A
G-5	1	0.62	0.40	0.68	B		13	0.30	0.29	0.14	A	K-5	1	0.46	0.41	0.16	?
	2	0.60	0.42	0.33	?		14	0.27	0.26	0.24	A	K-6	1	0.58	0.35	0.22	?
H-3	1	0.88	0.51	0.53	A		15	0.83	0.62	0.32	A		2	0.50	0.41	0.10	?
	2	0.34	0.25	0.09	A		16	1.08	0.61	0.11	?						

V 調査のまとめ

1. 調査の成果

今回、調査を実施した中尾遺跡からは、住居跡7軒（奈良時代2軒、平安時代5軒。後者のうち1軒は粘土採掘坑か）・溝跡7条（近世以降）・土壙68基（平安時代7基・近世以降61基）等が検出された。

奈良・平安時代の住居跡からは、土師器の坏・甕・台付甕、須恵器の壺・甕・坏・高台付坏・椀・蓋、瓦、鉄製品（刀子・棒状品）、石製品（紡錘車・砥石）、鍛冶関連遺物（羽口・椀形滓）などが出土

(1) 遺跡の立地

中尾遺跡は毛呂山町の中央部南端、葛貫地内に所在する。周辺は葛川・大谷木川・宿谷川など、中小の河川による開析が進み、西から東へ、山地～丘陵～台地と急激に移行する変化に富んだ地となっている。

遺跡の立地としては台地（毛呂台地）上ということになるが、丘陵（毛呂山丘陵）に接する最も西端にあたるため、毛呂山町東部の平坦な台地とは景趣を異にしている。

位置的には高麗川に合流する葛川の最上流部にあたり、台地は葛川とその支流に開析され、南西―北東方向に長い尾根状の小台地に分岐している。遺跡の乗る小台地の南北には、幅の狭い開析谷が入り込んでおり、北側の対岸約300m、平行する尾根状の小台地上には、やはり奈良・平安時代の集落跡である東原遺跡（本遺跡と同様、飯能寄居線バイパス工事に伴って発掘調査を実施。平成23年3月末に報告書刊行予定）が存在している。

西方は急峻な山地が控えていることから、中尾・東原の両遺跡は、ともに最も奥部に営まれた集落の一つということができる。高麗川・葛川下

している。須恵器の大半は南比企・東金子といった埼玉県内の窯跡製品である。これら出土遺物の所属時期は、奈良時代の8世紀第Ⅲ四半期と、平安時代の9世紀第Ⅱ～Ⅲ四半期の2時期に大別される。

以下、調査で得られた成果を基に、主に奈良・平安時代の集落としての中尾遺跡の特徴、隣接する東原遺跡との関係、新設された高麗郡との関わりなどについて触れておきたい。

流に数多く分布する同時代の集落は、耕地となる広い低地をひかえた、標高の低い（55～45m）平坦な台地上に占地している。これに対し、中尾・東原の両集落は、標高は高く（85m前後）低地との比高差も大きい（約8m）。周囲に可耕地は乏しく、台地上の平坦面も限られるなど、正反対の隔離した環境下に営まれている。集落立地としては、極めて特異というべきであろう。

第7号住居跡から出土した須恵器の坏には、「奥」と読める墨書が施されている。立地の孤立・隔離性と相俟って、何やら暗示的である。

(2) 中尾遺跡の住居跡と集落

検出された奈良・平安時代の住居跡は7軒で、うち1軒は調査区北端の平坦部、他の6軒は南半の緩斜面部に分布している。また、奈良時代の2軒は調査区南端、最も標高の低い場所に隣り合い、平安時代の住居跡はそれよりも高い場所に分布する。

床面の標高で見ると、最も高い第1号住居跡が約79.9m、最も低い第4号住居跡が約76.7mである。集落は南向きの斜面地に展開しているので、両者は調査区の最北端と最南端に位置する住居跡となる。その間は、直線距離にして約85mを隔て

ている。

なお、検出された7軒のうち6軒は住居跡として確実ながら、1軒（第7号住居跡）は、未完成のうちに放棄された住居の掘り込みを利用した粘土採掘坑のようである。しかも、後述するように、最終的には不用品の廃棄土壌とされている。

一方、F・G—3グリッドに検出された第25・26号土壌とその近辺に散在する7個のピット群は、住居跡としての確認こそできなかったものの、いずれも他の住居跡と同様の覆土を有することから、床まで流失、あるいは削平を受けた住居跡の可能性もある。

第7号住居跡を除く6軒の平面形は、方形または長方形である。後者はカマドの設けられる位置に拘わらず、台地の延びる方向と一致して東西が長い。等高線に平行した横長の配置を採るのは、構築が斜面部であることに起因しているのかもしれない。

住居跡の規模は全体的に小さく、最大の第1号住居跡でおよそ4.38×3.55m、床面積約14.4㎡、最小の第5号住居跡でおよそ2.4×2.4m、床面積約4.8㎡である。第1号住居跡は拡張が行われており、カマドの付け替えられた第6号住居跡もその可能性がある。

覆土は第7号住居跡のように、上層を人為的に埋め戻されたものが見られるものの、他は斜面上位からの流入による自然堆積である。

カマドの構築される壁は、北が2軒（第1・3号住居跡）、東が3軒（第2・4・5号住居跡）、北と東の両壁が1軒（第6号住居跡）である。西壁から検出されたものはなかった。但し、第6号住居跡も2基が同時に備わっていたのではなく、北壁のものを撤去（おそらく住居の拡張に伴う）した後、新たに東壁に構築したものである。袖を確認した5軒のカマドのうち、4軒（第1・2・4・5号住居跡）は地山の粘質土を貼って造り付けたもの、1軒（第6号住居跡）は片岩系の礫を

組んで構築したものである。

カマドの設けられた壁と直交する軸を住居跡の主軸とした場合、その方向を東西に取るものは4軒、南北に取るものは2軒となる（2基のカマドを備える第6号住居跡は、最終的な東のカマドとして）。

このほかでは、鍛冶工房跡の存在が特記される。第3号住居跡は鍛冶炉1基を備え、羽口や椀形滓などを出土している。さらに、土壌の水洗・観察・選別を行ったところ、多量の砂鉄・粒状滓・鍛造剥片が検出された。工房跡の12mほど南に位置する第7号住居跡でも、羽口や椀形滓、砥石、鉄粒の付着した鉄床石、砂鉄・粒状滓・鍛造剥片を検出している。鍛造剥片などの鍛冶関連遺物や土器の出土状況は、両住居跡で大きく異なっていることから、鍛冶工房跡である第3号住居跡に対し、第7号住居跡はそこで不要となった道具や塵芥などが廃棄された、「ゴミ穴」である可能性が高い。また、第7号住居跡の西側に位置する第65号土壌からも、砂鉄・粒状滓・鍛造剥片の検出があった。これも廃棄土壌の一つと思われる。

両住居跡出土の土器や羽口については、整理段階で接合を試みたが、住居跡間で接合するものは認められなかった。従って、第3号住居跡で生じた不用品や塵芥を、直ちに第7号住居跡に投棄したものと判断することはできない。反面、土器は同時期のものであり、調査区ではこの一角にのみ鍛冶関連の遺構が見られるなど、両者が全く無関係とも考えにくい。

中尾遺跡の鍛冶工房跡は、毛呂山町では初となる発見で、高麗川・葛川下流の拠点的な集落と考えられる、まます遺跡や築地遺跡でも検出されていない。古代高麗郡の中核部を擁する南隣の日高市においても、その検出は未だない。発見されるもされないも、偶然と言ってしまうとそれまでだが、低台地部に展開する遺跡群とは隔絶した立地の特異性などを考慮すれば、むしろ後に触れるよ

うに、看過できない重要な意味を持つものと評価すべきだろう。

中尾遺跡の乗る尾根状の小台地は幅が狭く（低地部との境界部分でも200 m以下）、遺跡の西側は台地が括れて細くなり、東側は調査区から続く緩斜面が広がる。この緩斜面を中心に東西約190 m、南北約120 mが登録された遺跡の範囲で、今回の調査はほぼその西端が実施対象であった。検出状況から見て、住居跡群が調査区の東西、特に東側に展開していることは明らかである。但し、分布の密度はさほど濃密とはいえず、集落としては小規模と推測される。

出土遺物から推して、中尾遺跡の集落は8世紀第Ⅲ四半期に突如として出現（第1次集落）、一時期のみで継続せずに廃絶、その後、9世紀第Ⅱ四半期に至り再び営村（第2次集落）、やはり長期間続くことなく第Ⅲ四半期以降に再度廃絶したものと考えられる。

調査の及んだ範囲での所見であるため、時期的に場所を変えて住居が構築され、集落の中心も調査区外へ移動した可能性は否定できない。確かに、調査区内でも標高の低い場所に奈良時代、それより高い場所に平安時代の住居跡がまとまる傾向は看取される。しかしながら、中尾遺跡は狭い可住地であること、第1次集落に先行する時期や第1・2次の中間時期、第2次集落に継続する時期、それぞれの遺物が全く見られないことなどから、未調査部分を含めた集落全体の変遷も、ほぼ上記のように捉えて大過ないと思われる。

（3）中尾遺跡と東原遺跡

中尾遺跡で検出された住居跡、また集落としての特徴は以上のとおりである。既に触れたように、中尾遺跡の北側約300 mには、幅の狭い開析谷を挟んで東原遺跡が存在する。両遺跡は近距離にあるというだけでなく、集落としての共通性・相似性が極めて強い。このため、中尾遺跡の内容を繰り返し述べることにものなるが、両集落

の変遷をまとめると、

- ①集落は8世紀第Ⅲ四半期、突如として出現する（第1次集落）。この時期に該当する住居跡は中尾遺跡が2軒、東原遺跡が3軒である。その後、集落は継続せずに廃絶する。
 - ②9世紀第Ⅱ四半期、これもまた突然のごとく集落が営まれだす（第2次集落）。この時期に該当する住居跡は中尾遺跡が2軒、東原遺跡が1軒である。続く第Ⅲ四半期には中尾遺跡で3軒、東原遺跡で4軒と僅かながらも住居の増加、集落の拡大傾向を窺わせるが、時を経ずに廃絶、再び集落が営まれることはなくなる。
- ということになる。

先に、廃絶時期の住居跡は調査区外に存在する可能性もあるとした。しかし、隣接する二つの遺跡で同一の集落変遷が認められる事実を、単なる偶然として一蹴することはできないだろう。両遺跡の同一性は、上に示した集落変遷の妥当性を証するものと理解したい。

従って中尾・東原の両集落は、それぞれが独立・完結した自然発生的なものなどではなく、何らかの理由により意図的にこの地に営まれた、一連一体の存在（村落）と判断されるのである。

調査が行われていないため詳細は不明ながら、東原遺跡の東方約160 mの同一台地上に所在する本社遺跡も、やはり奈良・平安時代の遺物が散布することから、ここに含まれる集落跡の可能性はある。これらを一つのまとまり（村落）として見た場合、分住の理由は地形的制約による、遺跡個々の可住地の狭さだけではないように思われる。多くの憶測に過ぎないが、分住の背景には集団の性格や、編成された「戸」の相違などが潜在するのではなかろうか。

中尾遺跡からは、毛呂山町・日高市を通じて初となる鍛冶工房跡が検出された。唯一、職業的な要素を備えてはいるものの、検出は1軒のみであり、專業集団を想定するには些か心許ない。

(3) 高麗郡と中尾・東原遺跡

霊龜二年(716)五月十六日、駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野七カ国の高麗人1799人を武蔵国に移し、新たに高麗郡が置かれる。高麗郡は、現在の日高市・飯能市を東流する小畔川(第2小畔川や南小畔川を含む)流域を中心とする地域と考えられている。

高麗郡建郡以前に希薄であった小畔川流域の遺跡分布は、8世紀第I四半期を初現に、奈良～平安時代を通して急激な増加を示す。

小畔川流域同様、前代の集落が殆ど見られなかった毛呂山町側の高麗川左岸及び葛川流域でも、高麗郡の設置を契機に突如として集落の形成が始まり、平安時代にかけて急増していく様子が窺える。毛呂山町東部の平坦な台地上では、上殿遺跡・表A遺跡・表B遺跡・まます遺跡・築地遺跡などが、丘陵から続く標高の高い台地上には中尾遺跡・東原遺跡・本社遺跡などが、それぞれ形成されていく。このうち、最も早く集落が形成されるのは、中尾遺跡の東方約2.3kmに位置する上殿遺跡(8世紀第I～II四半期)、これに隣接する表B遺跡(8世紀中葉)である。この地域の拠点的な集落となるまます・築地の両遺跡は、9世紀を主体とするので、高麗川左岸の開発は上殿・表B遺跡から、次第に下流へ向かってなされていったと考えられている。

これに対し、毛呂山町北方の越辺川流域は様相が異なっている。この地域は町内で最も発達した低地が広がり、兩岸には大類・川角・西戸などの大規模古墳群が分布している。奈良・平安時代の集落も、古墳時代の集落や古墳群の分布を踏襲するように営まれており、前代からの強い継続性を窺うことができる。

このことから、高麗川・葛川流域は新来の集団による新たな開発地域、越辺川流域は先住集団により継承された伝統地域、と捉えることができよう。毛呂山町一帯は入間郡高階郷に含まれると考

えられているが、奈良・平安時代の遺跡分布を見ると、両者の間にはかなり広い空白部がある。ここに、高麗郡と入間郡の郡界を想定することも可能ではなからうか。

ただ、入間郡が高麗郡設置において、管掌・保護育成の立場にあったという指摘もあるので、あるいは高麗川・葛川流域における集落の出現・急増も、高度な技術を携えてやってきた高麗人の指導の下、入間郡が自ら、郡内の空閑地であった同地域の開発へ乗り出したとことを示しているのかもしれない。

いずれにせよ、高麗川・葛川流域の新たな入植・開発が、高麗郡の動向と密接に連動していたことだけは確実である。

(4) 大寺廃寺と中尾・東原遺跡

上述のように、高麗川・葛川流域が高麗郡に含まれていたと断言はできないものの、東原・中尾の両集落が上殿遺跡・表B遺跡・まます遺跡・築地遺跡など、下流部に分布する諸集落とは大きく隔たる立地、また環境下に営村されていることは等閑視できない。分布上も孤立性が窺えるなど、特異な一群を形成しているからである。そこで注意されるのが、埼玉県選定の重要遺跡、大寺廃寺の存在である。

高麗郡内では、女影廃寺・高岡廃寺・大寺廃寺が建郡間もない8世紀の前半～中頃、次々と建立されていく。女影廃寺は、律令政府の影響を受けて創建された郡(官)寺的性格の強い寺院、高岡廃寺は僧勝楽の菩提寺(私寺)、大寺廃寺は高麗氏の氏寺と考えられている。

大寺廃寺は中尾遺跡の南西約1km、高麗川の支流である宿谷川の北岸、標高90～100mの毛呂山丘陵南端の緩斜面に立地している。遺跡の範囲は日高市大字山根字下大寺を中心に、隣接する毛呂山町葛貫まで及んでいる。江戸時代の地誌『新編武蔵風土記稿』葛貫村の項には、小名として大寺と下大寺が挙げられ、大寺の割注には「南方にあ

る唱なり、是も彼寺跡ゆへの名なるべけれど傳へなし」とある。「彼寺」とは、隣接する大谷木村に所在する寶福寺（現存）のことである。また、明治八年（1875）以前の村々の様子を記した『武蔵国郡村誌』には、上大寺の字名も加えられている。現在、これらの小名は日高市山根地区の小字となっている。

大寺廃寺では、毛呂山町・日高市両教育委員会によって、これまで4回の発掘調査が実施されている。検出された主な遺構は、3間（6.9 m）×3間（7.8 m）と4間（10.2 m）×5間（12.5 m）の礎石立建物跡が各1棟、雨垂れの配石を伴う建物遺構、方形の配石列を二重に巡らせる建物遺構（外側で東西8.4 m、南北9.3 mと推定）などである。礎石立建物跡のうち、3間×3間のものは多宝塔や三重塔、4間×5間のものは金堂、また雨垂れの配石を伴う建物遺構は講堂、それぞれの可能性が指摘されている。不確定要素が多いとはいえ、調査から窺われる大寺廃寺の姿は、複数の堂塔を備えた本格的な寺院だったようである。

寺院の創建は、出土した軒丸瓦から8世紀第Ⅱ四半期とされているが、1点のみしか確認されていない。このため、『日高市史』（原始・古代資料編及び通史編）はこれを疑問視し、寺を運営する環境が整うのは8世紀後半以降で、瓦葺き建物の造営もなかなか進まなかったとしている。そして、伽藍等を整え本格的な瓦葺き寺院になっていった時期は、出土した瓦類の主体となる9世紀後半に置いている。

創建時期が不明確とはいえ、上記の所見を中尾・東原両遺跡の調査成果と比較してみると、次のような興味深い事実が表出してくる。

①大寺廃寺の造営は、8世紀の後半以降である。

中尾・東原村落は8世紀第Ⅲ四半期に突如として出現し、継続することなく短期間のうちに廃

絶する。

②本格的な瓦葺きの寺院として、大寺廃寺の伽藍が整備されだすのは9世紀後半とされる。廃絶していた中尾・東原の村落は、9世紀第Ⅱ四半期に至り再び形成されだす。しかし、これも第Ⅳ四半期を俟たずに廃絶し、以後は集落が営まれることはなくなる。

③大寺廃寺と中尾・東原の村落は分布・立地上、孤立性を帯びた一つのグループに括ることが可能である。

つまり、大寺廃寺の造営と中尾・東原村落の突発的な出現時期、また大寺廃寺の本格的な瓦葺き寺院への整備と、中尾・東原村落の再形成の時期はほぼ一致し、それ以外の時期は村落が廃絶しているということである。これも、中尾・東原両遺跡の集落内容が一致することと同様、単なる偶然ではないだろう。立地・分布上、一つの遺跡群を形成していたと推測されることから、両者が極めて強い関わりを有していたのは疑いない。

大寺廃寺の創建、また伽藍整備を伴う本格的な瓦葺きの寺院化に際し、これに携わった人々の居住したのが中尾・東原の村落だったのではあるまいか。

中尾遺跡には鍛冶工房跡があり、刀子や釘と思われる角棒状の鉄製品が出土している。一方、大寺廃寺からも多くの鉄釘が出土している。需要と供給の関係が成り立つと考えたいが、如何せん、鍛冶工房跡の検出は1軒に過ぎない。少ない工房で需要を賄えたとしても、検出住居数に占める割合から見れば、既述のように、專業鍛冶集団の居住を想定することは難しいだろう。

なお、言われるように大寺廃寺を高麗氏の氏寺としてよければ、関連性の強い中尾・東原の両集落もまた、高麗郡に属したムラと考えてよいのではなかろうか。

引用・参考文献

- 蘆田伊人編 1963『新編武蔵風土記稿』第9巻 雄山閣
- 金子直行 2001『まます遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第242集
- 埼玉県 1986「小田原衆所領役帳」『新編埼玉県史』資料編8 中世4付録
- 埼玉県教育委員会 1988『埼玉の中世城館跡』
- 埼玉県県史編さん室 1982『埼玉県古代寺院調査報告書』
- 埼玉県神社庁神社調査団編 1986『埼玉の神社 入間・北埼玉・秩父』埼玉県神社庁
- 埼玉県立図書館 1954『武蔵国郡村誌』第4巻
- 埼玉県立歴史資料館編 1982『埼玉県歴史の道調査報告書 県内鎌倉街道伝承地所在確認調査報告書』埼玉県教育委員会
- 埼玉県立歴史資料館編 1983『鎌倉街道上道』歴史の道調査報告書 第1集 埼玉県教育委員会
- 佐藤春生 1995『毛呂山町町内遺跡発掘調査報告書(2)』毛呂山町埋蔵文化財調査報告 第11集
- 佐藤春生 1996『毛呂山町上殿遺跡』毛呂山町埋蔵文化財調査報告 第12集
- 佐藤春生 1996『毛呂山町町内遺跡発掘調査報告書(3)』毛呂山町埋蔵文化財調査報告 第14集
- 佐藤春生 2000『毛呂山町町内遺跡発掘調査報告書(5)』毛呂山町埋蔵文化財調査報告 第20集
- 佐藤春生 2009『毛呂山町町内遺跡発掘調査報告書(6)』毛呂山町埋蔵文化財調査報告 第22集
- 鈴木秀雄・富田和夫 1982『伴六遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第11集
- 大護八郎・高橋一夫 1978『高岡寺院跡発掘調査報告書』高岡寺院跡発掘調査会
- 中平 薫ほか 1982『大寺廃寺―第1次発掘調査概報―』日高町埋蔵文化財調査報告書 第2集
- 中平 薫ほか 1983『若宮―第3次発掘調査概報―』日高町埋蔵文化財調査報告書 第5集
- 中平 薫ほか 1984『若宮―第2次発掘調査報告―』日高町埋蔵文化財調査報告書 第7集
- 中平 薫ほか 1984『大寺廃寺』日高町埋蔵文化財調査報告書 第8集
- 中平 薫 2003『常木久保・稲荷・神明』日高市埋蔵文化財調査報告書 第31集
- 日高市 1997『日高市史』原始・古代資料編
- 日高市 2000『日高市史』通史編
- 村木 功ほか 1983『伴六遺跡』毛呂山町埋蔵文化財調査報告 第1集
- 村木 功ほか 1985『大寺廃寺』毛呂山町埋蔵文化財調査報告 第2集
- 村木 功 1988『毛呂山町の遺跡―遺跡詳細分布調査報告書―』毛呂山町埋蔵文化財調査報告 第5集
- 村木 功 1990『毛呂山町町内遺跡郡発掘調査報告書I』毛呂山町埋蔵文化財調査報告 第7集
- 村木 功・橋澤道博 1995『まます遺跡』毛呂山町埋蔵文化財調査報告 第10集
- 山本 禎 2009『まます遺跡II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第358集
- 吉川弘文館『続日本紀』前篇〔新訂増補 国史大系〕普及版

写真図版



1 調査区全景 (1) (南から)



5 調査区北東部全景 (北から)



2 調査区全景 (2) (北東から)



6 調査区中央部土壇群 (西から)



3 調査区全景 (3) (北から)



7 第1号住居跡 (1) (南から)



4 調査区南半部全景 (北西から)



8 第1号住居跡 (2) (南から)

図版 2



1 第1号住居跡カマド (南から)



5 第1号住居跡遺物出土状況 (4) (西から)



2 第1号住居跡遺物出土状況 (1) (西から)



6 第2号住居跡 (西から)



3 第1号住居跡遺物出土状況 (2) (西から)



7 第2号住居跡カマド (西から)



4 第1号住居跡遺物出土状況 (3) (北西から)



8 第3号住居跡 (南から)



1 第3号住居跡カマド(南から)



5 第3号住居跡遺物出土状況(4)(北西から)



2 第3号住居跡遺物出土状況(1)(南から)



6 第3号住居跡鍛冶炉跡(1)(南から)



3 第3号住居跡遺物出土状況(2)(南から)



7 第3号住居跡鍛冶炉跡(2)(西から)



4 第3号住居跡遺物出土状況(3)



8 第3号住居跡鍛冶炉跡断ち割り(南から)

図版 4



1 第4号住居跡（西から）



5 第4号住居跡遺物出土状況（3）（西から）



2 第4号住居跡カマド（西から）



6 第5号住居跡（西から）



3 第4号住居跡遺物出土状況（1）（西から）



7 第5号住居跡カマド（西から）



4 第4号住居跡遺物出土状況（2）（北から）



8 第5号住居跡遺物出土状況（西から）



1 第6号住居跡 (西から)



5 第6号住居跡カマド2 (南から)



2 第6号住居跡遺物出土状況 (西から)



6 第7号住居跡 (南から)



3 第6号住居跡カマド1 (1) (西から)



7 第7号住居跡遺物出土状況 (1) (南から)



4 第6号住居跡カマド1 (2) (西から)



8 第7号住居跡遺物出土状況 (2) (北から)

図版 6



1 第1号溝跡(1)(南から)



5 第3号溝跡(西から)



2 第1号溝跡(2)(東から)



6 第4号溝跡(西から)



3 第2~5号溝跡(西から)



7 第5号溝跡(西から)



4 第2号溝跡(西から)



8 第7号溝跡(西から)



1 第5号土壇（南から）



5 第16・17号土壇（東から）



2 第6号土壇（南から）



6 第18～20号土壇（南から）



3 第7・11・12・14・15号土壇（南から）



7 第21・22号土壇（南から）



4 第13・23号土壇（西から）



8 第24号土壇（北から）

図版 8



1 第 25・26 号土壙 (南から)



5 第 42・43 号土壙断面 (東から)



2 第 25 号土壙 (南から)



6 第 45 号土壙 (南から)



3 第 26 号土壙 (南から)



7 第 46 号土壙 (南から)



4 第 29 号土壙 (南から)



8 第 47 号土壙 (南から)



1 第49・50号土坑（南から）



5 第57号土坑（1）（南から）



2 第51号土坑断面（東から）



6 第57号土坑（2）（東から）



3 第51号土坑（南から）



7 第65号土坑（1）（南から）



4 第52号土坑（南から）



8 第65号土坑（2）（東から）

图版 10



1 第1号住居跡 (第9图1)



5 第1号住居跡 (第9图5)



2 第1号住居跡 (第9图2)



6 第1号住居跡 (第9图6)



3 第1号住居跡 (第9图3)



7 第2号住居跡 (第10图)



4 第1号住居跡 (第9图4)



8 第2号住居跡 (第10图5)



1 第3号住居跡 (第12图1)



5 第3号住居跡 (第12图5)



2 第3号住居跡 (第12图2)



6 第3号住居跡 (第12图6)



3 第3号住居跡 (第12图3)



7 第3号住居跡 (第12图7)



4 第3号住居跡 (第12图4)



8 第3号住居跡 (第12图10)

图版 12



1 第3号住居跡 (第12图11)



5 第3号住居跡 (第12图20)



2 第3号住居跡 (第12图)



6 第4号住居跡 (第15图1)



3 第3号住居跡 (第12图15)



7 第4号住居跡 (第15图2)



4 第3号住居跡 (第12图)



8 第4号住居跡 (第15图3)



1 第4号住居跡 (第15图4)



5 第5号住居跡 (第16图1)



2 第4号住居跡 (第15图7)



6 第5号住居跡 (第16图2)



3 第4号住居跡 (第15图)

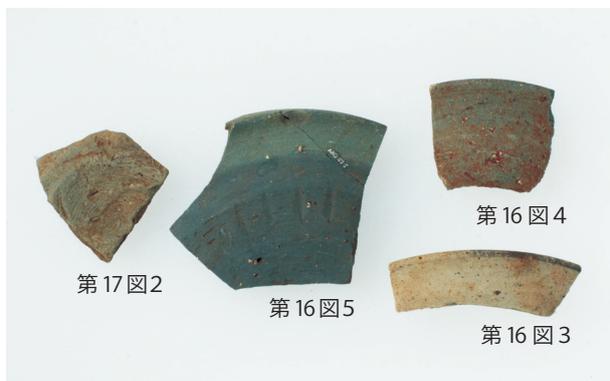


7 第6号住居跡 (第17图1)



第10图4 第12图18 第12图19 第15图9 第15图10

4 第2~4号住居跡



8 第5·6号住居跡



1 第7号住居跡 (第19图1)



5 第7号住居跡 (第19图5)



2 第7号住居跡 (第19图2)



6 第7号住居跡 (第19图7)



3 第7号住居跡 (第19图3)



7 第7号住居跡 (第19图8)



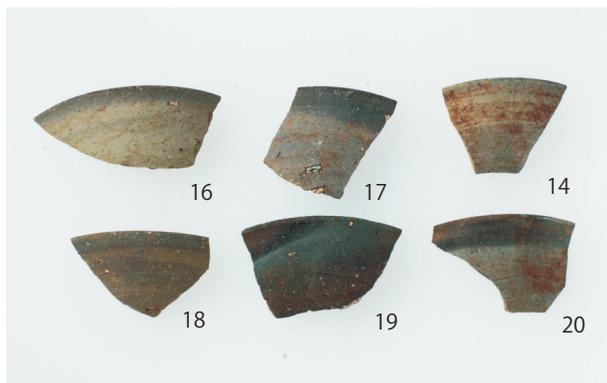
4 第7号住居跡 (第19图4)



8 第7号住居跡 (第19图10)



1 第7号住居跡 (第19图11)



5 第7号住居跡 (第19图)



2 第7号住居跡 (第19图12)



6 第7号住居跡 (第19图)



3 第7号住居跡 (第19图13)



7 第7号住居跡 (第19图29)



4 第7号住居跡 (第19图)



8 第7号住居跡 (第19图32)

图版 16



1 第7号住居跡 (第19图35)



5 第7号住居跡 (第20图)



2 第7号住居跡 (第19图)



6 第7号住居跡 (第20图42)



3 第7号住居跡 (第19·20图)



4 第7号住居跡 (第20图39)



7 第7号住居跡 (第20图43)



1 第7号住居跡 (第20図44)



5 第4号溝跡 (第31図)



2 第7号住居跡 (第20図45)



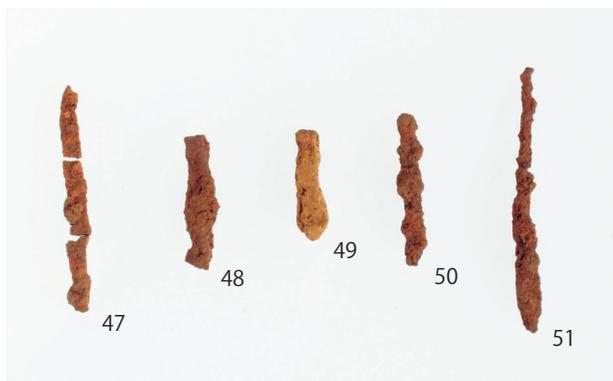
6 第65号土壙 (第31図3)



3 第7号住居跡 (第20図46)



7 グリッドほか (第31図)



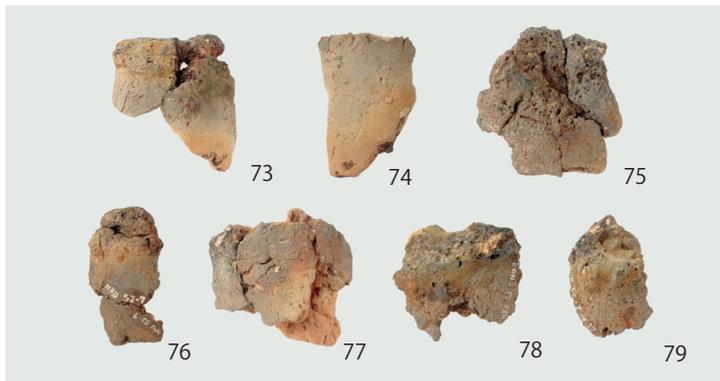
4 第7号住居跡 (第20図)



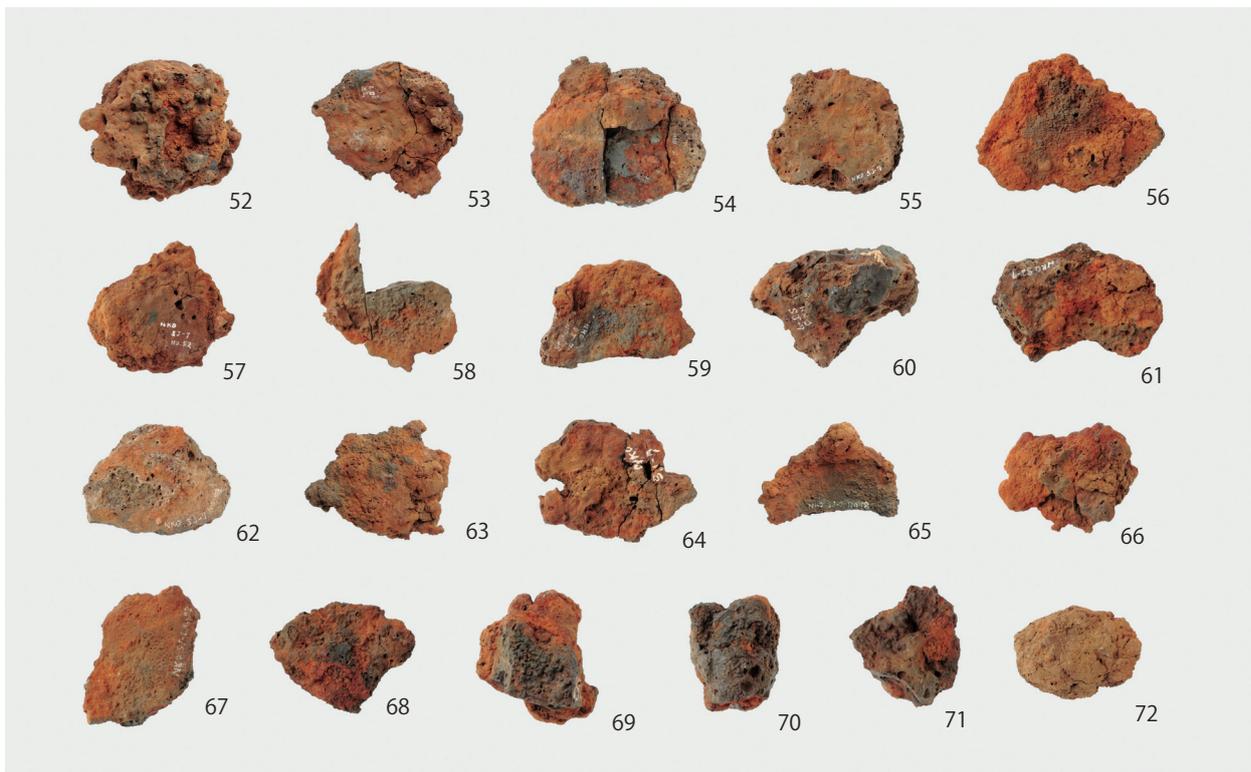
8 グリッドほか (第31図)



1 第3号住居跡 (第13图)



2 第7号住居跡 (第21图)



3 第7号住居跡 (第21图)



4 第3号住居跡
砂鉄



5 第3号住居跡
粒状滓



6 第3号住居跡
鍛造剥片 (砂鉄剥片)



7 第3号住居跡
鍛造剥片 (鉄粒剥片)



8 第7号住居跡
砂鉄



9 第7号住居跡
粒状滓



10 第7号住居跡
鍛造剥片 (砂鉄剥片)



11 第7号住居跡
鍛造剥片 (鉄粒剥片)

報告書抄録

ふりがな	なかおいせき							
書名	中尾遺跡							
副書名	地方特定道路（改築）整備工事（主要地方道飯能寄居線）関係埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第381集							
編著者名	劔持 和夫							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台四丁目4番地1 TEL 0493-39-3955							
発行年月日	西暦2011（平成23）年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかおいせき 中尾遺跡 第1次調査	さいたまけん 埼玉県 いるまぐん 入間郡 もろやままち 毛呂山町 おおあざつづらぬき 大字葛貫 ぼんち 463-1番地 ほか 他	26	011	35°55'36"	139°19'55"	20030922 ～ 20031226	2,700	道路整備
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
中尾遺跡 第1次調査	集落跡	奈良時代	住居跡	2軒	土師器・須恵器		平安時代の住居跡の1軒は、毛呂山町では初の検出となる鍛冶工房跡。集落は大寺廃寺と関連か。	
		平安時代	住居跡 土壇	5軒 7基	土師器・須恵器・瓦 羽口・鉄製品			
		近世以降	土壇 溝跡	61基 7条	陶磁器・瓦			
要約	<p>中尾遺跡の所在する毛呂山町葛貫地区は、ほぼ関東山地と関東平野が接する部分に位置している。遺跡は南方を東流する高麗川の支流、葛川によって開析された幅の狭い、毛呂台地の一枝台上に立地する。</p> <p>調査では奈良・平安時代を中心とする集落跡が検出された。高麗川・葛川流域では先行する集落跡はほとんど見られず、奈良時代になって突如出現し、平安時代にかけて急増する傾向が認められる。これは、霊亀二年（716）、現在の日高市や飯能市を中心に設置された高麗郡の動向と一致する。本遺跡が高麗郡に包摂されるか否か、なお検討を要すが、集落の形成は同郡の設置と深い関わりがあると思われる。本遺跡の南西約1kmには、高麗氏の氏寺とされる大寺廃寺が存在する。同廃寺からは多くの瓦が出土しているが、当遺跡や北隣する東原遺跡でも同時期の瓦が出土しており、その関連性が注意される。また、平安時代の住居跡のうちの1軒は、毛呂山町では初の検出となる鍛冶工房跡である。</p>							

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第381集

中尾遺跡

地方特定道路（改築）整備工事（主要地方道飯能寄居線）関係
埋蔵文化財発掘調査報告

平成23年3月25日 印刷

平成23年3月31日 刊行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台四丁目4番地1
0493(39)3955

<http://www.saimaibun.or.jp>

印刷／山進社印刷株式会社